

神 祭

森 田 保 次

I 神 社

一、西 丘 神 社 郷社 西岡村赤城塚

祭日 三月四日、九月十九日

祭神 大己貴命、豊城入彦命、高木神、磐裂神(以上旧赤城神社)

大日灵命、保食命(以上神明宫)

大雷命(雷電社 悪途)

菅原道真(天神社)

倉稻魂命(稻荷社 山崎)

弥都波能女命(水神社 未社)

木花咲耶姬命(浅间社 恶途)

猿田彦命(猿田彦社 恶途)

末社 道祖神社、湯殿神社、琴平神社

二、除 川 神 社 除川字口伝

祭神 大己貴命 豊城入彦命 高木神 磐裂神 菅原道真 木花咲

耶姬命(浅间) 鷲宮神社 品陀别命(八幡社) 大山祇命

(山神) 大日灵命(神明社) 市杵島姬命(殿島社、弁天)

三、八 幡 宮 大 曲

祭日 三月十五日、八月十五日
祭神 菅田别命

四、長 柄 神 社 鎌字西新田蓼沼

祭日 九月十九日

祭神 事代主命 大日神社(湯殿山神社勧請)

末社 菅原神社、稻荷神社、道祖神

五、一 峯 神 社 峯

祭日 九月十九日

祭神 天津児屋根命 大日灵命 大物主命 大山祇命

末社 富森稻荷、天神社、稻荷社、浅间社、道祖神

六、加 茂 明 神 社 北海老瀬

祭神 别雷神

七、高 鳥 神 社 高 鳥

祭日 一月二十五日、三月二十五日

祭神 菅原道真、大国主命、伊弉册命、菊理姬命、事代主命、迦具

土命、石裂命、根裂命、弥都波能女命、菅田别命、倉稻魂命

大雷命、木花咲耶姬命、大山祇命、少那彦命、大己貴命、素

靈鳴命、市杵島姫命、大山咋命、国常立命、大日靈命

八、雷 電 神 社

板倉字雲間

祭日 正月十五日、四月朔日

祭神 火雷神、大雷神、別雷神、伊弉册神、建角身神、天水分神、菅原道真(以上合伊前田祭神)、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、大日靈命、倉稻魂神(稻荷社、石塚) 大山咋命(日枝社、小太子) 弥都波能死神(水神、川入) 齊庭神社(西原)

末社 菅原社、八幡社、稻荷社(特別保護建造物) 琴平社殿島社

九、長 柄 神 社

初谷字北

祭日 三月十九日

祭神 事代主命

一〇、淡 島 神 社

初谷字中

祭神 少彦名命

一一、佐 多 彦 神 社

初谷字内谷

祭神 猿田彦命

一二、野 城 宮 神 社

初谷字本郷

祭神 武内宿弥

一三、長 柄 神 社

岩田字嘉替

祭日 二月十日

祭神 事代主命

一四、八 坂 神 社

岩田字北通

祭神 素盞鳴命

一五、神 明 宮

岩田字風張

祭神 大日靈命 豊受姫命

一六、浅 間 神 社

岩田字天神下

祭神 木花咲耶姫命

一七、敵 島 神 社

内藏新田字原橋下

祭神 市杵島姫命

一八、菅 原 神 社

内藏新田字瀬ヶ谷

祭神 菅原道真

一九、雷 電 神 社

西國新田字悲途

祭日 三月七日、九月十九日

祭神 大雷神、保食神、菅原道真

二〇、長 柄 神 社

細谷字宮前

祭日 三月十日、九月十九日

祭神 事代主命

Ⅰ 信仰関係のことは

- おくんち 秋祭。餅を供える。お供餅の外にあんころ餅（とりぐるみ）を作る。これが食料。九月九日（初ぐんち）九月十九日（中ぐんち）九月廿九日（しまいぐんち）このどの日か村によつてちがう。夜はうどん。
- おひまち いろ／＼の祭の日。
- ものび おくんち、おひまち、その他かわりものつくつて神仏に供え、労働を一日または半日休むので、あす日（遊日）ともいう。
- かわりもの 神仏の祭その他もの日に作る日常食とちがった食物。昔は麦飯に味噌汁と漬物が常食だったから、飯は米飯、小豆飯、赤飯もかわりもの。副食物は、けんちん、きんぴら、天ぷら（つけあげ）。
- あげもん 神仏に寄進の品。
- うかがい 神意を占うこと。
- えい 宵宮祭の晩。昼中に明日の本祭の準備をととのえ、夜は必ず「かわりもの」をととのえ、神棚に燈明をあげる。
- えんぎ 家の特異なしきたり。胡瓜を食はないとか、とうもろこしを作らないとかいうことが家によつて守られる。
- おかまのだんご 十月十五日に釜神様に供える団子。釜神は非常な子福者とあつて、小さん団子を沢山あげる。
- おがみ 神官、行者等の宣詞、祭文の類。
- おさこ 神仏に詣る時に撒く米。
- おたきあげ 正月の松を集めて焚くどんど。
- おとか 狐のこと。おとかつき、おとか山。
- かざまつり 秋の取入前に行う風害除の祭。日取は定つていず、毎年ふれが出る。

- かびたりもち 十二月一日につく餅。
- さわり 物の崇りによつて起る災厄。原因には、人の怨（生霊、死霊）、動物の祟、木の伐採、移植、建築移転、神仏への非礼
- さんやまち 二十三夜待
- しつぼきり 尾の先の切れて丸くなった蛇。神の使だといつて子供も殺さない。
- しみずかり 初午にそなえる食物。大根をこれ専用の具でつきおろして煮て味をつける。これには節分の豆を必ず加える。
- しめす 神仏に供えた燈明を消すこと、決して口で吹きつけてはならない。
- せんだつ 富士、御岳等の行者。厄除、修葺等の信仰事務を頼む外卜占もやる。
- たつぜん 膳の底板の木目は必ず横にすべきもので、これを堅ることを忌む。
- てんじんやつこ ひよわの子を神仏の申子として、健康を祈る。天神さまにお願した子は髪を右左だけ残してすつたもの。
- てんのうさま おみこしのこと。
- どこうじん 土の神、時によつて居場所がちがひ、それを犯すとたたる。
- はっちようじめ お正月のお飾用として村社から頂いてくる幣束の一組
- まゆだんご まゆの形にこしらえた団子、正月の飾と、初午の供物。
- わらでっぼう 十月十日の晩（とうかんや）にわらを棒状に纏てしかりまいて、それで地面をたたきまわるもの。
- やしきちんじゅ 屋敷内に祀つた守り神。ふつうはいなり様と信じられ、家の先祖とは関係ない。普通宅地の北の隅にあり。その家がなくなつてもこれは残る。
- あまごい ひでりで困つた時、村中各戸一人参加する。水が多すぎ

るのが困る場合の多いこの土地では殆ど行わない。板倉の雷電神社は他地方の人たちが雨乞の際水をわけてやる。

○うじこ 氏子。現在では村民と範圍同じ。おびや(おびあき)の神参りに始まり、七五三、結婚当日は必ず参るが、外に定つて神に詣る日はない。氏子の中、神社を管理し、祭を計画、実施に任じるものが氏子惣代で、昔は家柄によつて代々これに任じていたが、現在

調査こぼれ話 (7)

長良神社の祭典費

長良神社は海老瀬の本郷コーチの神社である。現在の木まつりは四月二十八日(もとは二月二十八日)、夏まつりは七月二十八日で、やくじんよと称している。本郷は四コーチに分れていて、各コーチから一人ずつ祭典のトウヤクが出て、そのうちの一人がトウヤクトウパンになり、神王となる。このほかにトウパンというのが各コーチから一名ずつ四名で雑用をつとめる。次に、「長良社費台帳」(明治十七年八月につくられたもの)によつて、明治二十七年の長良神社の祭典費を記してみる。

- 長良社若ヶ年度祭典費
- 一金 五拾銭 旧正月十三日 御神酒料
- 一金 拾銭 神宮エノ納金
- 一金 参銭 炭代
- 一金 半紙 紙
- 式月
- 一金 拾五銭 ボンデン 御神酒料
- 一金 八銭 神宮ハボンデン納金
- 一金 貳銭 竹代
- 参月
- 雷電神木嵐除御札料
- 一金 四銭 式月初寅 御神酒 肴ハ其当番ニ於テ之ヲ負担ス
- 一金 貳拾五銭 三月中寅 御神酒料 肴ハ右同断
- 一金 貳拾五銭 四月末寅 御神酒 肴ハ右同断
- 五月
- 拾五銭 五月五日八張七五三 御神酒肴共

では材幹力量によつて割込める。然し、一旦この位置に割込むとこの位置を家に確保したい気持はある。神官は板倉神社や高島神社の如き専属は例外で、今では祭毎に参加する一員に過ぎないから、神官と祭神との特別な縁はない。祭の費用は氏子に適宜割付ける。これを集める方法をさしという。

- 一金 八銭 神宮ニ納金
- 一金 四銭 竹代
- 一金 五拾銭 御礼ぐり 御神酒料
- 一金 拾銭 肴代
- 六月
- 一金 拾五銭 六月十五日御礼別家 御神酒料
- 一金 拾銭 肴料
- 一金 拾貳銭五厘 雷電神社代参詣人へ賽物銭トシテ戻シ
- 一金 五拾銭 六月廿八日 疫神祭御酒料
- 九月
- 九月 拾銭 肴代料
- 九月 五拾銭 九月十三日 御神酒代 肴ハ当番ニ於テ負担ス
- 一金 拾銭 神宮ハ納金
- 惣計金四円参拾参銭五厘
- 規約説
- 第壹条 長良社之祭典費ハ若ヶ年度石之諸項ト相定候事
- 第貳条 長良社所有地ヨリ之作得ヲ以テ一切長良社祭典費ニ充ツ
- 第参条 若ヶ年之祭典費ハ右之諸項ノ外銀リ支払フ事得ス
- 第肆条 右諸項ノ外臨時祭典ハ特ニ惣会ヲ開キ協議スル事
- 第五條 其年之当役ニ當リタル人ハ即チ小作ヲ徴収シ而シテ其ノ小作ヲ売却シ祭典費ヲ支払ヒ其ノ加不足ヲ明帳ニシテ次ノ当役人等ニ引續キスル事
- 右件々ヲ誓約候上ハ後日ニ至リ決テ違變致間敷因テ氏子中一同歧ニ署名捺印スル者ナリ
- 明治廿七年午年五月

板本市 (外ニ二十三名連署省略) (井田)

命 名

I 地 名

一、旧伊奈良地区

1 岩 田

花和田、寄居、寺山、井戸畑、相ノ谷、沼田、姥木、曾根、草倉、向原、天神下、天神台、宿浦、通南、東院、北通、北浦、館街道、五味ノ木、西久保、市川田、道明、山ノ内、小橋、八反、骨積、五反田、間堀、下山、下山浦、小平、蒼替、靱谷、観音林、本台、新田前、風雲、長良、越中内、船山前、沼向、上川田、精進場、下川田、浮戸前

2 靱 谷

松前、北後、北、鎌田、ながれ、菰田、浦田、かば、小さいけ、遠板、向根、雷電ふち、高田、中堤、慶長、ぐみの木、原道、北曾根、北南、堀前、辻、大之田、えびすくい、佃田、町田、焼石、本内、宮ノ脇、早沼、権現塚、後安、道六神、薬師堂、宮前中、新井、畑ケ中、大寄、中目、河崎、栗崎、つぼしり、内谷、沼尻、新田裏、間谷、本郷、木ノ神、花見道、神明、大林、西林、中ノ条、中原、浮戸、獅子見、

森 田 保 次

鹿見、尉渡野、飯島

3 内藏新田

瀬谷具、三十日、大橋、百田内、原橋下、中道、八反田、樋口、佐渡、竜ヶ淵、鹿見、大林間、枝沼

4 板 倉

小保呂、貝柄、江上戸、藤株、台、中宮、土橋、東谷、藏殿、棧敷、北木戸、元屋敷、越潮台、沼通、川入、宮廻、中宮、屋敷東、仏木、漆畑、薬師堂、宮前、樋口畑、内谷、塚越、内御手洗沼、外御手洗沼、中島、曾根、長良前、藤ノ木、(内藤ノ木、外藤ノ木)、徳摩、花輪田、稲荷木、寺裏、下宿、石塚谷、稲荷塚、丸田、川入、裏谷、宿、大林、長林、稲荷林、大谷内、中耕地、大境、京塚、寄居、天神下、愛宕前、城ノ森、大同前、雲間、入ノ山、間ノ谷、伊勢前、宮下御手洗、入ノ山、南下保、大宿坊、西原、小蓮、亥ノ子、榎戸、雲間寄合、林崎、槐戸、小太子、山王裏、石塚、茶ノ木畑、大新田、立野、谷中、高間々、竜ヶ淵

二、旧大箇野地区

1 飯野

登戸、馬院、悪戸、城、瀬井呂、城ノ内、川岸、辻、新、大道、車口、南越光、松ノ木、中、侍辺、念行寺、岡、北越光、合ノ谷、伊勢ノ木、浦川田

2 大高島

島悪戸、本郷悪途、本郷、本島、八反、沼、権現、坪、呂、梁田、宇那根、高島、北根、番塚、谷中、薬師裏、深吉、丸谷新田、洗下、丸谷裏

3 下五箇

五箇、川入、小合地、富士宮、中道、株木、曾沼、樋ノ口前、樋ノ口、北坪、北田、中曾根、谷新田、中妻、越戸、上五箇、宇那根、堤外

三、旧海老瀬地区

間田、瀬ノ上、峯、天神悪途、上新田悪途、上新田、通八軒、通裏、道悦、三五郎、中新田、棧敷、中下、洗代、細谷、通純、下新田、土部、小橋、離山、山口、宿小橋、原太、中山、日影、桑ノ袋、東谷、頼母子、横手、本郷、仲伊谷田、山ノ神、仲谷田、沼郷、向曾根、枝沼、仲伊谷田悪戸、大谷、北

四、旧西谷田地区

1 除川

大巻、こいだまり、樋口、平沼、どぶ、こい沼、久こや、谷中、砂子、ざっこ沼、間々下、頭沼、西原、こつ沼、山崎下、北、地蔵堂、ねずみ塚、洗井、こしまき、あかきくぼ、西原、しほい、口伝、ひの木、山ノ木、伊勢原、天神前、天神東、天神合、天神台、川戸、北悪途、小悪途、北悪途、堤外、北原、八幡東、とつとこ、谷合、おりもと、北谷、鶯前、八幡北、八幡前、西久保、山ノ神前、尾崎、尾崎前、船渡上、悪途折木、堤内、船渡下、よこつつみ、入悪途、赤羽根、ながれ

2 西岡

坂下、前原、原、悪途、中妻、台、中岡、神明西、寺ノ下、赤城塚

3 西岡新田

山崎、新田前、三条目、かき田、あいの田、長岡東、亀子、和田、悪途

4 大曲

水沼、新道、中小蓋、三ツ又、飯島、三正房、西正房、内田、川田、大原、枝沼

5 大荷場

曾根南、浮へり、道下、堀下、道東、道西、中道、川田、上下、枝沼

6 細谷

高間、押切、蔵屋敷、松倉、大井柄、曲が、宮前

枝沼

7 難

西新田、とりのおき、道下、ながれ、申起、や中、獄の沖、瀬戸、橋場、沼向、麦生、上、内屋敷、中、屋敷内、下、とき屋敷、舟口、蓼沼、弥五宮、わせひし、みのわ、宮内、道陸神、大荷場、悪途、枝沼

五、地名について

1、この辺上・下^{かみ}・下^{しも}というのは、前橋地方で赤城を中心に北を上、南を下とするのと違い、川の流れを基準にするから、西が上、東が下である。家についても、かみんち（上の家）しもんち（下の家）という。

2、川、岡、神社等を中心に東西南北の外、南が前、北が裏（浦）または瀬戸等名づける。

3、各村にある「あく」と（悪途、悪戸）は、この辺では普通名詞で、「今年の洪水はでかかったから、またあくが大変できた」というように用いる。洪水の濁流が川岸に沈殿させた泥が積んで出来た所で、かなり広い地域を多い時は十センチ以上つみ上げ、よく肥えた土なので作物がよくできる。

4、や（谷）というのも下邑菜に多い地形で、低湿な排水の悪い所だから耕作には困難だけれど、作物はよくできる。下邑菜全体が昔はこのや（谷）であり、中でも現板倉町に含まれる地域は、板倉沼周辺の谷であった。大正年間にできた邑菜郡誌に「板倉は昔イトラ」といって伊度良の字を当てている中、これをイタタラと読むようになり今のように板倉となった」とあるが、偶然かも知れないが、イトラはアイヌ語で（パチエラ＝辞典）「河の大きいなる部分（湖の如き）」とある。

5、きには、耕地の目標に残した木の外に処という意味で用いた所がある。

6、おきには、居住地から遠くはなれた位置にできた田の外に、開墾地にも申おこし、午おきという風に名づけた。

7、ママという地形は、僅かであって地名になっている。

8、新道は、しんどうと言えば県道のこと、しんみちといえは、新しい道である。

9、コーチは耕地と書けば、耕作地のものであるが、大字の中の小区分で、居住地、宅地の集団の名である。「おらがこうち」等という。

10、海老瀬の地名については、勝道上人が日光へ行く途中この地で洪水に逢い渡りなやんでいると、海老が集まり、その背をわたって越えたという地名伝説があるが、地図を見ればわかる通り、この辺を大洪水が浸せば、ちようど海老のような形に水から残るころちがあるのである。

Ⅰ 人物評価、あだ名の資料

あだ名の問題は土地の人たちが、話すのを憚るので、別に方言の方からその資料を集めて見た。

○あおんぞう 血色の悪い人に対するさげすみの語。

○あまじよう 甘性。食物の嗜好が塩気の淡いのを好むこと。あまざの強いのを好むとは違う。「甘性は貧乏性」という俚言があり、農民は一般に辛性である。

○あらっばぎ 粗暴でとかく蛮力を振いたがる性格。行動にもいう。○いいかげん 言動に戯気が多く。真面目に正面通り受取りにくい人物。

○いし 汝という意味の代名詞。上邑菜では「にし」といったが、今は全く用いられなくなったのに、この地域では今も「いし」を君、お前の代りに用いている。

○いちだいうるぬき うるぬきは農業で作物を間引く意味の方言で、身代を祖父から孫へゆすり、子を除く相続法。二代目が娘へ婿を取

った場合等まゝ行われる。祖父が健在中子が先に死んで、やむを得ず家督が孫に行くといった事態にはこういわない。

○いっぶりゆう 一徹頑固に一風変わった態度や趣味を押し通す人物。斯くて時流を追わないとか、人が右と言えば故ら左という類。

○うずこへえこ 幼少な子供が沢山いて、いっもわいわいしている家庭。十才を頭に五人の子供とか、親が若くてまだ幼児が居るのに、長男の嫁もどん／＼産みはじめたといった家庭の風景。

○うっそり ほんやりほどではないが、細かいことに気のつかない人物。

○うっちやりっこ 捨児。

○うずぶれ 寒がりや。醜いほど着重ね、とかく火のそばにばかり寄りたがり、働くのを取う人。

○うらへら 表裏のある人物。

○えもち 家持隠居の略。隠居があととりを立て、一家を創立した分家の称。

○おうだい 物の使い方におうようで、やかましいことを言わない性格。振舞事や手伝人等に食物等を余るほど出し、寒い時には薪炭を

どんでん焚いても文句を言わない。

○おしやんぐり 反ったようなできのわるい顔。

○おぞばか 利口馬鹿。おぞいは賢い方言。人並以上の才能がある本人もそれを自覚していないが、困ったことばかりしてかす人物。

○おてんたら へつらいもの。

○かえりんぼう 訛ってけえりんぼう。一旦嫁して出戻っている女。

○かたばりっか 一度言出したら誰の言うこともきかないかたくな意地っばり。

○かんしや 思慮周密な人。

○ぎご 頑固意地っ張りの性格で言動に融通性のない人、かたばりっかより始末が悪い。

○きすっか 自己の背景、地位、財産、教養を鼻にかけて生意気な振舞う人物の態度。

○ぎやくえん 死んだ兄の妻とめあうこと。無論弟は兄の一切の権利義務をつぐ。当人同志の意志が全然無視されることは普通ではないが、家の都合が主とされた便法である。

○きよしよっべ 深辯家。特に食物、食器について病的なほど気になる性格。

○ぐしろう ぐしよつたれともいい、心得てはいるが実行できない、氣力の弱い性格。

○ぐれもく ならずものというほどではないが、言うことにもすることもにも信頼性がなく、正業はあってもあまり精を出さない人物。

○けち 音商のことではない。風変わりで、変てこな言動ばかりする人物

○ごこうおしみ 骨の折れる仕事をいやがって何とか工夫してはのがれようとす、性格的な骨惜しみ。

○さまくや 小才がぎま小器用なのを頼みとして、事ある毎に何とかうまく凌ぎぬける人物。

○ざっべえ 雑輩かもしれない。分際というほどの意味で「子供のざっべえに、生意氣だぞ」という風に使う。

○じゅうくう よけいなしやばりや、小しやくでませたこと。子供のくせに大人のまねばかりしたがったり、頼まれもしないのに人の世話をやくような動作。

○しよたれ なり形も、することも、しまりがなくてだらしない人物。

○しよっべえなし つまらないことをする人物。だめとわかっていることをぼんやりくりかえしたり、下らないことを無考えに口に出して人を怒らせたりする人物。

○しんたく 新たにできた分家。居宅と多少の財産を伴う。子供が自

力を持った家は村内に居住していてもしんたくといわぬ。

○すたりはらい 手のつかないほど不良化した人物。いつも迷惑をかける側からの評言。

○すえふろむこ でたり入ったりおちつかない婿。

○せこしり 寸暇を惜しんで働らく人。

○そつびよくりん よく間違えをおこす、早のみこみで軽はずみな人物。

○たなつちり 出っ尻のこと。

○だまぼう 役にたたない人物。

○たまま けちというほどではないが、物を使うのに細心の注意を払い、極度に無駄をさけると共に、万一を慮って物の用意に油断のないこと。

○だんなかぶ 村一般から「旦那」と敬称される貴録。いくら身上を仕出して「何さん」と名前と呼ばれ、村中誰も旦那と呼ぶものは無い中に、いくら零落しても村中旦那と呼ぶ家柄があった。

○ちだま 太っているが、ずんぐりと短かく年寄りみている人物。

○ちはえ 土地っ子ということ。

○ちやきちやき 名実伴った一流の人物。

○ちやん 父親を子供の呼ぶ名、母のおっかあと共に、これが農村の一般で、おとつあん、おっかやんは、少数の上級家庭に限られていたが、今は共にすたれて、かあちゃん、とうちゃんが普通になった。

○ちようせえほう お人よしをいいことにして、大勢が無遠慮に利用する人物。いやな仕事。面倒な仕事をみんなおっかぶせる。

○ちよちよう 軽卒で物好で、しなくてもいい仕事に手を出しては失敗する人物。

○ちよろつけ 目のはなせないほど、小まめにうごきまわる子供。

○づわる 陰険、意地悪、薄情等によって、とかく警戒を要する性格の人物。

格の人物。

○つかけまんが お互の責任なのはわかっているのに、自分だけは免れて誰かにやってもらおうとつとめること。

○てかねえ 片手不自由の人。

○でびてえ おでこ。

○どうけ 馬鹿にちかひ愚かしい人物、道化ともちがふ。どうすけともいう。

○としよりこども 老年になると子供のように愚にかえるということ。

○なんかん むつかしもの。何にでも必ず文句があつて承諾させるのに骨の折れる人物「なんかんばあが、やつと折れた」

○にせえ 青二歳の略らしい。若者を未熟者と押えていう。

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前にもあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわぬ

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前にもあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわぬ

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前にもあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわぬ

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前にもあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわぬ

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前にもあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわぬ

○はなつ枝ろ 食意地のいやしくきたないもの。

○ひけつとり 雞の一羽が何かの事情で仲間はずれになり、餌を食うにも遊ぶにも仲間と一所に振舞えなくなったのを言うのだが、転じて、何事も控え目に遠慮勝ちの態度をいう。

○ひだりっこぎ 左利のこと、みぎっこぎは用いない。

○ひょうげもん 固い約束、申合せを急に大した理由もないのに破る、不測な人物、あてにできない。「きゅうにひよげちゃって」と動詞にも使う。

○びりり 順位の最後。びりりっけつ。びりりっかす、ともいう。蚤の上りそこないの不良や、男女私通事件にもいう。

○べこ 順位の最後。しっぺこ。

○へだつたなか 一家親族中の血縁のない間柄。ぎりぎりの問題になると、つなごりの強さはしんに及ばないものと信じられている。

○へんぼらい なまて「へんぼれ」大用で困っていると思つて物を贈れば、つっ返すといつた変りもの。

○ぼくそ 急に身代を仕出しながら、衣食住の一切が昔の窮乏時代の状態を少しも改めないもの。農業で作る物資は有り余り俵等は土間に山と積んであつても、食器調度の類は余分のもがまるでなく臨時に来客等あれば近所へ借りに行くといつた家。ぼくそだじん。

○はつとれ 老いて役に立たなくなった人物、来元は聊を産まなくなつた老狸の称から転じたもの。

○みためし 親が件の嫁を入れるのに不安な場合の条件で、わるかつたら一定の期間内に破談にする不安定な嫁。「一年間はみためしと

いうことでやっときまつた」

○みより 親戚、血縁関係一切を包括する語。何かの縁のつながら

のあるものは総てみよりである。

○むてっこじ 無鉄砲で意地張りの人物。周到な準備工作を面倒がっ

て一挙に無理押にやる人物。年端も行かない子供に思い通りにやらせようと大人も堪えないような折檻をするような親。

○むふつきよ 無口で無愛相な人物、その裏には好人物を暗黙に承認されている含みがある。

○めしくいともだち 老年になつて公然とはあるが非公式に容れた配遇者。

○もうぞうもん つまらない非常識なことばかりやる人物。もうぞつことという語もある。発明工夫も成功して人を驚かすに至らず失敗ばかりしている中は、もうぞつことと評される。

○もかか 人をだましてはうまいことをやらうと、いつも金らんでいふような人物。

○もちあいじんしやう もらつたでもなく、くれたでもなく、男女両方で持寄つて作つた家庭。であいじんしやう。

○やきもちっこ 子の無い家庭で養子をもつたあとで生れた実子、養子をもらうとこれができるというので実子ほしさにわざともらうといふこともある。

○やせつぼね 労働に慣れないものや、病身のもの、止むを得ない事情で重労働をする時に、その様子に同情していう。

○やぶれまんが やけ気味の乱暴な言動。相談事をぶちこわすために非理は承知ではなく暴論。

○やもんが 条理の通らない言動。前項とちがい、本人には不条理の自覚がない。

○やろう 野郎、男の子のこと。やろうの癖にとか、家はやろうべえでとかいう。

○よくばり 1、品性のよくないやくざもの。2、役に立たない人物

や物。

○よめご 嫁のこと。姑の健在中は何人の子の母となつてもよめご

である。

○わかいんきよ 子の方が親を家に残して別居すること。普通一家の折合が悪く、風俗の絶えない時の窮余の方法で、いいこととは考えられない。大抵い嫁姑の折合が原因だから、嫁の里からの仕送りがないと続かない生活である。

○わたりもん 何処の馬の骨ともわからない素性不明の外來者
○わる 不良人物。

調査こぼれ話 (8)

村人足

むかしは村人夫といった。仕事としては、道普請・堀さらい・神社や寺の屋根替などがある。最近では、時期などについては、伍長があつまつて区長とともに相談してきめている。

かたいことをいってもなかなか実行できないので、懲罰はない。費用は等級わりで割りつけて、区費として徴集する。

村人足にはよんだころない事情のほかは出た。人足に出れば現在では五十円支給している。やむをえないときには女でも出た。

堀はらいは春の彼岸頃した。大雨がふると堀がかぶってしまったので、排水堀をはらった。このときは、竹の先に鎌をゆわいつけてはり草を刈った。これをもがりといった。

道普請は村道までした。
(大曲での開書)

海老瀬地区では村人足のことをヤクといい、誰がでてもしっかりた。義務ヤクというこぼがある。
(井田)

調査こぼれ話 (9)

性信上人坐像発見

調査第一日、女子美術大永井信一教授等の彫刻班は思わぬ大きな発見をした。それは、大字板倉宇大同の宝福寺太子堂から性信房の坐像が発見されたことである。

この像は、木彫坐像で破損度もひどいが、体内銘と底板銘で鎌倉時代の作が立証され、真宗関係の像として貴重である。更に親鸞上人の妻恵信尼の記した日記の「佐貫というところで云々」のことも親鸞回心の場所として問題にされたところであるが、この地方に親鸞が関東でもっとも信頼していた性信の像が発見されたことはその裏付資料としても貴重である。次にその判読し得た銘文を記すと左のとおりである。

底板の銘文

上野国佐貫庄板倉法福寺先師横曾根「性信上人御影第三度御彩色畢」

三度□□□延文六年辛丑二月十八日

為御師□□弘善提「弘化三丙午年 浅草報恩□町田十兵衛

体内の銘文

応永十六年癸丑三月廿八日第五ヶ度採色畢

御影尚貴命□作□□□ 住持美忍修之「壇那妙海

全「真別□佐貫氏□□□□□

文明六年十月廿八日修之任持榮□□□ 良有光□□

明徳三年壬申十二月八日第四ヶ度採色畢

担那佐師作依有美種子細有懸図 住持美賢修之堂□□

担那大功之間加形施丹青者也」□□□

空寂□□□

(近藤)

伝説・怪異・禁忌

長良様

尾瀬郡の東南部には長良神社（又は長柄）の分布が多い。藤原長良なる中央の公卿を祭神とし、土地とその他の関係をやや無理に結びつけて説明して居るが、私は久しくこれは「長柄の人柱」の伝説が流入、定着したものが成長したのではないかと疑っていた。しかるに最近、近藤喜博氏が実に見事にこの事を説明つけられたので、永年の疑問を一時に解き得て喜びに堪えなかつた。

しかし乍ら同地方に実際に長良なるものが治水の爲め犠牲者となつた伝説があつたならと思つて、今回の伝説調査に注意していたのであるが、幸せにもたつた一話であるが之を採集する事が出来た。海老瀬の下に於て一老人の言に洪水を防ぐ種々の方法を述べられた中に、「堤防を作る時にナガラ様を入れると崩れないようになるので、いよ／＼の時はそうしたという。」と聞いた。これこそ、この利根、渡良瀬の合流地域に多くの長良神社の存在を解く鍵であらねばならない。多年の洪水の暴威とその被害は幾多の防禦方法を考へたであらうが、畢竟は人力の限りを尽し、神秘の力にすがる迄に至つたに相違なく、堤防の人柱は現実に行われたものと私は信ずる。その人柱が神として仰がれるに至るのは当然であつたらうし、中央の長柄の人柱の説話の流入と共に、この犠牲者はナガラ様という代名詞によつて呼ばれたのに相違ない。これが長良神社となり、その祭神が歴史的人名に置き替へられた（その間に勿論長い年月と、平和時代の分社の多くが生じた後）のは時間の変化による結

果に他あるまい。

石亀

石亀の姿が刻られている。これは銘文から云つても時代から云つても住職御自身も云われているが光明真言の供養塔以外の何物でもないのであるが、水害過多の土地らしい伝説が出来ている。

伝説 寛文年間（塔に寛文十一年の記銘がある）荒井常石衛門なる漁



石亀の像
（宮田茂徳撮影）
寛文安楽寺の亀の像

師があり、早沼（ヒヌマ）に金の光の立つのを見た。側によつてみると、石の大亀であつた。奇瑞として村民と共に引上げて安楽寺の境内へ祀つた。其の後又大水があつた時、この亀が

今井善一郎
上野勇



「洪水に浮出た石亀」にのる

金光明真言塔

浮き出した。多くの人と共に光明真言を唱えて元の処へ祭り上げた。動かぬ様にと上に大きな石塔をのせておさえた。こ

の時亀に万能（農具）をつきさして引きよせたという穴が、今も石亀の尻の方にある。

この石亀は風邪の神様で毎月一日及び三月十五日が縁日で、焼き餅（ウドン粉か米の粉をこねてやいたもの）を上げ、竹筒に酒を入れたのを供えなどした。又オミエ（絵馬）なども多く上つていた。

この光明真言の立派な石塔はおそらく水害の鎮圧を祈念して立てられたものと解されるが、その年号から云っても、この説の発生は余り古くないものと解され、そのストーリーメーカーも大凡の方向がうかどえるように思われる。それは隣村赤羽に楠木正成の首級を祀ったという楠木神社の旧別当宝秀寺がこの安楽寺の末寺であり、安楽寺にも楠木様の首をかかしたという話があるという点などからみて、一連の説話連載者がこの地に住んで居たという推測がほのうかどえるのである。楠木神社は旧名野木神社である。

行人塚

行人塚は現在では伝説というより、信仰史の史実として研究すべきものとなっている。しかし文字に記されない史実は伝説の発生が容易で、

やはり一部分は伝説化されて語られているものが多い。

現在邑栗地方の山岳信仰には富士信仰が多く、これはおそらく徳川期の中頃から流行したらしく板倉町にも数箇の富士塚と浅間神社が存在している。しかしその以前又ある期間は富士信仰の流行に移行する間、出羽三山の信仰がこの地方にやゝ弘通していたものと思われる。その証明が行人塚である。

海老瀬地区中新田の長良神社の小丘は元來行人塚であつたらう。その塚辺に遺存する古石碑には正徳から、宝暦、明和、寛延の頃迄、賢海、胎藏海、正海、金剛海等戒号に海字を用いて明らかに羽黒行人たる事を示している。又一生仙行とか別行とか称しておそらく殺断ら其の他の一生の戒行をつづけた行人のこゝに住んだ事を証明している。

こゝの行人塚は外に行人沼が存在している。これは行人が永年かゝつて築いた堤が基礎になつた池で、洪水に対するこれら宗教家の苦心の様が偲ばれる。故老の言に行人が堤を守る一つの手段は経塚の作製であつた。小石の一個に一字ずつ経文を書いて埋め、その功験によつて堤防を守らうとするのである。行人池の畔にはその遺存も認められた。今一つの方法是人柱であつたらしい。所謂ナガラ様になるのは行人の仕事であつたといふ。板倉町に行人塚の多いのはこの種の特異原因のある事は認めたいかと思ふ。

大衛場の行人塚はその部落の南方の田の中にあつた。今、大日如来らしい像を彫つた小石碑が残つて居り「為長海菩提、千時延宝五丁酉年拾月吉日」とある。この塚は昭和五、六年頃開田して平にされたがその時錫杖、硯、摺鉢等が出土し、摺鉢の中に文字を書いた石が出たという。石碑から見ると墓地の如く、石経から見ると経塚の如くも考えられる。伝説は中山兵衛なる京都の公卿（といふ話）が流れて、こゝで修業しながら死んだといふ。この行人様は数十年前は業者非常に多く、念仏講中等も特別の和讃逸作つて之を信仰し、堂宇も作られた程であつたが、今はむしろ忘れられて田の中に孤影を立てゝいる。これも遺物から

みとおそく何かの念願のための信仰遺跡にちがひなく、勿論羽黒行人の仕業である。おそくはやはり治水と関係があるのであろう。

高島の行人塚は村の馬捨場という最も嫌悪されるような処にある。しかしこれは後者の地に前者が作られたのでなく、前者の跡の淋しさが後者に用いられたのであろう。今も荒蕪の草原に廃棄された地蔵が臥れている。この製作された寛延の頃は寒仏供養の為に作られたのであるが、それでも古い行人の精神遺跡は「諸定に入って苦を離れしむ、衆生を度して能く引導す」と慇かに台石の額銘に説く事が出来る。即ちこゝでも行人は定に入って衆生をわたす行跡をつんだのであつたらうと推測されるのである。こゝには伝説は煙滅していた。

自埋伝説

行人塚に所謂行人塚伝説（自埋伝説）が認められなかつた代りに、他に一つ自埋伝説を聞いた。但し、疑うらくはこれも亦行人塚の一つであるのではないかと思う。

伝説、大曲りの大日堂の北に三ヶ月様が祭つてある。こゝに祀られている人は大塚某氏の祖であるが、土中に生き乍ら埋められて「念仏がやみ証の音が絶えたら死んだと思え」とて入定したという。

青竜権現（一峯神）

権現様の正体

峯の大塚某氏の祖先の家に美女が訪ねて来て、泊めて貰いたいと言つた。泊めてくれれば家を栄えさせてくれるという。泊めた夜、見るなというのに見えなくなつて、その娘を見たら白い大蛇であつた。それからその家は栄えなくなつたという。

◎この伝説は婚説話が崩れたものと思われる。

鶏 禁 忌

峯の権現様は鶏を嫌う。峯の部落では鶏をかわない。飼うと蛇が出てのんでしまう。この部落は雀も住まない。神社にあげた散米（オサゴ）

もなくならずにある。

赤 不 淨

権現様は赤不淨が大嫌いである。女人の月のさわりの時は參詣してはいけない。学校の先生が御参りしようとして恰度月水中で石段を上れなかつた事がある。

又、出産のあつた家では二十一日間參拜出来ない。鯉西の神主さんが、こゝで拝んでいる中に急に寒気がして来ていられなかつたので家に帰つたら赤ん坊が出来ていたという。

権 現 沼

昔、大水があつて、あちこちの山が崩れたり流れたりした。椿の流山はその時流れていった山で、残つたのが離れ山となり、その跡が権現沼となつた。

△こゝに青竜権現の伝説と伝承をよせてみたが、この外、別記の梶貸し、ウナル木、竜灯籠等もこの権現関係の伝説である事を付記しておく。

梶 貸

峯の一峯神社の御手洗（ミタラセ）に膳棚という処がある。小さな池であるが、こゝは梶、鶺鴒やお梶を貸した処で、何人前貸してほしいと紙に書いて、この池の崖から投入れると必要だけ貸してくれたという。

山口某という家で梶の蓋をとつておいた処、その後貸さ



「梶貸伝説」のある膳棚のある沼

なくなつた。その家は火災にあつたが、その腕の蓋は今も残つてゐるといふ。

同一の話は又次のようにも伝えられている。

峯の権現沼は竜宮へつゞいていた。そのの藤棚という処に大きな亀が住んで居り、藤棚の貸借りをたのむと竜宮から運んでくれた。ある家でオヒラのカサ(蓋)を記念にしまつておいたところ、その後亀が出なくなつてしまつた。

弘法

九十九谷

昔弘法様が霊場さがしにこの土地に来た。八十八谷あれば霊場になるので、霊場にされては困るので、アマンジャクが一谷かくした。弘法様が勘定したが、八十七谷しかないので、八十八谷ある高野山へ行つて霊場を開いたといふ。

海老背

弘法様が霊場さがしに来た時、アマンジャクに谷をかくされたので、渡良瀬川が余り広くて越せなかつた。困つていたら、一匹の海老が出て来てその背中にのせて、今の頼母子の辺から藤岡の方へ渡してやつた。そこでこの辺の村をエビのセといふのである。

戌の日

島での云い伝えによると、この辺で戌の日に麦まきしないわけは、昔弘法様が支那へ渡つて麦を見て、余りめづらしい作物なので(その時分日本に麦はなかつたといふ)種をもらつてこようとしたら支那では許さないので内緒にフンドシの中へ入れて来た。それで麦にはフンドシがかゝつてゐる。その時犬が吠えたので止むなくその犬を殺して種をとつて来た。その為め今も戌の日に麦蒔きしない。この日に麦蒔きすると麦畑を犬が踏み荒らすといふ。

蚊の住まぬミツカ

板倉地方には洪水時避難場所である水塚は非常に多い。水塚は平常は格別の工作物たくたいの小山となり、木株に竹の生えているのが多い。従つて大部分の水塚は夏は当然蚊が多い。この中にあつて中新田の小林利郎氏方の水塚だけは不思議に蚊がいない。

これは昔弘法大師がこの地方に来た時、小林氏方の水塚に一夜の宿をとつた。しかるに蚊が多くて眠れない。そこで弘法様は加持してこの塚に蚊をいなくして下さつたといふ。それ以来この塚には蚊がいないのである。

枝垂桜

山口の学校へ前の枝垂桜は弘法様の生き枝といふ。弘法の杖をさしたのが根ついたのである。

忌み田(聖田)

ジャボン田

中新田字三五郎にある田。この田を買い又は耕作すると運が悪くなると思はれてゐる。この田を買つた人はよく寺を頼んで供養などしたが、やはり不幸が多かつた。ある時代は青年が作つた事があつたが、支部長さんが死んだ。土地改良をしたが、誰もがきらつて、換地の際にも少しでもこの田が自分のところに入るのをきらつて、この田だけは昔のままの形になつてゐるといふ。今は松安寺で作つてゐる。

伝説には、昔この田に堀があつて、その堀で六郎がたれ死した鬼だといふ。

富士見田

観谷の字堀前の中にある。古く富士塚があり、石宮もあつた。二坪ばかりの池が残つていたが、その周囲に田があり、一頃は柳が生え旗など上られていた。

この田を田植する時湧き水に富士山の姿が映つたといふ。この田も耕作者や所有者に不運を与えるといふ。二、三年作つては他に移る場合

が多い。某針医が買った事があつたが、娘が馬鹿になり血統が絶えたという。

なお、籾谷の隣の石塚での伝承によると、ある坊さんが諸国を漫遊して修行中、ここで病気で死んだ。供養してくれる人がいない。坊さんが死んだところに田圃ができて、そこをつくって供養してもらうために富士見田という。この名のいわれは、坊さんの死後を供養してくれたならばぶじに田圃がつくれるといひみ（カード）。

エンキ田（ジャンボン田）

石塚から飯島へ行く途中にある。昭和六年に千江田村の人の立てた「樺山大神」という石碑が立っている。この田は既に伝説は失われているが、これも奇妙に不運のまつわりついている田で、その不幸の状況を記すと、Aは息子が死んでBに売り、Bも亦子供が死んでCに売り、Cは内儀さんがポツタリ死んでDに売り、Dは親と内儀が死に、Eに渡るとその内儀さんが半年程病んだのでFに売り、Fは買ったが内儀さんに死なれてGに売ったという。これはごく抽象的に記したのであるが、信仰と心理作用の重複はこの種迷信を極度に重複させている。

インネン畑

これは樋の口にあり、つれ屋の跡で墓碑が二、三本ある。やはりインネン話がついていて手を出す人がなかつたが、N氏が耕作しているが現在は何の不幸もない。一反五、六畝の畑である。

樋の口にメクラツバタとて之を作ると盲目になるといふ畑の事を聞いたが、右のインネン畑との関係を知らない。

◎大久保にもイミ田のある由。

不幸田（海老瀬北）

百五十年位前、鉄玉坊なる者居り、此の地に堂宇を建立して住し、信徒二十名余、しかし住職と折合いわるく、信徒に土地を与えて立去つた。この土地を耕すものに不幸たえず、今は正明院の所有となつている（カード）。

異 樹

下新田の百日紅

下新田にカイネン坊という僧の杖が根ついたといふ百日紅がある。

ウナル木

峯の一峯神社の大木にウナル木があつた。日が暮れるとウナリ、夜があけるとならない。戦争の頃頃からうならなくなった。これは蛇がうなるのだらうといふことであつた。昔は白い蛇が住んでいた。

竜灯の樫

野木の明神様（栃木県下部買野木村には七人の娘があり、七ヶ所の神様に祭られてある。青竜権現もその娘の一人なので明神様は馬に乗って娘の処を廻ってくるのだが、その明神様のお帰りの時にはこの権現様の樫の木の上に御灯明があがる。これは明神様が娘に会いにきたしるしである。明神様には乳の形をしたこぶの出来る木がある。

ボテの木（菩提樹）

風張にある木で、高野山からもつて来たといふ云い伝えがある。周囲は畑で墓地が一方にあつた。この木は切れば勿論、落葉や枝をとつても不幸がくるという。近年こゝに用水堀がほられたが、この木はさけて通つた。廻らうとして子供がヤケドした人などもある。今の木は古い木のヒコバエであるといふ。

菅原道真の伝説（高島）

その一

この斎藤屋敷の人は絵かきであつた、その人が菅原道真公のおすたを二幅かいた。ところがなんと目が入らなかつた。それで二十一日間天神様に願をかけて断食をした。そして、わしの目と道真公の目を入れかえてくれといつた。二十一日たつてその絵に目が入つた。ところがまもなく絵かきの両眼がつぶれたといふ。

斎藤家には現在道真公のおすがたが一幅ある。三十三年目ごとに御開帳のとき、御神酒をあげると、おすがたの眼があかくなるという。

(小野田平一氏のはなし)

その二

もと神信心がさかんだつたころ、二十一日の断食をして、毎晩丑の刻に高島天神にお参りした(これはどこの人だかわからぬ)。二十一日の満願の夜、その人がお参りに来たとき、天神様の大門の梅の木の枝に白装束の人がいて、その人に、どこへ行くのかと聞いた、その人が、こういふわけでお参りに来たという、白装束の人は、おれは道真だ、といった。そしてここから帰っていいという。その人は折角来たのだからお宮へ行くという、白装束は二人で行こうといって、お参りし、お参りすると同時に白装束は消えてしまったという。そのとき、その人は身の毛がよだつおもいだつたが、それで、願いがかなつたと思つたという。

(矢島福次郎氏のはなし)

(以上二話、井田)

足利尊氏の子孫(靱谷本郷前)

足利尊氏の家臣が飯島山におちのびてきて、ここの土地に住みつたといわれている。そのためここには、丸に二つびきの足利の紋がのこつている(カード)。

増田氏のこと(岩田本合)

この辺に増田の姓が多いのは、豊臣秀吉の五奉行の一人増田左衛門長盛という人が、関ヶ原の戦いにやぶれてこの辺におちついたためといふ(カード)。

大荷場の富士山のうつる田

浅間様の所の田に水があつて、そこに富士山のかげがさしたという。(カード)

天神様の赤い石

高島宿の、いま畑になっている所に稲荷様がまつつてあつたが、毎年流されるので高い土地えもつていくのだが、金がなくて土地を買えない。そこで稲荷様の土台の赤い石を天神様に買ってもらつて引越した。今でも天神様の庭にその赤い石があるという(カード)。

おとうか山(岩田齋替)

今から七年位前、土手があつてそこにおとうか山の果が沢山あり、そこをおとか山といつていた。今では稲荷様をまつてあり、夜なきの稲荷様と呼んでいる(カード)。

天が畑(西岡と新田の間)

天の天の川が移つてできたのが天が畑という(カード)。

オトウミヨウ

栃木県下都賀郡の明神様(野木神社)と一峯様は仲がよく、十一月二十七日にお客に出かけ、十二月三日にお帰りになる。この時一峯権現の境内にあるモミの木の頂上にお燈明があがるという。

チ　　ブ　　ク

一峯権現は血伏をきらひ、女の月のもの時は石段までしか行けない。これ以上行くと下駄が割れる。昔神主さんが神社で寒けがしたので帰つたら孫が生れたこともあり、学校の女教師がお参りしようとしたら途中で下駄がかけ、借りて出かけると石段を一段上つたところでもたかけたという。

狐の泣声

峯では不思議なことがある時は狐が三回堤防でないた。これは富士講

の先達なだったので狐がついてきたためであらうという。今でも狐のメド(穴)が残っている。

再 生

埼玉県小室の財産家の壇那が死んだ時、足へコムロと書いて葬つたら栃木県へくれた娘の家の犬の足の下にコムロと書いてある犬が生れた。

三、四才の子供が死ぬと、粟を一握り入れてやり、その協定が出来ないうちは生れてくるんじゃないよといつてうめた(原宿)。(以上近藤義雄資料)

オトカ 昔はよくオトカにはかされた。某が佐野の高橋へ粉ひきに行つておそくなって、山崎屋の所まで来ると、お湯に入りたくなつたので、車をおきっぱなしで、「ぬるいや、ぬるいや」と裸になつていると、「なにしてるんだ」と声をかけられ、たまげて家へ帰つた。

油揚げを持つてるときにとられた。

オトカがヒヤールと弱くなる。

月夜の晩に、自分の先の方を、いい娘が通る。曲り角に来ると、消える。それからがおつかねえ。一緒に行くけれども、何としても追いつかねえ。

夜道を歩いていると、いつの間にか蠅蟻をとられる。煙草をいやがるので、役場につとめている時、ゴロヘドン、ゴロヘドンと声をかけられた。出たなと思つて、煙管で煙草をのむと、あたりが見えて来た。

オトカは前、むじなは後にいてだます。(難)某が夜、ひとりでおそく帰つて来て広いやなを通つた。道が途中で判らなくなつた。どこへ行つても、家の方の道に見え、どう考えても判らない。一晚中茅の中を歩いてた。夜があけて、ガンづいた。着物が左前になつてた。

魚を買つて来るととられる。

オクリイタチ いたちが送つてくることがある。

キツネノヨメイリ 夜遠くの方にちらちら火が燃えている。出世前に見

なければ見ない。

ヒダマ 人のタマセが出る。ヒダマがとぶと、一、二日に死ぬ。青いノロを引いて横に行く。

ヒトダマ・カネダマ ノロを引かない。うなる(北海老瀬)

オトカ 秋の彼岸ごろ、秋蕎麦の中を、オトカにまやがされて、「おお深え、おお深え」つて、沼ん中歩くように、昼間歩いているものがあつた(浮戸)

むじな むじなはしつぽで戸を叩く。「誰だ」つても返事がないのが、むじなだ。

むじなは、死ぬまでマヤカス。

むじなに、カツキをふっかけられると、つかれる(桶之口)(以上上野勇資料)。

■ まじない

○ミケゴ (ものもらい)みを半分水に見せる。

○ヤンメ 唐辛子、大豆、綿などで目をなせて、さんだわらにのせて、送り出す。

○おこり 朝早く起きて、さんだわらの上で、三度ぐらいドンデンゲ エリスル(ササラケル)と、おこらない。

たまがすとおこらない。

○しやくくり たまがせばいい。

茶碗の上に箸を十文字において、四方から水をのむと、ハシノシタミズをのんだのでなおる。

○かくらん 胡瓜のしんを足の裏につける。管笠をかぶせ、水をかける。

○ライサマ 軒下に草刈鎌を、竿につけてたてた(難)

○おこり 先達様に拝んでもらう。

○コーデ 手つくびに灸をすえる。

末っ子に麻糸でしばつてもらう。

五霞村の一色様の麻糸を借り、なおると倍にして返す。

○ヤンメ 唐辛子と綿で目をなせ、棒のさきにさし、道はたに送り出す。

○え ぼ 米をつけ、ながしに埋める。

盆様のおがらでつく。

○うせもの オカギサマをしばつておく。見つかったらほどく。

掌につばきをつけ、指ではじき、つばきのとんだ方をさがす。

○バヒカセ(ジフチリヤ) 馬という字を、三つさかさに書いてはる。

○やけど 「猿沢の池の大蛇が、やけどして、水なき時に、あびらおん」と、三回唱えて、息を吹きかける。

○落雷よけ 正月様の繩をもすと落ちない。

○イチパンガネ 賀茂神社のかねを、イチパンガネといつて、最初に叩くと縁起がいい。

○家鴨の卵を食べると中気にならない。

○トロイモを食べた茶碗で茶をのむと、中気になる。

○宇都宮の羽黒山から、稗種を借りて来てまくと、こくがとれる。

○乳の出がわるいと、のぎの明神様に願をかける。

○と げ 大越村外野の地藏様に申し上げる。

○夜泣き 古河の田町の稲荷様の枕を借りて来る。箱枕の俵のようなもの。泣きやむと、二つにして返す。(北海老瀬)

○雹が降ると、釜のふたを外に投げ出す。

○落雷よけ 長竿に、鎌と桶とをつけてたてる。「カマリン」という鎌の刃を上に向け、ぶつきるようになる。

線香を立てる。

田にライサマがさがると、早く見つけて、雷電様から、ハッチョージメをもらつて来てはる。かまわねえと、葉が赤くなるのがひろがる。

○かくらん 親が管笠をかぶせ、三杯井戸水をかけるとぬける。

朝つばら早く床をはなれて留守にする。

○おこり 新しい仏の七本木を、人の知らぬ間にとつて来て、寝ている人の枕の下に、知らぬ間におっかう。

若荷のきに針をさす。

夜氏神様へ行つて、ドンデンケエリをし、デヌケマイリといつて、行った道を帰らない。

ねぎ畑に入るな。入るとひつかえて来る。

たまがす。

笹の葉をまげておく。

水害がなくなると一緒に、おこりもなくなつた。

○はやりめ 豆をいったのを、おひねりにして、目をこすりながら行き、行った道を帰らない。

着物の下ん前を、目だといつて縫う。「なおればぬきます」といつて三針ぬう。

○ミケゴ つげのくしで、目のそばをこする。

みを半分、井戸に見せる。

みをかぶると出来る。

○バヒカセ 馬頭観音を、七場所ぐらい廻る。かからないように、赤い紙に、馬の字を三つ書いてとほぐらにはる。

○い ぼ 竹の上下にだんごをつけ、地藏様より高くしてあげる。

○夜泣き 屋敷稲荷に、豆腐をあげる。

○うせもの カギツルシを、かんじんよりでしぼる。

○かやの実は、十二指腸のくすり(浮戸)

○トリセキ(百日暖) みくに橋の水のあかを、とつて来てのませればなおる。

柳生の明神様の麻を借りて来て、まけばなおる。

○コーデ 末の子に、たてまいの時の麻で、はしこをくぐすか、障子

のまどからしばつてもらう。

○ダイバムシ、あぶより小さい、しっぽの長い虫で、馬の耳に入ると、匂ちがいのようになる。葬礼の時、四方にたたる赤い切を、たてがみにまくといふというので、葬式がすむとおつとりでとつた。

「大津東町」と書いた腹がけをかける。

熊谷の大桑の観音様の笹をもらって来て、馬に食べさせると、丈夫になる(桶之口)

(以上上野勇資料)

■ 禁忌その他

○ミタンチ(三九日)旧の九月九、十九、二十九日)

茄子を食べば健康だ。

○秋茄子嫁にくれるな

○茄子を食べると声が悪くなる

○白南天を照じて食べると、声がよくなる。

○耳たぶの大きいのは金が出る。

○獅子舞を、かかに持てば金がたまる。悪魔よけになるから。

○歯が短いと長生する。

○井出では八つ頭を作らない、作ると主人が死ぬ。

○大曲、大荷場では、とうぎみを作っちゃわるい。八幡様が目をついたから

○海老瀬では、鶏をかわない。鶏の餌にするんだといって作つたが、すぐやめてしまった。

○海老瀬、北村では、餅つきに、ネネッコをつぶしたとか、火事になつたとかで餅をつかない。ヒゴトでも起つた時、個人だけでない。

○初午の日には、火にたるといって、風呂をたてない。

○戌の日に変まきをするとなれば、犬の分として、三ぼちだけまく。

○はんげには、田おかの両方はしない。片方ならいい。

○巳の日には、炙をすえない(北海老瀬)。

○初午にお湯をたてると、火事になる。

○戌の日には、犬の分として、三つ株まくが、変まきはしない。

○卯の日には、田植えをしない。

○巳の日に餅つきをしない。もしまげえがあると、近所のでえに、何

といわれるか、そのうちに火柱がたつ(離)

○イヌス(石臼)にのると、背が伸びない。

○盆に水浴びると、かっぱにひかれる。

○さともを作らない。まじつたといつて作るものもある。

○初午に湯はたてない。

○はんげに、田植えをしない(浮戸)

○道祖神がびつこで、とうもろこしのかけに隠れて、弁天様を追っかけ

たので、とうもろこしを作らない。

○新井では、とうぎみを作らない。

○谷新田、飯塚では、ねぎを作らない。

○北村では、きみを作らない。畑にはえてもわるい。

○峯では、鶏をかわない。権現様の蛇をかちらかす。

○青大将を殺さない。しまへびは見かけ放題殺した。

○いたちに、道をきられるとわるい。

○いたちがふりかえつてみると、ママヤにつばをつける。

○掌に字を書くとムンジャねえ。

○胡瓜の丸切りは天王様の八坂の紋と同じだから食べない。(桶之口)

(以上、上野勇資料)

言語関係資料

上野勇

一、方言

○「板倉シイシイ、海老瀬ナイナイ、西谷田ゲエケエ」といって、字の出来ない人は、

ソオダシイ、アノシイ

ソオダナイ、アノナイ

ソオダゲエ、アノゲエ

というふうにいってが、有線（放送）が出来てからシイだの、ゲエだのといつてたのでは、かからないから少くなつて来た。

○高崎の兵隊に入った時、「エエラ暑イ、エエラ寒イ」というように、すぐエエラ、エエラというので、邑楽郡ではなくて、エエラダンだといわれた（雑）。

○マサカ マサカ暑イ マサカ強イと、マサカをよく使うので、「マサカって飯は、どんな飯だ」といわれる（北海老瀬）

二、農業

○オヤシラズゴシラズ 田が遠いので、朝めし前にのらに出て、星が出てから帰ってくるので、いそがしい時は、親子が顔を合せなかった。

（浮戸）

○ムギノテッポオカツギ よくつけないで、真中に黒い筋のついている

麦。

○クサル 昔は田にヒヤツタラ最後、ウジョウジョひるにつかれた。ひるが血を吸って、唐辛子みたいになつて落ちる。今はひるがいなくなつただけでもいい。背がちいさいと、（そまでタサツタ（ぬれた）稲が水をかぶると、パツラツてぬれまう。水が出ると、ところどころに、ピロンピロンと残る。）

○ユギリッコロシ 昔は一日に二度夜なべをする。朝も暗いから。その苦勞を人に話すこともなく、ユギリッコロシで死んだ。

○シゴミ 洪水。シゴミでとれない。

○ガツツアラ ブツツアラ ポツツアラ 今は動力だからないが、稲麦の穂のよく落ちないものをいう。

○ヤヤンゲ 今日（今日は）寄り合いで、上も下もねえ、ヤヤンゲになる。妻が倒れて、ヤヤンゲになる（北海老瀬）。

三、行事その他

○イキトオバ 三十三年忌の時、棒の片面を削つてたてる。棒の木がなければ、葉をとつて来て、他の幹につけてたてる。

○フゴツバタキ 麦まきが終つたあとの祝。

○スミツカリ 初午の時の料理、スミツカリがすむと、大根の役目は果たしたという。年越しの豆、人蔘、塩引、酒粕で作る。

○ニビタシ 十月正月のおえびす様の赤飯につきまもの煮つけ。人蔘、

大根を短冊形に切り、うすい醬油で煮る。イビ(海老)も入れる。おえび木様にあげたのを、「百万石とりましょ、一千万石とりましょ」と唱えてから食べる。

○ダイマナコ 二月八日、十二月八日には、だんごを作り、トボダンゴといつて、柱と壁の間っこにさす。この晩には、ダイマナコが来るから、音をはてるなどという。嫁さんにも、よなべをさせるなどというので、ネロハ(寝ろ早)という。

○スナデ 十二月十四日の煤払い。前の晩に、米の粉に、中にさつまのあんを入れたのを焼いて食べ食べ、スナデをした。砂糖がなくだったので、練起だが止めた。終戦がきりかいで変わった(離)。

○ヤクジンガミ 二月八日、十二月八日には、ヤクジンガミが通る。ヤクジンガミが、かごやに助けられたので、目印に、かごをたてておけば、寄らずに通る。ヒトツマナコノダンジロオが来るぞといった。ヨオカダンゴを作る(北老海瀬)。

○コトハジメ 二月八日、だんごを作る。七日の晩に、かどぐちに、長竿の先にミケ(目籠)をつけて立てる。「早くダイマンたてろ」という。ミケは、目がえれえから、鬼が来て逃げ(浮戸)。ヒトツメダマノダンジュウロオが来る。ヤクジンガミが来て、はんごをおして病気にするといふので、はきものをとおっこみ、早寝をする(種之口)。

○コトジマイ 十二月八日。オナベをおそくまでさせるのは、かわいそうだから、ネロハといつて、早じまいにした。新薬が出来る、十五夜から少しでもオナベをするものだったが、今はテレビがオナベ(種之口)。

四、身 体

○ウマノツムジ 人の額にあるつむじ。二つつむじがあるのは、意地っばり、きかんぼうだといふ。

○ドンリュウボオズ 太田の呑竜様に申し上げて、女の子も七つまで、剃刀ですつて、がり坊主にしておいた(北海老瀬)。

○チンゲ 子どものほんのくぼに残す毛。サカナクウケとも。これを残すと、さかなが食えないといつて残す。全部すると、坊主みてえだ。

○テンジンヤッコ たかどりの天神様に申し上げて、学問が出来るように、ヤッコをぶらさげる。両方のみあげのところを、奴のようにすり残す(浮戸)。

○トトゲ 鼻血の時に引くととまる。いろりに子どもが、ころがりこむ時に、トトゲをつかまえて出す(種之口)。

五、童 詞

○「ムグツチヨ、ムグツチヨ、ムグツチヨの頭に火がついた、くぐめばなおる」

ムグツチヨ(鳩)を見つけると唱える

六、しやれ・ことわざ

○雷電神社のかつおぎで、うだつがあがらねえ。

○貧乏稲荷で、うだつがあがらねえ。

○焼けた稲荷で、とりえ(鳥居)がねえ。

○オシブチあてられたようで、頭があがらねえ。

○オシブチ 垣根の両側からあてて木。

○川向うの放れ馬で、どうともいえねえ。

○ギヤロのつらに小便で、シャーンシャーンしてる。

○うそと坊主の頭、いったことがねえ。

○年寄りの菜びたして、ひとっちぼりだ。

仕事がもう少しで終る時にいう。年寄りだからざっとしぼる。

○死んでから使えるのは、鯛の頭べえだ(離)

○葦切が土用になると鳴かなくなるように、しゃべっていたのが、急に

だまる。

○もすが鳴くみてえだ。もすが鳴くみてえにうるせえ。

○なりふりほれるなら、雷にほれる。

○あんまり着飾った人がいいというと、こういう(北海道瀬)。

○あたりまえの庚神様。

○きまりきっていることにいう(浮戸)。

○貧乏人の祝儀で、ながもちがねえ。

○屋台の提灯で、ぶらぶらしてる。

○密柑のだいで、からたち。

○ただ立っていて一人前(樋之口)

七、なぞ

○破れ障子とかけて、糞子ととく。その心は見るたびにはり(貼り)たくなる。

○屋根の上のもぐらとかけて、石童丸ととく。その心は、ちち(土父)をたずねる。

○共同便所とかけて、出雲の大社ととく。その心は、よろずのかみがみ(紙・神)が集る。

○隣の家のあがりはなへ行っても、上らずに帰って来るもの何だ。はきもの(北海道瀬)。

○いたずら小僧とかけて、共同便所ととく。その心は、方々のお尻が来る。

○山椒とかけて、出っ歯ととく。その心は、花(鼻)より葉(歯)がさき(樋之口)。

調査こぼれ話 (10)

土用のよし切

海老瀬の堤防にのぼって見ると赤麻沼遊水池のかなたは、ぼろつとかすんで見えないけれど、見える範囲は一面の葦である。葦をヤというのか、葦の生えているあたりは、ヤチ、ヤバタケといわれている。連日の日ではこりつぽい草に腰をおろして、いま聞いたばかりの「土用の葦切」ということを思い出していた。いままで葦切といえ、ギョギョシ、ギョギョシと、まことにぎょうぎょうしく鳴きたてるものと思っていなかったが、土用に入ると鳴かなくなるという。それで、いままでしゃべっていた者が急にだまってしまうことを、土地のしゃれことばで「葦切が土用に入ったよう梨」という。時まさに土用。涼しい利根から、鶉のくちばしの板倉まで来てみると、一生のうち、こんな暑いおもしろいのは何回だろうと嘆きたくなるほどの暑さだった、しかし、次第にふえて行く収穫は、暑さを上まわる醍醐味を味あわせてくれる。短いしゃれも、その土地独特のものには、いいしれぬ味がある。葦切の声を聞かない土地は、このしゃれは通用しない。

「ささらの太鼓でドツチカ、ドツチカ」というしゃれも、獅子舞が行なわれているこの土地ではいきいきしている。共同調査中、泊めていただいたのは雷電神社。二日の夜は雷雨の実演であったが、「なりふりほれるなら、カミナリサマにほれる」ということばも、この土地で聞く実感は湧く。あまり着かざった人がいいということういつてひやかすのだろうと思うが、雷様とは深い縁のある土地である。

(昭和三十五年八月三十日、上毛新聞掲載 上野)

俗 信

板倉町教育振興協議会郷土調査部

一、厄除け

(厄年の人 厄神除け)

- 佐野の元三大師に行つてダルマを買つて落すと、拾つた人に厄が行く。(山口)
- 三日の日に元三大師に行つてガマロを着る。(観谷薬師堂)
- 元三大師にお参りし、厄除けのお札をもらひ、いつも携行している。(若田)
- 元三大師に行つて厄落しをしてくる。(岩田)
- 元三大師に悪い事が起こらないようお参りしてくる。(除川・大曲)
- 元三大師で祈禱してもらう。(新田・雄)
- 元三大師のお札を軒下に貼つておく。(新田)
- 厄除けの札を玄関に貼る。(山口・板倉行屋)
- 厄除け大師様に行つて厄除けしてくる。(通り)
- 大師様にお参りする。(板倉川入南)
- 厄除けに行くと言つて遠くの神社に参拜に行く。(山口)
- 筑波山にお参りに行く。(東の中新田)
- 筑波山に行つて拜んでもらう。(板倉大林)
- 岩田の筑波山へ正月の十四日に行き年をとつて厄年を逃がれる。(板倉大岡・観谷薬師堂)
- 筑波山へ行つて豆まきをしてくる。(新田)
- 女三十三才の時、鯛形模様の品を身につける(帯が一番多い、また腰巻などあり)。(板倉・高島・飯野・除川・新田・大曲)
- △形模様の着物を着ると厄除けになる。(大曲)
- 菱形模様の帯や腰巻を身につけると厄除けになる。(観谷中)
- 年令を書き先連にたきあげてもらふ。(東の中新田・岩田)
- 雷電様でお札をうける。(板倉)
- 成田様にお参りに行く。厄除け護摩をたく。(板倉・除川・新田・大曲・細谷・雄)
- 神社参拜に行き、品物をする。(板倉雲間)
- 雷電神社の輪くぐりに行つて持ち物を捨てる。(飯野)
- そうりやく様に子供の着物を持って行つて拜んでもらう。(板倉・観谷中)
- お話の本で頭をなでる。(観谷薬師堂)
- 年とりに二度豆を投げる。(板倉橋岡木)
- 年に二回節分をする。(大荷場)
- 生まれ年の守り本尊のお札をうけ、肌身はなさず持つている。(岩田原宿上)
- 英人を頼んで厄除けする。(岩田)
- 寄席(芝居とか浪花節、その他の演芸)をして厄除けする。(除川・西岡新田)
- 五十五才の時、ダンゴを五十五ヶ食べる。(五十五ダンゴという)。(全地域)
- 豆を焼いて三本辻へ置いてくる。(大久保)
- 自分の持ち物を道路に捨てる。(大久保・谷新田・丸谷・宇奈根・西岡大曲)
- 年越しの豆の中にお金を入れて、四つ辻に送り出す。(大久保)
- 節分の夜、道かどに捨てる。(高島)
- 紙に危み、道かどに捨てる。(高島)
- 自分の年より一つ大きく近所の神社に行つて年をとつてくる。(飯野)
- 鯛のしつぽを入口に貼る。(飯野)
- 家の入口にニンニクを下げる。(飯野・除川・大曲)
- 辻にニギリ飯とお金を置く。(飯野)
- 神社で厄除け護摩をたいてもらう。(除川・西岡)
- 豆まきをする。(全地域)
- 村境の道路の左右に青竹をたて、ナワを一本ひいてシメを張る(ハツチヨウシメという)。(板倉・南地区全域・北地区全域)
- 村境にソウリをつるす。(観谷・薬師堂・橋岡木)

○庫分にイワシの頭を家の入口にさして封く。(飯倉川入南・細谷・巖)

○家のまわりの四方にシメを張って拜む。(飯倉大同)

○神主に拜んでもらう。(飯倉大同西・細谷・大曲・巖)

○二月八日の朝早く竹竿の先にミケをたてる。(下五箇・大曲)

○村の道角に雷電様のお札をたてる。(飯倉)

○神様の姿を作りそれでまじなう。(大同西)

○病気の入らないように村はずれにぼんでんする。(飯倉)

○厄神除けの百万遍をする。(岩田新田)

○獅子舞を頭にかぶせる。(岩田)

○行者に厄除けしてもらう。(岩田)

○田の節句に耕地の若衆が歌珠を持つて一軒一軒まわり、最後に村はずれの辻に厄神を送り出す。(飯倉)

○四月八日が厄神除けの日で、ササラが一軒一軒まわって厄神を払う。(飯倉)

○はまいれに行く。(北地区の新田)

○葉節様に行き、自分の年だけ豆を投げる。(大曲)

○塩を投げる(まく)。(大曲・除川)

○浅草の観音様を拜む。(細谷)

○富士浅間様の拜み上げる(除川)

○先達様にコンジシ様のいる方を拜んでもらう。(除川・西園)

○屋敷稲荷様・水と米などを上げて拜む。(除川)

○だいはんにやがまわってくる。(新田)

○ホウキをさかさ立てる。(全地区)

○客に見えない所(船んどゝ全地域)

二、長居の客

○座敷のすみ(大荷場・飯野)

○隣の部屋(飯倉・大久保)

○障子のかげ(飯倉・中下・飯野・島・下五箇・高島)

○戸口(家の入口)(下五箇谷新田)

○B 附属するもの、附属すること。

1 手ぬぐいをかぶせる。ほうかり。(全地域)

2 うちわであおぐ(山口・飯倉・岩田風・張飯野・宇奈根・大荷場)

3 投げる(北海道)

4 手まねぎする(中下)

5 着物を着せて「どうぞお客様お福りなすって下さい」と三回おじぎする(岩田)

6 座敷をはく(岩田・下五箇)

7 座敷をはく真似する(北海道)

8 風呂敷をかぶせる(中下・高島)

9 着物をかける(飯野同村)

○家の前に塩をまく。(飯倉・飯野)

○ホウキをたてて下駄に灸をする。(北海道)

○下駄の裏に灸をする。(樋の口・新田)

○部屋の外で家の人が何回かせきばらいる。(丸谷)

○客の枕の中に線香を立てる。(樋の口・飯野・下五箇)

○枕へ灸をする。(西園)

三、体のよわい子供

○呑竜様に乗上げて七才まで坊主にしておく(呑竜坊主一男の子は頭の後の毛を少しそり残し、女の子は丸坊主にする)。(全地域)

○呑竜様にお参りに行く。(全地域)

○天神様に丈夫に育つよう祈る。(北海道・岩田原宿・南地区全域)

○天神様に申上げ、七才までぼう主にする(天神ほう主)。(山口・小保呂・中新田・飯野・上五箇)

○天神様に申上げて掃除当番をさせる。(飯倉中)

○名前を男女うちかえてつける。(女は男の名前をつける)。(山口・峯飯倉雲間・高島・飯野)

○麻の葉の着物をさせる。(峯)

○稲荷様をたのむ。(飯倉)

○氏神様をたのむ。(飯倉)

○頭の中心をそり、こう葉をそこにはり、毒薬を吸い出させる。(飯倉)

○子育鬼怒神にお参りする。(内蔵新田)

○子育観音に行ってお願ひする。(飯倉)

○行者に拜んでもらう。(岩田)

○手の平に虫の字を書く。(島)

○便所の中に竹を入れ、その竹に入ったつゆをのむ(下五箇)。

○女の子に男の着物を着せる。(飯野)

○悪礼となって四国の金比羅様にお参りする。(除川)

○子育地蔵に線香と上げ物をして供養する。(除川)

○かまじないをしてもらう。(新田)

○おずみの焼いたものを食べさせる。(新田)

○もちを長くもつておき、ねる前に少しずつ食べさせる。(新田)

四、子供の夜泣き

- 稲荷参りをする。(全地域)
- 稲荷様にトウフをあげる。(全地域)
- 稲荷様に油揚げをあげる。(頼母子高島・上五箇・宇奈根・板倉川入・雲間・親谷)
- 稲荷様に申上げ、治つたらトウフと油揚げをあげる。(大同・石塚・大林)
- 稲荷様に小旗をあげる。(家)
- 稲荷様にニンジンをあげる。(北海老瀬、西園)
- 稲荷様のまくらを借りてきてきせる。(下五箇・谷新田)
- 稲荷様へ赤飯をあげる。(西園)
- 家の稲荷様をよく掃除する。(大荷場)
- 氏神様をよく掃除してお参りする。(頼母子)
- 氏神様に赤飯をあげる約束をしてお願いする。(山口)
- 氏神様に泣かないように頼む。(頼母子・中下・上新田)
- 氏神様を拜む。(西園新田)
- 氏神様に一週間同じ時間にお参りする。(大曲)
- ふじ稲荷のまくらを借りてさせ、治つたら二つ作って返す。(北海老瀬)
- 稲荷様の枕を借りてさせ、治つたら倍にして返す。(山口・本郷)

- 浅間様の枕を借りてさせる。(家)
- 八幡様に米を上げて治るように拜む。(小保呂)
- 八幡様にトウフをあげる。(板倉)
- 小さな枕を作って地蔵様にあげる。(通り)
- 夜泣き地蔵にお願いし、治つたらトウフに鬼の絵を紙に書いてさかさにする。(中新田・離)
- 鬼の念仏の絵を枕の下に入れる。(岩田・原宿)
- ふとんの下に位はいを敷きこむ。(北海老瀬)
- 仏様に線香をあげる。(本郷)
- 線香に火をつけて、それを持って家のまわりを三回まわる。(大久保)
- 子供の手の平にスミをぬる。(岩田原宿)
- トウフの角を切ってお月様にあげ、治つたら全部あげる。(川入・岩田原宿)
- 屋根屋のゾウリを借りて枕にする。(板倉川入)
- おむつを夜外にほさない。(下新田高島・大久保・高島・下五箇・上五箇飯野・大曲・板倉川入・雲間)
- 子供を天井にぶらさげる。(除川)
- 拝んだ紙を泣く子の下に入れる。(除川)

- 坊主に拜んでもらう。(除川)
- 大工のいはたワラジを枕にしてねる。(細谷)
- かきつるしをしゃべる。(細谷)
- 手を塩で洗う。(細谷)
- ふとんの下にナイフを入れる。(離)
- 「猿沢の池のほとりに住むきつね、親は泣いても子供は泣きまじぞ、アブラオンケンソワカ」と三度唱える。(除川・西園)
- 「猿沢のねださの下にそのきつね、昼は泣けども夜は泣くな、アブランケンソオワカ」と唱える。(飯野)
- 「猿沢の池のほとりに泣ききつね、己泣くともこの子泣かすな」と唱える。(親谷)
- 「猿沢の池のほとりに泣ききつね、あの子泣かすともこの子泣かすな」と唱える。(親谷松崎)
- 「鳴間山の白きつね、昼は泣いても夜は泣くまい」と泣く子に、またがり、一息のうちに三回となえる。(粉谷浮戸)
- 「河原で泣ききつね、三声泣いたらとれ泣くな」(板倉・石塚)
- 「しのだの森の白きつね、昼は泣けども夜は泣くまい」という文字の赤い字で三行に書いて、子供の元におく。(大荷場)

- 「猿しまや、猿を泣かすともこの子供泣かすな」と書きふとんの下に入れる。(板倉宿)
 - 柳の下に泣く蛙、あの子泣かすなこの子泣かすな」と書き枕の下に入れる。(岩田原宿)
 - 「アブラオンケンソワカ」と三回となえる。(親谷下)
- #### 五、蛇に関するもの
- しょうぶと餅草を屋根などにさす。(北海老瀬)
 - 五月の節句のしょうぶを湯の中に入れて。(頼母子)
 - しょうぶと餅草を置くと蛇が近寄らない。(家)
 - 蛇が来たらしょうぶを見せる。(下五箇)
 - 餅草をまいておく。(北海老瀬)
 - 餅草の種を出すと逃げる。(山口・新田)
 - 餅草のヤニをつけておく。(山口・西園)
 - 「今度姿を見せると命がないぞ」と餅草の種をふくと逃げる。(板倉)
 - 正月の十五日の朝十時に、家のまわりに水をひとまわりまくと、蛇が家の中に入らない。(北海老瀬)

○半紙をたんでつるしておく。(下新田)

○蛇は赤いものが好きであるから、赤をまともない。(北海道)

○「今度現われたら殺してやる」という二度と姿を見せない。(頼母子大曲・除川)

○鎌香をもやすと蛇が来ない。(山口・西地区全域・除川・大荷場・細谷)

○正月、あずき(小豆)のおかゆの汁を家のまわりにまいておく、と蛇が入らない。(岩)

○七草がゆを家のまわりにまいておく、と蛇が入らない。(宇奈根)

○蛇を見たとき指を三回まわす。(通り)

○蛇のカラを首に巻く。(岩)

○鉄製のものを見せると来なくなる。(板倉)

○半死の蛇の頭に馬ふんをのせれば生き、山椒をのせれば生きた蛇も死ぬ。(板倉大村)

○冬至の朝燃やした灰を家のまわりにまくと近寄らない。(板倉)

○行者に見てもらい、除けをすると出ない。(岩田)

○蛇の抜けがらを妊産婦のお腹に巻くとお産が軽い。(飯野・大久保)

○親指を四本の指でつつむと蛇が逃げる。(上五箇)

○正月にあけたおしらきを四日の日にさけて洗い、その水を家のまわりにまく。(飯野)

○夜はうすきをふくと蛇が来る。(大久保)

○女の人は蛇にねらわれないように、しようば湯に入る。(下五箇)

○蛇を指さしたら、自分の年の数だけつばをかかせる。(下五箇)

○火を燃やすとこない。(除川)

○蛇の通る道に異白の草をおく。(新田)

○正月十五日、おかざりを燃やした灰をとって水に入れ、その水をまくと蛇が来ない。(大荷場)

○塩をまく。(細谷)

○氏神様を拜む。(細谷)

○蛇を指すと手がくさるから、人に手を踏んでもらう。(大久保・高島・樋の口)

△まじない以外のもの

○蛇を指すと指がかくされる。(下新田)

○蛇の夢を見る。

1 お金を拾う。(板倉)

2 誰にも話さないでよくと金がたまる。(島・樋の口・飯野)

3 よい事がある。(板倉・丸谷)

4 誰にも言わないで三回おくとお

金をひろう。(山口)

5 朝顔にも言わないで、家のまわりを思つかず三回まわるとお金が入る。(内蔵新田)

○蛇を食べると精がつく。(板倉)

○母屋にいる青大得で尾の切れたのを「王」といって殺さない。(岩田原宿)

○蛇を踏むとけがが生える。(板倉)

○半殺ししておくとも災難がくる。(岩田)

六、物をなくした時

○かきつるしをしる。(全地域)

A しるもの

1 縄でしる。(北海道、南地区全域・西岡新田・大曲)

2 わら(わらのミゴ)でしる。(北海道・西地区全域・南地区一円・除川・西岡新田)

3 紙(紙をわじつて、こより)

4 糞の糞(西地区)

5 ひも(西地区)

B しつてから

1 考える。

2 見つければほどく。

かまどの神様(中新田)

※「針をなくした時」と制限のあるものあり。(内蔵新田)

○おかまさま(岩田原宿・東地区)

○かきつるしをしをかきにし、見つかったらもとの通りにしますと頼む。(通り)

○手の平につばを置き、指でたいてそのつばの飛んだ方向にある。(全地域)

○たたき方

1 一本指でたたき、つばの多く飛んだ方向。(下新田)

2 二本指でたたき。(山口・中下)

3 三回たたき。(板倉中・樋の木・岩田原宿)

○棒を立てて倒れた方向を探す。(中下・板倉雲間・岩田原宿・板倉・下五箇・飯野)

○ハサミをなくした時は、切れない古いハサミを櫛にしばつてのせておく。(板倉樋の木・岩田原宿)

○男が左上を見て、女が右下を見て探す。(板倉雲間)

○稲荷様にお参りをし、できるようにお願いする。出たら湯揚げを上げる。(板倉入)

出たらトウフを上げる。(板倉)

戸)

○トウワブ^{トウワブ}、油揚げ三枚を上げるから、明日の朝まで見つかるようにと、期限をきめて稲荷様にお願ひする。(宇奈根)

○大神宮様と屋敷八幡様に申上げる。

○飯倉川入

○折掛(先達)に拝んでもらう。

(岩田原宿・谷新田・下五箇・飯野・西岡・大曲・新田)

○自分の持ち物をすべてさかさまにする。(飯野)

○着物のすそを三針ぬう。(下五箇)

○おかね様にワラを結びつけて拝む。(除川)

○神社を拝む。(除川)

○えびす様に見つかればダンゴを上げますと拝む。(新田)

七、雷除け

○カヤ(麻ガヤがよい)の中に入る。(全地域)

○行う事柄

1 線香をたてる。(北海道・飯倉・飯野)

2 線香をたてて「くわばら、くわばら」と唱える。(下五箇・宇奈根・飯野)

3 年越しの豆を食べる。(鳥・丸谷・下五箇・飯野)

4 火のついてない線香をあげる。

5 「くわばら、くわばら」と唱える。(岩田下山・原宿)

6 北を向き、手を合唱して三回拝む。(飯倉大岡)

○線香を立てる。(全地域)

○あげる場所

1 火鉢にあげる。(山口・飯倉大岡・岩田・鳥・飯野)

2 仏壇にあげる。(通り・飯倉・岩田原宿・大久保・新田)

3 三本あげる。(通り)

4 沢山あげる。(大久保)

5 床間(飯倉石塚)

6 雷電様のお札にあげる。(飯倉川入・稲荷木・親谷)

7 大神宮様に立てる。(親谷・上新田・大荷場)

8 三本立てて表に出しておく。(親谷)

○正月十四日にあげた花をとっておいで、火鉢でもやす。(北海道・西岡)

○正月様にあげた花に火をつけて、庭へ投げる。(新田)

○正月十五日にあげたかいかき棒と、花をよして煙を立てる。(離)

○竹さおの先に草刈り鎌(草取り鎌)と桑の木(蓍)をさかさにしぼりつけて立てる。(下新田・山口・中新田・飯倉大岡・岩田・親谷・内蔵新田)

(田)

○竹さおの先に草刈り鎌をさかさにしぼりつけて立てる。(南地区全域・西岡)

除川・新田・大荷場・細谷

○雷が鳴っているとき、菅原眞直公をお祈りする。(北海道)

○家の中で煙をいぶす。(北海道)

○正月に神様に供えた棚(ヨシ又はワラであんだもの)を燃やし、線香をあげて拝む。(山口)

○庭で火を燃やして煙をあげる。(飯野)

○線香を立て、煙ののって帰って下さいと祈る。(飯野)

○「遠くのくわばら」と三回唱える。(北海道・西岡)

○桑畑に行き、行けなかつたら「くわばら、くわばら」と唱える。(飯野)

○燈籠をあげて、「雲雷鼓撃雷降雲消大雨念饑苦力尼時得消散」と三回唱える。(本郷・峯・飯倉大岡・岩田・親谷)

○雷電神社に閉するもの

1 線香を立てて拝む。(高鳥・大曲)

2 日参りする(お参りに行く)

3 お札をたてる。(高鳥・飯野)

4 お札を煙の中に入れて。(飯倉)

5 お札を入口の戸にはさんでおく。(岩田原宿)

6 雷電様の方を向いて「くわばら、くわばら」と唱える。(除川)

○雷電木を燃やす(峯)

○雷電木を植える。(大曲)

○年越しの豆を食べる。(小保呂・鳥丸谷・下五箇・飯野・除川・大曲)

○丸餅に鎌を飾る。(小保呂)

○ランプのホヤを縁の下までたらす。(飯野)

○雷が鳴りだしたら神社に行つて、雨降りミコシ(雨降り大杉様)をかついで、鐘をたいて田ほ道をまわつて歩く。(樋の口)

○線音様を拝む。(新田)

○年越しの豆を初雷の時トボロにまく。(西岡)

○ロケットをたてる。(除川)

○入口で柳の木をたくと、雷様がそのにおいを嫌つてそこには落ちない。(飯倉大岡)

○雷の落ちた所に竹を四本立て、シメ縄を張つておく、そこには落ちない。(飯倉川入・親谷)

○箱分の豆をとっておき、雷が鳴つたとき食べる。(飯倉川入・岩田・親谷)

○「大木のもとり、小木のも」と

唱える。(板倉雲間・岩田)

八、ひょう除け

○サン俵を庭に投げける。(板倉石塚 庵)

○すり鉢とすり棒を庭に出す。(川又 岩田)

○パケツを出してたく。(釈谷)

○シメを立てる。(岩田・釈谷)

○樓名神社にお参りする。(西岡)

○線香を立てる。(西岡)

○野良で火を燃す(新田)

○雷電様のお札を畑に立てる。(通り 板倉川入・岩田原雷・釈谷・島・大 久保・谷新田・堀の口・除川)

○釜のふたを外に(庭に)投げ出す。(全地域)

○裏がえしにして(東地区全域・岩 田下山・大荷場)

○ころがす(大曲)

○鐘をたく(板倉大同・谷新田・新 田)

○虎の日にたく(北海老瀬)

○念仏鐘を千回たく。(板倉川 入)

○鉄びんのふたをたく。(西岡)

○竹を「天鎖」にさし、シメを三所につ ける。(大荷場)

○庭にこざるをおく。(庵)

○ナベのふたを庭にさかきにして投げ ける。(下新田・頼母子・峯・中新田 小保呂・上新田・庵)

○雷電様を拜む。(大曲)

○雷電様で祈禱した飯を目参して、一 軒くまなくまわす。(下新田)

○釜のふたを外に出して、まんじろく まんじろくという。(通り)

○大勢で数珠をまわしながら、鐘をな らして祈禱する。(中下)

○稲荷様にトウフをあげる。(大曲)

○お盆を庭におく。(大荷場)

○百万遍をする。(全地域)

○おばあさん達が長良神社に集って、 三日三晩おてん念仏を申す。ぼんで んを「軒一本ずつ配つて立てる。 (おしめのついたよし)。(中新田)

○念仏をする。(細谷)

○お宮に寄つて皆で鐘と太鼓をたく。(頼母子)

○九、病気、身体異常

○東地区

○承へ墨をつけて通せばなおる。(山 口)

○灰と石炭を混ぜてつける。(下新田)

○アンモニアに餅米を冷してつける。(下新田)

○なみくじをわけ灰をつける。(山 口・峯)

○南むきの観音様の前に立つて瓜の葉 を三枚とってきて自分のほくろをな てる。(上新田)

○西地区

○黒子の上に墨をぬる。(板倉大同・ 大林・石塚・釈谷中)

○黒子の隣にその黒子と同じ大きさの 墨をぬる。(岩田原雷)

○こぶ観音にたのむ(見せる)。(板倉 中三・雲間・川入南・石塚・岩田本 倉)

○まむしの油をぬる。(岩田骨積)

○黒子のところに手拭をのせる。(板 倉)

○南地区

○白米を水につけておいて、その水を つける。(島)

○米粒をさくさんでひやしてそれをつ ける。(宇奈根)

○こまの花をもらってつける。(飯野、 新村)

○ほくろ地蔵に祈る。(飯野本下)

○北地区

○こぶの観音様にこぶだといっておと してもらう。(西岡)

○おきゆうをする。(除川)

○なすをきつてつける。(除川)

○なすの汁をつける。(西岡)

○折とうしてもらう。(新田)

○地蔵様にタスキをあげる。(新田)

○ガマの油をつける。(大曲)

○人の見ていない所で、ナスの中実を ホタロの上にすくむ。(細谷)

○わらみごをはさみで切り、そのとが りでとる。(細谷)

○蛇のぬけがらをつける。(細谷)

○盆に作つたナスの馬のへたを切つて ホタロにつける。(庵)

○(2) 目かいこ(みけこ)

○東地区

○井戸へミを半分見せ直つたら全部見 せる。(北海老瀬・山口・峯・木郷 頼母子・通り・中下・小保呂・上新 田)

○井戸へかごを半分見せ直してくれ ば全部見せますという。(北海老瀬 山口・通り)

○障子の外から物をもろう。(北海老 瀬)

○ミケをかぶつておらのみこ先をしは する。二人いて、一人は「みけごをつ りに来ましたつて下さい」と言っ て、みけごの出来ている方の目の方 のみけの穴から、おらのみこを入れ て引き出す。(北海老瀬)

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○着物のつまをつまみ糸で固くし
り、直鼻はほどきますと言ふ。
(北海道下新田)

○頭をとかすして火にあぶってその
「日かい」をさする。(本郷)

○井戸で目の前を三回しぼる。(中新
田)

○みをかぶって井戸の中を見る。(小
保呂)

西地区

○井戸の神様にミを半分見せて直った
ら全部見せる。(全地域)

(ミを「箕」或いは「身」という表
記が見られる)

○井戸をのぞきみてあおく。(岩田)

○井戸にミをかぶって見せる。(板
倉)

○木櫛のみをたたみにこすり、目の上
に当てる。(岩田下山・原宿)

○竹の櫛というもある。板倉雲
間)

○着物の下前の裾をしばって、治れば
ほどく。(板倉)

○着物の下前を目だつ糸で三針ぬい、
治ったらほどく。(板倉)

○糸で輪を作つて目の前に出し呪文を
〇へそに塩をぬり込む。(板倉大
田)

○川へ行って目から小豆を落す。(岩
田原宿)

南地区

○井戸にミを半分見せて直ったら全部
見せるからと言つて井戸神様に申し
上げる。(全地域)

○井戸に目を井方見、直ったら両方
見せる。(飯野新田・岡村)

○ミテをかぶって表わらでつつく。
(大久保・高島・谷新田)

○ゆすのとげでさす。(大久保)

○壁に入っているわらでみけこを三べ
んつつく。(高島)

○涙袋を除く業でさす。(高島)

○立つている櫛の木を後に背負つて
「この目が直ればはおにだきます
(普通になく)」と申し上げる。(高
島・飯野本上)

○女の人のくしをたたみでこすり、そ
のくしで目かいこの所をなでる。
(高島)

○ミをかぶって井戸のまわりをまわ
る。(櫛の口)

○ミテをかぶって穴からみこでつつく
ミケをする。(櫛の口・下五箇)

○みこで目かいこをつる。そして「お
前は何するの、おれはみけこをつる
んだ」と三回言う。(櫛の口)

○たたみのへりを一本抜いて目をつつ

く。(下五箇)

○表わらの先でみけこをつつく。(宇
奈根)

○着物のつまを紺の糸で三まわりまわ
して、いぼにいわく。直ったらほど
く。(飯野)

○着物の下前を目立つ糸で三針ぬい、
直れば抜くと申上げる。(櫛の口)

○万年ぼうきとしゆを涙穴にさすま
ねをする。(飯野岡村)

北地区

○櫛をゆき、目のふちを三回なでる。
(櫛)

○つげの櫛を火であぶって三回なで
る。(櫛)

○井戸の神に見せ、直ったらまた見せ
る。(除川・細谷)

○背骨のまん中をはりでさす。(細
谷)

○おこゆりする。(細谷)

○ミケゴに針をさし根を取る。(細谷)

○障子のやぶれから物をもらう。(細
谷)

○みこでつつつく。(大新場)

○井戸の中半分顔をのぞかせ、なお
つたら全部見るといつてのぞく。
(大曲)

結んでもらうとなくなる。(大曲)

○ミをかぶってお神にお参りする。
(大曲)

○上目に出たら右上の着物のすその
つまをしばる。(大曲)

○ミテをかぶってみこでつつく。(大
曲)

○さるをかぶりさるの目からわらのみ
こを通してみけこの出来ている人が
「あなたは何をしますか」頼ま
れた人が「みけこをつけに来たん
だ」と三回言つてみけこを引つば
る。(新田)

○つげのくしをたたみの黒いへりてこ
すり、あつくしてみけこ三回つけ
る。(西岡)

○あずきを井戸の中になげるとなえこ
とをする。(西岡)

○背中の毛を三本ぬく。(西岡)

○めやにをわたにつけ、家の角先にほ
うの先につけ立てる。(除川)

○障子の穴からにぎりめしをもちらう。
(除川)

○こむのくしを目にあてるとなおる。
(除川)

(3) よこね

東地区

○しほてんをかける(サボテンのこ
とらしし)。(頼母子)

○足の親指を黒い糸で三まわりまわしてしぼる。(中新田)

○どくだみをせんじて多量に飲ませる。(上新田)

西地区

○いつしよけんめい働かせる。(板倉種荷木・岩田)

○印内(朱肉)をその部分にぬる(靱谷)

南地区

○かまどのスミを三回ぬる。(島・圃の口)

○親指のものをぬい糸で三回まわしてしぼる。(上五箇・飯野辻)

○すがい骨を照して飲む。(飯野・新村)

○食前に茶葉をかむ。(飯野本下)

北地区

○水仙の玉をすってこ飯粒とねりませ

て紙にのしてそれをはっておく。(西岡)

○水仙の玉を酢とうどん粉でねりませる。(大曲)

○生(なま)のあずきを三つ飲む。(細谷)

(4) あ ぎ

東地区

○生れた土地の墓地の土をあざのあるところにはりつける。(山口)

○蛇のぬけがらでなでる。(本郷)

○すずりのすみでぬるとなせる。(上新田)

西地区

○くるみの木の実をつける(板倉種荷木)

○卵のからをあざになする。(板倉中三)

○水をつけてこする。(岩田原宿)

○土をつける。(板倉大同)

北地区

○らんとほの土でこする。(大商場)

○もぐらまたはえりりの黒焼きのすみをつける。(大曲)

○黒をぬっておく。(新田)

○産後親の血で一週間ふいてくれればなおる。(細谷)

○つばきをつける。(大曲)

南地区

○かまどのスミをぬる。(島)

○生まれた時あざがあつたら親のおりものをつける。(種の内)

○米粒をかんでつける。(飯野本上)

○新しい仏を埋めた土をあざの所につ

ける。(飯野本上)

○三日月様を信仰する。(飯野)

(5) し び れ

○おでこを三度なめる。(北海老瀬・頼母子)

○額に三回つばをつける。(北海老瀬・下新田・山口・通り・中新田)

○親指と人さし指に何かはさむ。(北海老瀬)

○額にわらを三センチ位切つてつばをつけてはって置く。(山口)

○しびれたところにこみをつける。(北海老瀬)

○つばを足に三回つける。(北海老瀬・本郷)

○鼻すじを三回なでる。(本郷)

○おでこにつばですという字をかき。(頼母子・上新田)

○鼻の上につばをつける。(山口)

○指をなめて額に三回つける。(中下)

○額につばをつける。(中新田)

○三回指でなめる。(中新田)

○顔をなめる。(小俣呂)

○つばをなめる。(小俣呂)

○指を逆に三度まける。(上新田)

○薬指で額に三度つばをつける。(全地域)

○その時唱えことをする「一ぶれ二ぶれ三ぶれ四ぶれ四ぶれがなおれ」。(板倉中三)

○まゆにつばを三回つけてから額に十字を書き。(板倉中ノ中・種荷木)

○しびれているところに唾をつける。(板倉入南)

○鼻の頭に唾をつける。(靱谷)

○額に梅干しの皮をつける。(板倉川入南)

○目の上を水で三回ぬらす。(板倉雲間)

○足の親指を曲げる。(ひつばる)。(板倉川入南・下・中ノ中・種荷木)

○親指ですねを強く押す。(板倉川入南)

○足を水の中に入れる。(板倉大同)

南地区

○額につばを三回つける。(全地域)

○たたまの糸げばを人に気づかれないようにとつて額にはる。(大久保)

○ひざから下を八・左でながら「しびれしびれきよりのぼれ」と三度言う。(大久保)

○足の親指を曲げる。(高島・飯野本上)

○口と額をかわるがわるさわる。(高

鳥)

○ひざの下よりふくらみを手の親指の腹で強くおしつける。(鳥)

○ひかれた所に三回つばをつけてたく。(國の口)

○つばきを額に十文字につける。(國の口・飯野中新田)

○頭を三度まわし足をなでる。(飯野新村)

○足の親指の裏を上になでる。(飯野本下)

○つちふまずにつばきをつけ、静かにのぼす。(飯野辻)

○親指の頭につばきをつける。(飯野岡村)

○わらをなめて額につける。(飯野辻)

北地区

○こみを額にはる。(除川)

○しびれた所につばをつける。(除川)

○額につばを三回つける。(除川・新田・大曲・細谷・離)

○足のしびれは足の指につばきをつけてこれがかわくとなおる。(西岡)

○額につばをつける。(西岡新田)

○ひざにつばをつける。(大曲)

○はくと額とあごを十文字につけて手をあわせる。(大曲)

ヒタイに三回つけることをくりかえす。(大曲)

○額に十文字に紙をはりつける。(細谷)

○額に指先でつばをつけて十文字に三回かく。(離)

○足の親指をなめる。(離)

(6) こぶ

東地区
○こぶのところへつばをつける。(北海道老瀬・上新田)

○地藏様に申しあげる。(山口)

○石打のこぶの親音に申しあげる。なおつたらダンゴをあげる。(北海道老瀬・小保呂)

○なま米をかんでつける。(本郷、通り・上新田)

○石打親音にたのむ。(頼母子)

○こぶの親音に申しあげる。(山口・小保呂)

○息を指に吹きかける。(中新田)

○からすにお祈りする。

○お茶の葉をかんでやる。(中新田)

西地区
○こぶの親音に申し上げる。(全地域)
※石打の親音様(雲間・種荷木・原宿)

地藏様(種荷木)

○つばをつけてなめる。(全地域)

○子供の場合親が三べん顔をなでる。(飯倉種荷木・岩田)

○白米をかんでそこににつける。(飯倉雲間)

○梅子をつける。(穀谷中)

○すをつける。(飯倉大同)

○あぶらんけん、あぶらんけん、あぶらんけん、と唱える(飯倉中ノ中)

○水でひやす。(飯倉・岩田)

南地区
○石打のこぶの親音に申し上げる。こぶがなおればお礼にお参りします。という。(全地域)

○足の親指を糸でしぼる。(鳥)

○つばきをこぶにつけてなでる。(鳥、國の口・上五箇・字奈根・飯野・本上)

○こぶをかんでつける。(大久保)

○砂嚢をかんでつける。(大久保)

○息を吹きかけてこぶの上をなでる。(高鳥)

○息を吹きかけて「お前のこぶでないカラス(こぶになれ)」と言ってなでる。(下五箇・字奈根)

○灸をすえて白いものがでると治る。(飯野)

北地区

○こぶ地藏様にうしあげる。(西岡細谷)

○なめてやる。(大曲)

○なま米をかんでつける。(除川・大曲)

○コブとり親音様に申し上げる。(除川・新田)

○もち米をかんでなすりつける。(新田)

○石打の親音様に治つたら底のないひしやくをあげるという。(新田)

○つばきをつけてやる(西岡新田)

○つばをつけてなでてやる。(西岡)

7) こうで

東地区

○男なら女の末つ子に障子の向うから手首をしばつてもらおう。女は反対のことをする。(北海道新田・本郷・頼母子・山口・峯・通り・中新田)

○初つ子の男の子に障子のまどから手をだしてしばってもらう。(本郷)

○大工のすみつばの糸でしぼる。(山口・上新田)

○他人の末の女の子に足の親指で糸でこまわりして結ぶ。(山口)

○三十三才の女に糸で結んでもらう。

○おかま様のすみをかりてつける。なおつたらダンゴをこしらえてあげ

る。(峯)

○黒い縫いで手で手首をしばつてもらう。(中新田)

○はしこの間に手を入れて、末つ子に糸でしばつてもらう。(中新田)

西地区

○太陽の出ないうちに、錆い方の手を持って東を向いて「東山のやせ男、招けてこうで痛くて招かれぬ、あぶらおんけんそわか」と三回言う。(全地域)

※「大男」という所あり、男が唱える場合は「やせ女」、女が唱える場合は「やせ男」というものもある。

○末子に障子の穴から糸で手をしばつてもらう。(全地域)

※「両親のいる末子」というものあり。

男なら女の末子、女なら男の末子と但し書きするものあり。

糸は大工が使う黒つぼの糸

山まゆの糸というものもあり。

○棟上げのときの麻を腕にまく(飯倉川入南・下・岩田本倉)

○こくぞう様をおがむ。(岩田骨橋)

○おきゆうをすえる。(観谷)

南地区

○山まゆをたてに巻く。(鳥)

○男の人は障子のさんから手を出して末の子に麻糸でしばつてもらう。

○きゆうをすえる。(鳥)

○東を向いて手首を動かす。(大久保)

○大工のシミつぼの糸でしばる。(鳥)

○朝東の空にむかい、男は女を、女は男を呼んでこうで手で三回招く。(鳥)

○鉄びんのつるへ手をくぐし、男なら末の女の子に、手をしばつてもらう。女なら末の男の子に手をしばつてもらう。(飯野待辺)

○こうで山のこうで男こうで痛くてまがれぬと唱える。(飯野岡村)

○むれタオルでむす。(飯野本下)

北地区

○障子の破れている所から手を出して男は男の末の子、女は女の末の子に手首を糸でゆわけてもらう。(細谷)

○はしこの穴に手を通して男は女に、女は男に手首をしばつてもらう。(雄)

○やかんのつるの所へ手を出して黒木綿糸で二まわりしばる。(雄)

○なべつるのしの下を通して糸でしばつてもらう。(大曲)

○赤子に障子の穴から手を出させて木綿糸でしばつてもらう。(大曲)

○家を作った時お祝の麻で一番末の子に手首をしばつてもらう。(新田)

○東の方を向いて手まわきをしながらこうで山の男に女の人は男の末つ子に男は女の末つ子にしばつてもらう。(西岡)

(8) まめ

東地区

○なすのへたをつける。(北海道)

○口の中で三回おがむ。(北海道)

○糸に墨をつけて針でまめの中を通す。(北海道本郷・峯・中新田)

○黄のついで「つき木」でまめの上を(火をつけて)こする。(下新田)

※黄とは硫黄のことらしい。

○鼻の油をなでて「たこなれ」という。(頼母子)

○煙草のやにをつける。(山口)

○金つちで三回たたく。(山口)

○指の先でまめの上を三回なでる。硫黄をなでてぬる。(通り)

○指でなでながら「あひらうんけんそわか」と三べんとなえて口でふく、となえごとをして三べんたたく。まめのまわりを人さし指でまわす。(中下)

○煙草の粉と御飯の粒をつける。(中新田)

西地区

○墨をぬつた糸のついた針でさしとうす。(全地域)

○煙草のやにと御飯をまぜてぬり、紙につけて貼る。(全地域)

○金火はしてやいてつける。(飯倉川入・雲間・岩田原宿)

○左のおや指のはらでまめを押しして「これでもか、あぶらんせんあか」を三回言う。(飯倉宿)

○「ひやくふあぶらんけんあぶらんけん」という。(飯倉中三・雲間)

○まめに鼻の頭でなで「たこになれ、たこになれ」と唱える。(飯倉大同 観谷下)

○鼻の油をつける。(飯倉大同・岩田原宿)

○まめに墨で文字を書く。(飯倉川入南)

○袖子のとげでさす。(飯倉川入)

○大豆でまめをなでてやる。(観谷中)

○塩をつけて、だれかにおがんでもらう。(岩田山下)

南地区

○「たこになれ、たこになれ」と鼻で三度なでる。(大久保・雄の口・上)

五箇)

○鼻の油をつける。(高島・飯野・岡村)

○とかげの油をつける。(丸谷)

○煙草の灰をこはん粒とわってほる。

○下五箇(飯野・木上)

○塩をつけて火であぶる。(宇奈根)

○金火はしを焼いてまめのの上をころがす。(飯野・辻)

○自分の年数だけまめのまわりを親指のつま先で数えてつぶし、息を一息思う存分吹きかける。(飯野・木下)

○縫い糸に親のスミをつけ針といっしょにまめの中を通す。(高島・下五箇)

北地区

○米のめをほじつてその米をふまれない所にうめる。(除川)

○こはんの時、きせるのやになつける。(除川)

○鼻の油をつける。(除川)

○たばこのやにつける。(西岡)

○針に黒糸を通して、まめに通す。(西岡)

○鳩という字をまめに通す。(新田)

○墨を糸にふくませて針で通す。(新田)

○ほうろくを見せる。(新田)

○つけぎの硫黄で焼く。(新田)

○すみをぬる。(大曲)

○ゆずのトゲでさしすみをぬる。(大曲)

○針ですみをつけてぬる。(大曲)

○いたくも三日間がまんして仕事をたづけていれなおる。(細谷)

○針でつづく。(細谷)

○針で糸を通してすみをつけてまめを通す。(細谷・離)

○つぎでこする。(細谷)

○つるけるほうずにならぬ。(離)

(9) しやつくり

○茶わんに水を入れてはしを十文字に四すみからのむ。(北・山口・中下・南全地域・除川・西岡・大曲)

○茶わんに水を入れてはしを十文字に組んでのせ、その間からのんでいく。(西全地域)

○茶わんに水を入れてはしを十文字に置き息をつかず四回のむ。(西岡)

○茶わんに水を入れてはしを十文字にせとなえことをしてのむ。(離)

○はしを十文字にして一ヶ所から水を三口のむ。(北)

○茶わんに十文字をかいて角からのむ。(下新田)

○器に水を入れ二本のはしを横にして水をのむ(細谷)

○器に水を入れそれを三口でのむ。(細谷)

○水を三回のむ(北・中新田・島・高島・樋の口・飯野木上・大曲)

○鼻をつまんで水をのませ後からおどかす。(北)

○鼻をつまんで水をのむ。(新田・大曲)

○水がお湯を息をつかず(鼻をつまんで)のむ。(板倉川入・大同・親谷中・下)

○息をつかず、水をのむ。(山口・中山)

○塩水をのむ。(島・大久保・板倉大同)

○一三三四五、五四三二と数えてすぐお湯をのむ。(板倉川入・大同・親谷中・下)

○親が水をやるとなおる。(岩田原宿)

○頭にはしを一本たてる。(山口)

○頭にはしを置いて水をのむ。(頼母子・中新田)

○頭の上にはしをたてる。(中下、除川大曲・板倉桐荷木・中三・大林・岩田原宿)

○はしを頭の上にかかさに立て息をつかずにつばを三回のむ。(西岡)

○息をつかずつばを三度のむ。(通り・板谷浮戸・飯野木上・木下)

○息をつかないでいる。(板倉大同・西岡)

○しやつくりが三回でないうちくちびるをなめる。(北・中山)

○一回しやつくりをしたときよくちびるを三回なめる。(島)

○手の指につばをつけ鼻すじをなでる。(頼母子)

○手の掌に「柿」という字を書いて三回なめる。(細谷)

○空に大きく「天」という字を書く。(板倉中ノ中)

○たまがす。(大曲を除く板倉町全地域)

○頭の上にはしを二つをのせて胸を張る。(板倉大同)

○背中をたたく。(板倉下・親谷松崎)

○左を向いて三回トラ〜という。(高島)

○息をつかず左の方へ首を曲げる。(飯野・岡村)

○手をあげる。(大曲)

○あたためる。(大曲)

(10) はたけ

○麦飯のあわをつける。(北・中山・山口宿・中新田・上新田・西全地域・南の全地域・細谷)

○麦の御飯をにて「あぶくを麦ををつ

くれ」といいながら顔につける。

(西岡)

○御飯のあわ(あぶく)をつける。

(北一・中山・本郷・頼母子・中新田・西岡)

○米のとぎ水で洗う(梶谷下)

○すみをぬる。(下新田・山口宿・中新田・西全地域・大久保・高島・丸谷・下五箇・飯野木下・除川・西岡・大曲・細谷・難)

○硯の墨をぬる。(北西・頼母子・通り・中新田・細谷)

○すみ水を外まわりから中へかけてぬりながら雨無妙法蓮華経を十べん唱える。(飯野木下)

○墨を「たまむし、たまむし」と唱えながら丸くぬる。(板倉大同)

○墨で「はたけ」の字を何度も書いて真黒に塗るつづす。(岩田下山前)

○良いすみをまわりぬって置く。(西岡・中新田・大曲・細谷)

○すみをすつてのむ。(除川)

○煙(はたけ)をおこして種をまくまねをする。(北舟戸)

○くわで顔をたがやすまねをする。(西岡)

○馬の油内ではたけの所をなする。(北南)

○馬になめさせる。(板倉大同)

○なますになめさせる。(梶谷)

○てぬかの油をぬる。(西岡)

○青がえるの腹でこする。(峯)

○壁土をつける。(島)

○せせなの中につっこむ。(大曲)

○豆をころがす。(宇奈根)

○どしよをころがす。(内蔵新田)

○木を燃してあとに出たあわをつける。(岩田原宿・西岡)

○へちまの汁をつける。(岩田原宿)

○菊を塩でもんでつける。(梶谷下)

○ダイオウの根をすり下してすをまぜてつける。(高島)

○みそ汁をすう。(飯野木上)

○しやぼてんをすり下してつける。(飯野岡村)

○白つゝじの花をもんでつける。(大曲)

○せりをもんでつける。(大曲)

○夏みかんのしるををつける。(除川)

(11) やけど

○「狼沢の池の大蛇がやけどして水なき時には油おんけんそわか」と三回唱える。(北一・中山)

○「狼沢の池の大蛇が火に入りて、焼けて焼けぬをさるそが焼く」と三回唱えて水をつける。(岩田新田)

○「狼沢の池の大蛇水なき時に焼けて」と三回唱える。(西岡)

○「おおみの池の大蛇が焼けこげ水なきときにはあぶらんけんそわか」と唱える。(飯野木下)

○「ひやくあぶらんけんあぶらんけん」と唱える。(板倉中ノ中・雲間)

○「アブラオンケン様」と三回となえる。(西岡)

○せせなの中をやけどしたところを入れる。(頼母子・飯野・岡村)

○せせなのまわりの冷たい土をぬる。(丸谷・宇奈根・西岡)

○流しの下の土をぬる。(谷新田)

○小便だめに焼けどの所を入れる。(丸谷・下五箇・宇奈根)

○ぬかみその中に手を入れる。(峯・通り・高島・樋の口・新田・難)

○味噌をつける。(頼母子・中下・板倉新木・中三・岩田・下山・大久保・高島・丸谷・下五箇・細谷・新田・難)

○油をつける。(北一・本郷・通り・中新田・板倉・岩田・除川・西岡・新田・大曲・細谷・難)

○ゴマの油をつける。(南全地域)

○馬の油をつける。(宇奈根)

○油うやくをつける。(難)

○醬油をつける。(山口・原太・日影・通り・中新田・岩田新田・内蔵新田・南全地域・大曲・難)

○醬油と黒砂糖をまぜてぬる。(山口)

○黒砂糖をぬる。(細谷)

○黒砂糖をかんてつける。(梶谷・松崎)

○塩をつける。(板倉大同)

○わたのたわしにけりりのすみをつけてそれに塩をつける。(飯野侍辺)

○じ・がいをすつて油とぬる。(北一・舟戸)

○じ・がいをすつてつける。(北一・中山・南・山口・通り・中下・西全地域・樋の口・下五箇・飯野木上・新田・大曲・細谷)

○馬鈴薯をすつてアタと一しよにまぜる。(板倉・雲間)

○いもとしようがをすつてつける。(下五箇)

○サボタンをおろしてつける。(下新田・本郷・山口宿・西全地域・島・除川・西岡・新田)

○青木の葉とサボタンを塩でもみつつける。(岩田原宿)

○水仙の根をすり焼けどにつける。(下新田)

○大根をおろしてつける。(除川)

○きゅうりの種でひやす。(西岡)

○きゅうりのくされたのをつける。(大曲)

○きゅうりの水をつける。(大曲・細谷)

- 欄の皮をせんでつける。(頼母子)
- 蛙の皮をつける。(頼母子)
- 耳たぶに焼けどの所をつける。(鳥)
- 牛になめてもらう。(中新田)
- 馬肉をつける。(飯野本上)
- 三回かいて三回ふく。(北一中山)
- 焼けどしたところを三回ふいて、上から井戸水をかける。(飯倉大西)
- 唱えことを三回いって息を三回吹きかける。(雑)
- キザミ煙草をにてその汁をつける。(宇奈根・飯野辻)
- お茶をらをつける。(飯倉川入南、雲間)
- 夏菜をもんでつける。(中下)
- 夏菜の黒焼きをつける。(鳥)
- 「やけど薬」といわれる薬をつけておく。(飯倉種荷木・岩田)
- ゆづり薬を焼けどにつける。(大曲)
- かきしぶをつける。(中新田・高島)
- 唐辛子をつける。(岩田原宿)
- へちまの水をつける。(高島)
- 石けんをつける。(高島)
- 重そうをつける。(大荷場・細谷・雑)
- 蜂の巣をこなにすしてつける。(細谷)

- 新聞を十二枚に切つて湯呑みにかぶせて上に炭を置き下に落ちた水を脱脂綿につけて虫歯につける。(山口原大)
- 新聞紙の下へ茶わんを置いて上に火を置くとお湯がたれるそれをつける(直る。)
- 新聞紙を焼いて油をわつてつける。(宇奈根)
- 雷の落ちた木でなでる。(頼母子・中新田)
- 雷が落ちてきた木ぎれ(ようじ)を痛む歯の中にさしこむ。(岩田原宿)
- 雷の落ちた木をかめばよい。(高島新村)
- 雷の落ちた木の細い楊子みたいな木で歯を磨く。(大曲)
- 梅の芽でむし歯のところをさす。(飯倉大同)
- 梅の枝を三センチ位の長さで切つて陰香であぶり、お経を唱えながら虫歯につける。(親谷業師堂)
- 大師様のはして虫歯をつつく。(下五箇)
- 松の葉を焼いて粉にして痛む所にすり込む。(下五箇)
- 虫の骨を黒焼きにして虫歯にかぶせる。(飯野本下)
- 油をつける。(中新田)
- 食用油をにたて綿で虫歯につける。

- 油を熱して歯の中に入れて焼きとめる。(飯倉川入南・岩田本台)
- 油をつけた綿に火をつけて歯につける。(飯野本上・本下)
- 火はしを赤く焼いてごまの油をつけてそれを虫歯につける。(北・南)
- 「ひやくふあぶらんけんあぶらんけん」と唱える。(飯倉中ノ中)
- 石を焼き、食用油をたらして、ネギの種を燃しながらその煙を竹筒にとつてふたをし、耳の中へ入れると、虫が出てなおる。(親谷上北)
- ニラの種をむして、それにあい油を入れてその煙を耳にとおす(飯野辻)
- 塩をなめてつばをだす。(北一戸戸・四箇)
- 塩をつける。(飯倉・岩田)
- 塩をいってかみしめる。(岩田下山前)
- 塩を虫歯の中につける。(下五箇・飯野・岡村・雑)
- 塩水でうがいをする。(飯倉大同・岩田・原宿)
- うがいをしして薬をつける。(細谷)
- もち草をもんでつゆをつける。(山口・原大・大曲)
- もち草を塩でんで歯でかむ。(新田・飯倉石塚・親谷松崎・内蔵新田)

- 五円玉を玄関にきぎでぶちこむ。(中新田)
- あがりな(人のよく通るところ)に五円玉(五錢玉)をくぎで打ちつけ、むし歯が痛んでくると、ヘーッと思を吹きかける。(飯倉川入南・石塚)
- あがりなは五円玉をくぎで打つて痛くなった時三度たたく。(岩田風張)
- 晋のお金を痛む歯でかむ。(内蔵新田)
- 五錢のめどあき(五円玉)を土台で三回はたく(鳥・飯野本下)
- 天保銭を数箇の上にくぎで打つて置く。(鳥・高島)
- 御の字をかいてくぎうつなり、たぎたぎの御飯をあげる。(大荷場・細谷)
- 足の裏の形を紙にうつし取りこれに目・鼻、口をかき、口から歯を出すようにかき痛む所に「キリ」をさして置けばなおる。(下新田)
- 痛む時は先達か祈禱した紙をかんでいるとつばがでてなおる。(下新田)
- 信心様に押し上げる。(北一中山)
- 山神様に申し上げる。(中新田)
- 天神様にタヌシを食べないからと申し上げて治つたらタヌシを五つあげる。(鳥)

○いなり様に豆腐を上げて申し上げ
る。(大曲)

○梅干の皮を削い所にはる。(下五箇
飯野・岡村)

○梅干を御飯つぶでわりほほにぬる。
(除川・西岡)

○梅干をくわえて水をたらす。(西岡)

○わぎの白根をくわえている。(親谷
谷)

○おきゆうをすえる。(親谷下・細谷)

○耳にきゆうをすえる。(飯野・岡村)

○肩にきゆうをすえる。(大曲)

○穴の中にやびをやく。(新田)

○ハツカをつける。(板倉中三・岩田
小平)

○タンサンをつける。(通り)

○ジユウツウを前の中に入れる。(新
田・大曲)

○石炭酸をつける。(板倉川入南、下
岩田原宿・本倉)

○なすのへたをつける。(北西)

○焼豆を家の土台の下にうめる。(山
口・日影)

○大豆を真黒に焼いて橋の上に置く。
(板倉中三・石塚・岩田原宿)

○どぶをきれいにそうじする。(頼母
子)

○火尻しをする。(板倉宿南)

○火はちの灰を茶わんに入れて水をさ
し、それをむ。(板倉福荷木)

○便所のうじ虫のぬけがらをつける。

(板倉大同、大林)

○大根をおろしてつける。(親谷松
崎)

○わぎを細かにきざんで塩でもみ縮い
所にはる。(新田)

○おずみのふんを前につける。(除川)

(13) 六 算

○かまごに練香を六本あける。(北一
山口留・中新田・除川)

○かまごに練香を六本朝あける。
(除川)

○いろりに練香六本あげ「直して下さ
い」と拝む。(中下・頼母子)

○いろりに練香を半分にして六本あ
げ、直れば半分にして六本あ
(難)

○いろりに練香を一本あげ直つたら六
本あける。(下新田)

○練香を三本あげ直れば六本あける。
(北南)

○自分の年をいってから練香を三本あ
げ、直れば六本あける。(西岡)

○練香を「全快したら全部あげますか
ら」といって「二三本あげて、全快
したら六本あける。(山口・原太)

○最初練香を六本たて、毎日一本つづ
減らしながら六算様へあける。(北一
舟四)

○練香を六本六算様へ上げる。(兩全

地域)

○練香を六本たててまじないをする。
(下新田)

○仏様に練香を六本と水をあける。
(大曲)

○仏様に練香をあける。(本郷)

○いなり様に六本練香をあける。(熊
三つ又(三本つじ)に練香を六本あ
げる。(通り・高島・大曲)

○三つつじに練香をあげて、他人の知
らないよう拝む。(大曲)

○四つつじに練香をあげて、後
を向かずにかける。(新田)

○いろりに練香を三本あげて申しあげ
る。(頼母子)

○かまごに練香を三本あげて申し上げ
る。(幸)

○かまごに練香を一週間上げる。
(中新田、小保呂)

○流しの下へ練香を三本たてる。(北一
中山)

○流しの口へ練香を上げる、直つたら
何かしらえて上げる。(板倉石塚
・岩田本倉)

○井戸堀に二本練香をあける。(北一
中山)

○練香をたてておがむ。(除川)

○雨だれのおちる所に練香を上げる。
(大曲)

○ロウソクを神様にあげ全部なくなる

までにロウが流れなければよい。
(通り)

○ロウソクを立てて、ロウがたれなけ
れば六算であるという。なおつたら
六種類の菓子を神棚にあげる。(岩
田新田)

○かまの蓋の上にロウソクを六本立て
て折る。(岩田小平・谷中)

○かまの蓋にロウソクを立ててたの
む。(大曲)

○小さいロウソクを六本と、六色の菓
子をお供え、ロウソクが燃えきってか
ら供えたかしを他人に分けてあたえ
る、この時本人が食べるときかな
い。(高島)

○新しいロウソクで燈明をあげておが
む。(飯野本下)

○太神宮様にロウソクをあげておが
む。(新田)

○家の氏神様に豆腐を一本あげてそれ
を一人たてべる。(通り)

○豆腐を一つ針にさして川に流す。
(山口、宿)

○豆腐を半の數だけ切つて酒と醤油を
かけ神様におおがむ。(中下)

○豆腐「丁をその年の年の數だけさ
いの目に切り、酒一台と醤油少しと
をそえて神棚へ供へ、よく祈願し、
「五王ある中なる王に覆られ、病い
は特に逃げ去りにけり」との歌を

十べんとなえ、拍子を四つ打ち、礼拝を九回して、酒を三口頂き、豆腐を白口醤油をつけて食へ、その残りは白紙に包んで川へ流す。(岩田原宿・飯谷下・飯野本下)

○豆腐を買ってあげ、六算除けのお札で体の痛むところをなで、豆腐を川へ流す。(飯倉大岡)

○豆腐一丁を六ヶに切り「どうかなおして下さい」と六算様に拝ま、一ヶを患者が食べて残りは川へ流す。(大久保)

○豆腐一丁を自分の年の数だけ切って一つだけ食へ、後は川に流す。(宇奈根)

○豆腐をさいの目に切って食べる。(飯野中新田)

○豆腐をこまかく切ってさんだらの上のせて川に流す。(大曲)

○桶筒へ豆腐をあげてすみずみをいれ、(難)

○いろりの南西の角に線香をたて、豆腐をあげる。(新田)

○かまどへ申し上げて、あげたものを子供にくれる。(新田)

○六色の菓子をあげてたのむ。(中新田)

○六つの品を供え線香をあげておがむ。(山口・中山)

香を六本立てる。線香が燃えきつたら、六算の人がいたゞく。(飯倉・野谷)

○菓子を六種類仏壇に供え、お経をあげてそれをいただくとなおる。(高島)

○六算様(供物)菓子を六つあげる。(下五箇)

○線香を六本、六色の菓子をあげてその菓子を自分一人でたべる。(飯野本下)

○線香六本たて、アメを六つあげて、子供に一つずつくれる。(大久保)

○菓子を六品神にあげる。(飯野本下) 福を掃いて七色の菓子と線香をあげる。(陸川)

○六算様へ七色の菓子をあげ、線香を六本たておがんで六算の人がその菓子を食べる。(新田)

○菓子を三色つんで濠角に置く。(高島)

○菓子をたべる。(新田)

○花がしをあげて線香をあげる。(大曲)

○色紙を六本の棒にはさんで、三方の色にたてる。(野谷中ノ湯)

○六算という札を書いておがむ。(中新田)

○六算様で箱い所をなでる。(穂の口下五箇)

○六算除けの札で悪い所をなでる。なおつたら、そのお札に半紙をかぶせる。(西岡)

○お札をもらってなすりつける。(新田)

○六算除けのゴフをのむ。(飯野本下)

○ゴマをいって、このゴマが生えるままでに申し上げる。(飯野待生)

○六算除けをつくる。(西岡)

○先達におがんでもらう。(岩田小山下山・内蔵新田・南全地域)

○先達に六算除けをしてもらう。(陸川・西岡)

○おまじないをする。(陸川・新田)

○痛い所がなければ、酒をあげておがむ。(西岡)

○ちやば台のすみ三ヶ所御飯をあげる。(大曲)

○おきゅうをする。(難)

○しばらくしないで風通しをよくする。(野谷)

○(15) かくらん きゅうりをすって足の裏につける。(西全地域・陸川・大曲・大舞場・難)

○足の裏にきゅうりをつけてねる。(北一戸)

○足の下にきゅうりの種をつける。(東全地域)

○きゅうりの種を塩でもんで足の裏につける。(西岡新田・野谷・難)

○きゅうりの種で足をあらう。(北一戸) 祖神・通り・中下・中新田・小保呂・上新田・南全地域)

○きゅうりの水で足を冷す。(室)

○足の平へきゅうりの種と夏大根をおろしてすりこんで置く。(額母子)

○きゅうりの種と豆腐か薬を塩でもんで体にすりこむ。(通り)

○きゅうりの種をたべる。(中新田・小保呂・飯野本下・本下)

○なべて足を洗い、きゅうりの種を足の平につける。(飯野辻)

○梅干をくってきゅうりの種を足の平にぬる。(室)

- 梅干を食べる。(西園)
- 梅干をつける。(除川)
- 梅干を飲む。(北一・舟戸・板倉中ノ中・岩田・小平・島・高島・新田)
- 菅笠をかぶせて上から水を三回かける。(東地区の一部、南全地域、新田・大曲・雄)
- 菅笠をかぶせ、上から(三ばい)水をかける。(西全地域)
- 菅笠をかぶり井戸水をかぶる。(山口・西園・除川・西園・大筒場・細谷)
- 菅笠をかぶり流して井戸水をひしゃくで三ばいかけ、菅笠から水がもれば、かくらんでもらなければかくらんでない。(高島)
- なべと菅笠と水を手おけに入れて表の台所の敷居に行き、上半身はだかになり、片足なべに入れてこしかけて、菅笠をかぶつてかがむようにして、水をひしゃくで三ばいかける。(北新内山)
- 入り口の敷居の上で菅笠をかぶつて上から水をかける。(峯)
- かぶり笠をかぶつてバケツに三ばい水をあびる。(北中山)
- ももの木の葉と妻がらをよくに洗う。(下五箇)
- ももの花をつんで置きお湯をたてる。(新田)
- 入口に腰かけなべて足を洗う。(山

- 口・原田)
- 足の平(裏)に大根をすりつける。(北西)・板倉大同・靱谷・西園・大筒場)
- 大根をおろしてすねにぬる。(丸谷)
- 背骨に大根おろしをぬる。(飯野本上)
- 足の裏に塩をすりこむ。(岩田下山前・西園新田)
- 八坂神社のお祭に、おくらん草を供えて、村中のかくらんを除ける。(岩田新田)
- へそに水をのせる。(板倉中ノ中・雲間)
- きんかんをつける。(板倉雲間)
- 小麦粉を水にとって飲む。(板倉桶荷木)
- 玄間にむしろをしき、北向きにすわって水をのむ。(飯野本上)
- ハツカを足につける。(雫)
- 鉄の品物で足を洗う。(雫)
- すをかがせる。(除川)
- 16) はし
- 北向きに馬小屋の桶をかぶる。(北一中山、山口原太、下五箇)
- きんかんを食べる。(本郷・山口日影・西全地域・除川・西園新田・大曲・大筒場)

- きんかんをせんじてのむ。(南全地域・西園・雫)
- きんかんを布団の下に入れておく。(飯野本上)
- きんかんを米粉餅とせんじてのむ。(新田)
- こぼりの桶をせんじてのむ。(島・大筒場)
- こぼりを食べる。(飯野本上)
- 大妻を一合袋につみ病人の名を書き、出入口の土台下にうめる。(通り)
- 暖い(こ)はんをたいたばかりのときおひつに調飯をあげてしまつた)おかまを三回かぶせる。(西全地域)
- はしか地蔵様に申し上げる。(板倉川入)
- 金貨を手に乗る。(岩田)
- いかを食べさせる。(西全地域)
- 鹿の角をけずって飲む。(下五箇)
- ころんじょうを飲む。(下五箇)
- こしくを小さく切つて飲む。(飯野本上)
- 白雨天の裏を腰につけて置く。(下五箇)
- 石橋を七橋渡る。(飯野新村)
- 17) てんかん
- わらじを頭にのせる。(東一・舟戸・頼母子・峯・通り)

- (西全地域)
- (南全地域)
- (北一・西園・新田・細谷・雫)
- ぶんのくどの毛を引っばる。(東一中山)
- 足の親指を曲げてオキニウをすえる。(東一・日影)
- 猿の頭を黒焼きにして食う。(東一・通り)
- 水をかける。(東一・不明)
- (西一・桶荷木・大筒)
- (北一・除川・大曲)
- ざくろの皮をせんじてのむ。(東一・不明)
- せなかをたたく。(東一・不明)
- 人が死んだ時あびせた水を飲ませる。(東一・不明)
- ひたいを草履で三回たたく。(西一・板中・下山)
- (西一・板倉大同)
- (北一・除川・大筒場)
- えり首を押す。(西一・岩田原宿)
- はしをたてる。(西一・板倉大同)
- 手をなめさせる。(西一・板倉雲間)
- たばこをすわせる。(西一・板倉大同)
- ニキノシタの葉の汁を飲ませる。(西一・岩田風雲)
- モズがえさのため、はりつけたカエルを黒焼きにし、せんじてのむ。

○(西―岩田原宿)
○便所の草履を頭にのせる。(南―高島)

○わら草履を木にひたして胸にあて

○(南・大久保)

○煙草の煙をふきかける。(南―飯野新田)

○はいていた下駄を胸にのせる。(北―細谷)

○強い風にあてる。(北―細谷)

○虫下しをくれる。(北―大荷場)

○口の中にはさみをいれる。(北―大荷場)

○下駄を頭にのせる。(北―大曲)

○さくろの木をもたせる。(北―除川)

(18) とりせき(百日せき)

○馬の字をさかさに三つ書いて戸口にはる。(東―道祖神・下新田・宿東原太・通り)

○(西―板倉橋荷木・雲間)

○軒下に、ニンニクをおく。(東―舟戸)

○(南―飯野・木上)

○(北―四ツ)

○鳥の字 鳥の絵を書いて逆さにして張つて置く。(東―中山・新内山)

○鳥の絵(南―大久保)

○鳥の字(三ツ)(高島)

○まめをいっておくりだす。(東―中山)

○(西―岩田原宿・初谷・中)

○にわとりを三羽さかさに書いて軒下にはる。(東―西地域)

○おとし様に申し上げて、なおつたら卵を二つあげる。(東・南地域)

○馬のふんの水を飲ませる。(東―本郷)

○敷居下に穴を掘って卵をうめる。

○(東―頼丹子)

○神様から麻をかりてきて百にまく。

○(東―日影)

○(西―板倉宿)

○(南―丸谷・樋の口)

○(彌生の明神様)

○米おけにしもじを入れる。(東―通り)

○馬の神様に申上げる。(東―中下)

○(北―除川)

○わざを首にまく。(東―中下)

○(南―高島)

○(北―大荷場)

○白雨天をせんじてのむ。(東―大門西)

○(西―板倉川入・橋荷木・岩田小寺)

○雨天をせんじてのむ。(板中・川入)

○(南―田下山・榎下・業師堂)

○(北―除川)

○三角かどへかおを上げる。(東―小保呂)

○雪の下をせんじて飲む。(東―不明)

○(北―除川)

○いかげやのちよこで水をませる。(東―不明)

○白雨天の木を手のひらの長さに切り

腰ぎんちゃくにに入れて下げる。(西―親谷上)

○前記を百日以内の赤んぼの時行う

○(西―親谷松崎)

○その子の息をかけ、お金を一掃に入

れる。(西―板倉大同・大林・石塚岩田新田)

○さん俵にのせて。(西―親谷・上・内蔵新田)

○(西―板倉中)

○みかんをせんじてのむ。(西―岩田原宿)

○水あめに大根をつけて汁を飲む。

○(西―親谷)

○かぎツルンにお玉じくしの子をつ

るす。(西―岩田原宿)

○入りに五寸きぎを打ち、他の人に踏んでもらう。(西―田原・宿)

○北向きの馬小屋のいかばおけをかぶ

せる。(西―板倉橋荷木・岩田・下山・親谷浮戸)

○カメノコ様にだんごやきもちを上

げるす。(西―岩田原宿)

○(親谷の安勝寺にある)

○うなぎを食う。(南―島)

○金魚を黒焼きにして食べる。(南―大久保)

○(北―大曲)

○大工の使う糸を蓋んで首にまく。(南―大久保)

○(北―磯)

○川からひろってきたわんを入口の所

にかけておく。(南―島)

○くしとハンカチのようなものにせき

をふきかけて道に捨てる。(南―高島)

○かいがらを糸でとぶ口につるす。

○(南―高島)

○オンドリのトサカに傷つけ、その生

血を飲む。(南―高島)

○うどん粉をいってなめる。(南―丸谷)

○白雨天の実十粒と黒豆十粒を一合の

水でせんで何回にも分服する。

○(南―樋の口)

○三夫婦そろった家のしやもじを借り

て、その家の人になでてもらう。

○(南―樋の口)

○舟のこけらを飲む。(南―下五箇)

○三夫婦そろっている一番年よりの人

のおおんに飯を盛り、大神宮様にあ

げたのをもらって食べる。(南―下五箇)

○どうろく様のたすきを借りる。治つ

たら倍にして返す。(南―飯野待

刃)

○馬肉の味噌にを食う。(南―飯野

社)

○古河の三國橋にたまった橋のアカを

飲む。(南―樋の口)

○かきのへたをせんで飲む。(南―

飯野持延

- なめくじを黒焼にしその粉を炊む。(南―飯野本上・本下)
- 白南天、黒豆、くちなしをせんじてのむ。(南―宇奈良、飯野新村)
- せみのぬけがらを粉にしてのむ。(南―宇奈良)
- 干しうりが砂糖を加へ時々なめくじ。(南―上五箇)
- とうがらしを入口につるしておく。(北―除川)
- すずめの黒焼を食べる。(北―西岡)
- おこり様に申し上げる。(北―西岡)
- かまを頭にかぶせる。(北―西岡)
- んにくを食べる。(北―新田)
- ねぎを布で包んで道のまわりにおく。(北―新田)
- おわつし様をおがむ。(北―新田)
- くろみをせんじてのむ。(北―大曲)
- ねぎを焼いて首にまく。(北―大曲)
- とりの神をおがむ。(北―細谷)
- 鳥のオスをかりてきて、さかさにとぶにつるしておく。(北―藤)
- お金を目のふちになすり紙に包んずでる。(北―大荷場・藤)
- 大豆をいって目になすり、四つじにもって行き送り出す。(北―大荷場細谷・藤)

(19) はやり目(やん目)

- 豆を焼き紙に包み、目をこすり三つじにする。(東―山口・中新田宿(西全地域)(南・高島・下五箇・飯野は、岡村)(北―大荷場・細谷・藤)
- 目を焼き、お金を入れて紙に包み、目をこすり、三つじにする。(東―頼母子・中下)(西―観谷松崎・兼助堂)(南全地域)(北―西岡新田)
- 豆を焼き米を包んで三つじにする。(北―大曲)
- 大豆を焼いて唐辛子を添え綿で目をふいて三つじにする。(東―山口)(西―板倉)(南―島・飯野新村・中新田・本上・上五箇)
- 大豆を焼いて唐辛子を添え綿で目をふいて三つじにする。(東―山口)(西―岩田)(北―細谷・藤)
- 唐辛子を綿を添え、棒につけ三つじに立てる。(東―北・下新田・本郷・頼母子・山口)(南―藤の口・谷新田・下五箇)(西―板倉)
- 唐辛子に綿、金を添え、三つじに棒を立てる。(東―北・本郷・通中新田)(北―細谷)
- 棒(よし)に唐辛子をはさみ三つじに立てる。(西―板倉中)(南―島・高島)(北―西岡)

○電柱にやん目大老出しと書いては

- 新田・樋の口)(北―西岡)(東―中新田)
- たはこのやにをままたこつける。(西―板倉中・岩田原宿)(南全地域所)を掃除したほうきでくまわをする。(南―高島)(北―西岡)(東―峯・下新田)
- 道の三(四)つじにあたかい御飯の上に目を当てる。(西―岩田原宿)(南―飯野本下)
- セキシヨの根を細かくして水でひやしておいて洗う。(北―藤・除川)
- 腹のあかい、白いちようをおくり出す。(北―細谷)
- 井戸神にみせる。(北―細谷)
- 便所をきれにする。(北―大荷場)
- 三つじに線香を立てる。(北―除川)
- 早いうちに塩で洗う。(北―除川)
- おんぼしをせんじてつける。(南―飯野持延)
- 古河のコウノスのコクソウ様に申し上げウナギを治つたら上げる。(南―樋の口)
- お茶と梅干しをせんじてつける。(西―観谷・下)
- 小便をつける。(西―板倉・石塚・岩田)

(田)

- 四月八日にお釈迦様にかけた甘茶を三つじに。(西―観谷兼助堂)
 - 三つじにおしめをつくつて送り出す。(西―板倉大同)
 - 「アブラウケン」と三度唱える。(西―板倉雲間・中)
 - 金を御幣と一緒にして置く。(西―板倉川入)
 - いろ紙で御幣をつくり米と金と一緒に置く。(西―板倉大同)
- (20) はひかせ(ジフテリア)
- 馬のふんのつゆをしほつて飲む。(西―板倉川入)(南―島・高島下五箇・飯野岡村)(北―西岡・藤)
 - 「www」と言う字を赤い紙に書き入口にさげる。(東―北瀬老瀬・頼母子宿・峯・中下・中新田・小保呂・上新田)(西全地域)(南全地域)(北―大曲)
 - 馬頭観音にお参りする。(東地域)(西―板倉中・大同・岩田原宿)(南―高島・飯野本下)
 - 北向きの馬小屋のかいばおけをかぶせる。(西―板倉石塚・岩田本舎)(南―下五箇)(北―西岡・新田)
 - 鶏のトサカを飲ませる。又は「トサカの血」(西―岩田下山・板倉種荷

木・大樹

○にんにくを腰にぶらさげる。(北—除川)

○にんにくをおろしてつゆを飲む。(南—上五箇)(北—大曲・細谷)

○馬の肉をへそにはる。(南—大久保)(北—大荷場)

○青竹のつゆをのむ。(南—丸谷)

○梅子を飲ませる。(西—岩田骨髄)

○さんだわらにお金とトウガラシをおいて三木つじへ送り出す。(北—細谷)

○竹でミケのふちをなでる。(西—岩田原宿)

○しようぶの根をすってのませる。(東—舟戸・中山・新内山)

○明神様で麻をかりて首をしぼる。(東—西原太)

○竹でミケのふちをなでる。(西—岩田原宿)

(21) き す

東地区

○ふなしの花をつける。(北海老瀬)

○三種類の草をもんでつける。(山口小俣呂・上新田)

○四種類草の葉をもんでつける。(頼母子)

○煙草を傷口につけてしぼる。

○石油をつけるるとばいじんが入らない。(本郷)

○百足をびんに入れ、食用油をたらして息のでないようにふたをしたものをつける。(宿)

南地区

○三種類の草をもんでつける。(全地域)

○百足の油をつける。(鳥)

○柳の皮でしぼる。(高島・丸谷・樋の口)

○とかげの油をつける。(丸谷)

○煙草の粉をつける。(下五箇)

○どくだみをもんでつける。(飯野木下)

北地区

○血どめ草をはる。(新田・大曲・細谷)

○草を三色葉で、よくもんでその汁をつける。(新田・大荷場・細谷)

○たもとくすをとつてつける。(大荷場)

○柳の皮を巻きつける。(大曲)

○つばをつける。(新田)

○傷口をなめる。(西岡)

○みそをつける。(西岡)

○煙草の粉をつける。(西岡)

○つばきをつけ、アブラオウケンと三

度いう。(除川)

○とりもちをつける。(除川)

○塩水で洗う。(除川)

(22) は な 血

○仰むけにおる。(その時首に動作を加える)(東全地域)(西全地域)(南全地域)(北全地域)

○ぶんのくを三回たたく。(東—道祖神)(西—飯倉雲間)(南全地域)(北—新田・細谷)

○えり首の毛を三本抜く。(東—中山本郷・宿・月影・下新田・南(西—飯倉全地域)(親谷全地域)(南全地域)

○えり首をもむ(東—中山)(西—飯倉川入・石塚・親谷上中)(南—飯野岡村)

○えり首をなでる。(西—親谷松崎)

○手の親指を揃えて三回水をかける。

○もぐらを焼いてたれた血をふりかける。(南—高島)

○首を押す。(飯倉川入・南中・岩田本合・親谷・中・業師堂)

(23) い ば

東地区

○イボ地蔵様に申し上げ、治ったら自分の背丈のダンゴをあける。(北海

老瀬)

○近くにいる人に解らないように棒で橋を作り、この橋渡れと唱える。(北海老瀬)

○盆球のはして人に見られないように三、四つつく。(下新田)

○盆球のはしてついて流しの下に埋めておく。(山口)

○ナスのへたをイボにすりつけ、人目につかないように土中に埋める。(通り)

○ナスをつけて紫になったら人目につかない所に埋める。(山口・中下・小俣呂)

○いちじくの汁をつける。(通り・嶺中新田)

○イボ地蔵にお米を上げて申し上げる。(通り)

○毛でしぼっておく。(中下)

○糸でしぼる。(中新田)

○へびの抜けがらでなでる。(小俣呂)

○みよりのつゆをぬる。(本郷)

○七夕の日にいもの葉にたまった水をつける。(本郷)

○薬煎をたく時のあわをつける。(頼母子)

○ごまの花の汁をつける。(頼母子)

○米粒三つでイボをなで、流しの下に埋めておく。その米粒がなくなるのと一揃にイボがなくなる。(頼母

子)

- いなじかりのした時、便所のほうきでイボをなでる。(山口)
- 小豆を人に見られないうちに埋める。(山口)

南地地

- いちじくの白い汁をつける。(全地域)
- おがらでいぼのできているところをぐるぐるまわして、井戸のところに立てておく。(島)
- おがら(お盆様のはし)でいぼを三回つつく。(全地域)

- いぼ地蔵様に申し上げ、治ったら地蔵様の背丈より高いダンゴをあげる。(全地域)

- おぼろの果をいぼに巻きつける。(高島・谷新田)
- こまの花をつける。(丸谷・飯野岡村)

- へびの抜けがらをつける。(飯野岡村)
- いぼ地蔵様に申し上げ、治ったら酒だるをあげる。(桶の口)

- ナスを二つに切つていぼの上をなで、二つ合わせて道に埋める。(桶の口)
- ドブの近くに埋める。(宇奈根)
- 山うめの糸を一まわり巻く。(下五)

筒)

- ナメタシをつける。(宇奈根)
- ナスの新芽のつゆをいぼにつけて、その新芽を種っぽい土に埋め、新芽がくさればいぼがとれる。(飯野岡村)
- お盆にナスで作った馬を二つ割りにして井戸流しのもとに埋めておく。(飯野岡村)

- ぬかをいぼにつけてそれを土中に埋めて、こぬかがくさるまでにいぼがとれるように折る。(飯野岡村)

北地区

- いぼの地蔵様にお願する。(全地域)
- ナスのへたをいぼになすつて流しの下に埋める。(除川・糠)

- こまの花をいぼにこすりつける。(全地域)
- おもしろグモの糸をとってきて巻く。(新田・大曲・大荷場・糠)

- こまの花で、だれも見ていない所でなでて土中に埋める。(糠)
- いちじくをつける。(全地域)
- へびの皮をつける。(桶谷)

- 糸でしばる。(桶谷)
- 馬の毛でいぼをしぼる。(西岡・細谷)
- 盆様のはしでつつく。(新田・大曲)

大荷場)

- ナスをすってつける。(西岡・大曲)
- 村のいぼ地蔵にダンゴを六つつけて背丈の高さにあげる。(新田)
- 米の芽をぬいてそれでいぼをつつく。(新田)
- 三日月様に治ったら好きだけダンゴをあげると顔をかける。(大曲)

- ほうずきの根をせんじて飲む。(東北郷(西)板倉川入・中・桶荷木・北・岩田本郷・下山前裏・板谷土・内蔵新田(南)高島・丸谷・下五筒(北)糠)
- もち草をせんじて飲む。(北)除川)

- ほうずきの実をせんじて飲む。(西)板倉下)
- 柘榴の皮又は根実を煎じて飲む。(東)新田・中山(西)岩田本合(南)高島・桶の口・上五筒(北)糠)

- んにくを食べる。(西)板倉・中三(北)大曲)
- 手のひらに墨をぬつて虫きりきりと三回となえる。(東)舟戸)
- 手のひらを「かん虫かん虫」と言いながら墨でぬる。

- お寺で呪ってもらう。(西)板倉下)
- 虫よけをする。(西)板倉下)
- 母親の親指の腹で腹をなでる。(南)大久保)
- 雪の下を三葉塩でもんで飲ませる。(南)大久保)
- 麦わらをせんじて飲む。(西)板倉中三)
- 魚の肝を飲む。(桶の口)
- 虫封じのお守りを小さく切つて飲む。(南)下五筒)
- 人参の汁を飲む。(北)除川)
- みかんの皮をにた汁を飲む。(北)除川)
- せんがりせんじて飲む。(北)大曲)
- げんのしよこをせんじて飲む。(西)板倉中三)

(25) 耳の病

- 雪の下という草をもんでつける。(下)新田・北地区の全地域)
- 雪の下をつける。(前地区の全地域)
- 雪の下を塩もみしてつける。(中新田・板倉石塚・大同・中三・大林・雲間)
- 雪の下を塩でもんで出た汁を耳の中

に入れる。(飯倉中三・川入南・種
菊木・雲間・岩田小平・原宿・本合
・麴谷薬師堂・内蔵新田)

○井戸の雪の下という草の露をつける
(本郷・岩田)

○雪の下を「えご」・「井戸草」とい
うところもある。(西地区)

○井戸にはえる、まぐらぎの露を耳に
つける。(頼母子)

○ほうらぬけをけずって耳につけると
よい。(東・山口)

○黒いもおろして耳のまわりぬる
(親谷土北)

○からみをすつて耳に入れる。(大曲)

○馬のふんをしばつた水を耳に入れる
(下五箇・宇奈根)

○みそつけの露を耳に返しこむ。(西
岡新田)

○頭につける油で耳をしめす。(高島)

○せみのからをつける。(宇奈根)

○耳の神様に、ワラジの片方をあげる
(峯)

○お地藏様に祈る。(中新田)

○薬師様に申し上げ、治つたら焼もち
に穴をあけて御礼する。(高島・飯
野新村)

○ドウアンサマ(道安様・土安様)に
申し上げ、治つたら焼もちをあけ
る。(樋の口)

○道祖神(ドウロクジン)へたのみ、

なおつたら酒を上げる。(飯倉・大
岡)

○ドウロク神様(道祖神)にたのむ
(下五箇・西岡・大曲)

○山の神様に、底のない杓を三つあげ
てなおつたら底のあるのを三つあげ
る。(東地区の部)

(26) 蜂にさされた時

○黒いものじくの汁(つゆ)をつけ
る。(山口・本郷・峯・通り・中下
中新田・上新田・西地区の全部・特
に飯倉に多い。南地区の全部・除川
西岡・西岡新田・大曲・大荷場・細
谷)

○黒いものつゆをつける。(北海道
下新田・頼母子・中新田)

○いもの柄のつゆをつける。(本郷)

○いもの葉をつける。(中新田)

○朝顔の葉を塩でもんでつける。(飯
倉中三・岡田・小平・本合・岩田に
多い。)

○朝顔の葉をもんでつける。(除川・
西岡新田・大曲・大荷場・障)

○朝顔を塩でもんでつける。(高島・下五
箇・上五箇)

○白朝顔のつゆをつける。(本郷)

○どんな草でもいいから、三種類とり
塩でもんでつける。(岩田原宿)

○げんのうしようこを水にひやしても

んでつける。(岩田原宿)

○塩と菊の葉をもんでつける。(飯野
中新田)

○いちじくの白いつゆをつける。(飯
野本上・本下)

○塩をつけておく(飯倉大同・川入南
・岩田多し。親谷・岩田、小平は塩
をかんでからつける。西岡・西岡新
田・細谷)

○歯かす(歯くそ)をつける。(頼母
子・川入南・島・下五箇・飯野本
下・除川・西岡・西岡新田・細谷・
障)

○石けんぬる。(山口)

○はつかえをつける。(積碁・細谷)

○煙草のヤニをつける。(高島)

○梅干をすりこむ。(樋の口・飯野新
村)

○つばきをつける。(西岡)

○しようべんをつける。(大曲・障)

○はちみつをつける。(大荷場)

○どけしをつける。(除川・西岡新
田・細谷・西地区)

○東西南北を書き、中心の土をつける
(雲間)

○石をひっくりかえす。(山口・高島
樋の口・飯野本上)

○石を三つひっくりかえす。(石塚)

○そばの石をほりかえる。(西岡新田)

○そばにある青葉を裏返しにしてお
く。

○そばにある青葉をとってクバキをか
けて地面にすてる。(高島)

○さされそうな時にトリの鳴き声をす
る。(宇奈根)

○おおむし、させばさせ、ひめのこ
うたるさきのおんを忘れたか、あぶ
らげんそん、おおわか、と唱える。
(飯野本下)

○蜂におわれたときは「あぶらんけん
あぶらんけん、あぶらんけん」また
は「こけこっこ、こけこっこ」とい
う。しやがむと、蜂の眼は土につい
ているので見えないともいう。(西
地区)

(27) 産 褥 熱
○みみずをせんじしてのむ。(東地区・
谷野新田)

○実母さんをお飲む。(西地区・大荷場)

○雨天の実を飲む。(稲荷木)

○年越しのゆずの種を飲む。(樋の口)

○あたたかいみそ汁を飲む。(大荷場)

○イナゴの黒焼きを食べる。(大荷場)

○ソバコをタニシでわけて、足のへら
につける。(障)

○麻で髪をしぼる。(西地区の全部)

○髪をしぼる。(除川)

○髪をしぼり、熱を出した人を天井につ

りさげる。(観谷)

○たくさんふとんをかけ、その上に重

い人がのる。(飯野辻)

(28) 胸のつかえ

○冷麦にはしを立てて三回まわる。

(北海老瀬)

○はしを三回たてて三回めぐる。(巻)

○冷麦にはしをかきかき立てる。(北

海老瀬)

○はしを頭の上にかきかき立てる。

(下新田・中新田・南地区の全部)

○頭の上にはしを立てる。(中新田・

小保呂・本郷・峯・山口・板倉中三

・川入南・石塚・岩田新田・新田・

下山・原宿・小平・除川・西岡・大

荷場・巻)

○頭の上にはしをたてて背のびをす

る。(中下)

○頭にワラジをせて背中をなでる。

(下新田)

○頭の上にはしを立ててぐるぐるまわ

す。(観谷下)

○はしをかきかきして頭の真中をたた

く。(風張・観谷・上北)

○はしをかきかきもって、ヒラメキを

三回はたく。(巻)

○はしをツムジを立てる。(桶の

口)

○顔にはしを立てて上を向いている。

(板倉中三・大同)

○水を飲んで、はしで頭をおす。(原

宿下・観谷中)

○水を飲んで、握りこぶしを頭の上に

のせ、呼吸をとめる。(下新田)

○頭の上にはしを立てて水を飲む。

(島・高島)

○はしで頭をつつく。(高島・丸谷)

○ツムジをおして、息をつかぬように

している。(通)

○頭の上に手をあてて、空を見る。

(飯野・本士・本下)

○ひじを張つて、手を頭のとっぺんに

のせる。(宇奈根)

○右の手で頭の後から、左の耳にさわ

る。(観谷)

○両手を頭の上に掲げる。(原宿)

○はしを茶わんの糸じりに立てて膝に

置く。(大林・石塚)

○三角をたたく。(小保呂)

○背中をたたく。(岩田・除川・細谷)

○胸をたたく。(大同)

○胸を三回なでる。(飯野本下)

○手を上にあげる。(観谷)

○三回胸をつよくおす。(大曲)

○右の手で左の手の平の真中を強く押

す。(大久保)

○ぞうげのどをこする。(除川)

○水を三日のむ。(頼母子・南地区の

全部)

○水をのむ。(板倉中三・福荷木・雲

間・川入南・原宿・骨積・観谷下・

除川・西岡・西岡新田・大曲・大荷

場)

○湯をのむ。(山口・川入・南

田)

○湯をのんで背中をたたく。(西岡新

田)

○水をコップに入れ、はしを井桁にく

んでその下から水をのむ。(上新田)

○茶わんに水を入れはしを十文字に

してのせ、その四すみから飲む。(福

荷木・大同西・観谷松崎)

○茶わんに水を入れはしをたてての

む。(観谷)

○重曹をなめる。(岩田本合・観谷中

○大根や菜を食べる。(観谷下)

○洗いのを食べる。(高島)

○ゲンノウシヨウコを飲む。(桶の口)

○卵をのむ。(除川)

○お茶をのむ。(除川)

○後からおす。(内蔵新田)

(29) のどにつかえた骨

○年神様にあげた花のどをなでる。

(中新田・板倉中三・大同・川入南・

岩田本合・原宿・内蔵新田)

○お正月の飾り花のどをなでる。

(山口)

○お正月様のおかざりの松のどをな

でる。(大曲)

○お正月の花をのむとなおる。

(観谷)

○年こしにあげたいわしの頭でのどを

なでる。(北海老瀬)

○お正月の松のどをはらう。(観谷

下)

○年神様のはらいでのどをなでる。

(南地区の全部)

○仏様にある盆花でのどをなでる。

(高島)

○象牙の箸でのどをなでる。(中・桶

の口・下五箇)

○大神宮様の前でのどをなでる。(飯

野本上)

○神様のこぼろじめでのどをなでる。

(飯野本下)

○年越しのイワシの頭を水にひやして

のむ。(東地区)

○いろり神様にたのむ。(東地区・石

塚)

○文びす講にあげた魚を焼いておいて

それでのどをこすればよい。(上新

田)

○おえびす様にかげぶなを上げてそれ

をとつておいてのどをなでる。(北

海老瀬・岩田下山)

○大神宮様のお札でのどをなでる。

(川入南・薬師堂)

○年神様に上げた花を水に浮かしての

む。(飯倉中三・岩田)

○お正月の若そなえもちを食べる。(西地区)

○ぞう牙でのどをなでる。(西岡・大曲)

○かまどの炭をのどへつける。(本郷)

○東京集鴨のとげぬき地蔵様のお札をのむと骨がとれる。(大曲)

○うののどを三べんなでる。(頼母子)

○つばを三回のむ。(山口)

○綱被でのどをなでる。(飯倉・岩田)

○かぎつるして三回のどをなでおろす。(難)

○ちやん(父)のえとをはしてつく。(東地区)

○魚の骨を頭上にのせる。(通り)

○さかさになつてこはんをのむ。(中新田)

○象牙でのどを三度なでる。(大岡・大林・石塚・岩田下山・内蔵新田)

○こはんをかますに食う。(東地区・西地区の全部)

○頭をたたく。(東地区)

○片足ではねる。(東地区)

○こわれた扇子を二つにそこから開き竹の骨の間にのどを入れる。(岩田原宿)

○食べた魚の残った骨をかんでひやめきにのせる。(岩田下山)

○頭の上にはしを立てる。(飯倉下)

○木をのみながら体を曲げる。(飯倉雲間)

○生たまごをのむ。(飯倉大同・野谷中・西岡)

○すまのむ。(飯倉大同・西岡・飯野本下)

○旦那のはしでのどを三回なでる。(大久保)

○さつまを生きのみにする。(大久保)

○食べものを生きのみにする。(南地区の全部)

○のどを三回なでる。(高島)

○静かにのどをなでる。(飯野社)

○こはんをかますに三回のむ。(西岡西岡新田・大曲・大荷場・細谷・難)

○こはんを水と一緒にのむ。(難)

○水を大口でのむ。(細谷)

○ほうしんかんの種をのむ。(大曲)

○節分の抽子の実をのんでおくとのどはつかえない。(岩田原宿)

○かたをまんでもらう。(西岡)

○「ウガラスが櫛の下で昼ねした」と三回言いながらのどを三回なでおろす。(櫛の口)

○「ウガラスがウの木の下で昼ねしてウのど通るタイの骨かえ、あぶらけんそわか」と三べん唱える。(上五箇)

(30) く さ

○馬にためさせる。(東地区・島・大久保・高島・下五箇)

○ささの葉や草で、くさをこすりそれを牛馬に食べさせる。(南地区の全部)

○スイカトウの木をせんじた汁をつける。(島)

○宇奈根の諏訪神社のツケ木のかまを借りて来て、顔のくさを刈るまねをする。(高島、谷新田、飯野本上・宇奈根)

○通端の草をとってなでて、馬にくわせる。(東地区)

○豆腐をすってつける。(東地区)

○馬のあぶくをぬる。(東地区)

○馬や牛になでさせる。(東地区)

○白雨たの実を飲む。(櫛の口)

○草刈かまで刈るまねをする。(櫛の口)

○トウモロコシをねってつける。(下五箇)

○灰をウドン粉でねってつける。(下五箇)

○ツケ木をかまの形に作ってくさをなでる。(宇奈根・飯野本上)

○ジョウソクバをせんじてのむ。(飯野本下)

○大豆をひやしてすってつける。(飯野岡村)

(31) お こり

○たまがすとよい。(南地区の全部)

○朝早く起きて、コウシン様をしぼる。(大久保)

○モノサシをねているフトンの下にいれる。(大久保)

○ねているフトンの下にショウブを置く。(大久保)

○十二時にナミアミダブツを百枚書いて一枚ずつ川に流す。(大久保)

○ナミアミダブツを百回唱えて、お札を川へ流す。(飯野・中新田)

○へびだと言つて、縄を首にかける。(大久保)

○タニシをしきの下に埋めて、治れば川に流す。(大久保・高島)

○シヤビの枝をとって来て、ねている人のふとんの下に入れておく。(高島)

○知られないように、ふとんの下に、位はいを入れておく。(高島)

○マムシ酒をのむ。(高島)

○四つ辻に米や金をあげる。(高島)

○ミヨウガの木に針をさす。(高島・飯野・新村・中新田)

○朝早く起きて、三つ辻でタラベシをつけて、どんでんげえりする。(高島・櫛の口)

○朝早く神社に出抜けまいるをする。(高島)

- 足のうらにきゆうをすえる。(丸谷)
- 迎え盆の夜、恒根の外に水をあけるとおこりにならない。(鳥)
- アジサイの花を土用の三日にとつたものをせんじてのむ。(國の口)
- 地蔵様の頭に茶わんで水をかける。(下五箇)
- はたおりのオサをふとんの下へ入れてねる。(下五箇)
- お寺の水をもらって来て風呂をたてゑる。(下五箇)
- 朝早く床はをなれて留守にする。(國の口)
- ササの葉をまける。(國の口)
- ネギ畑に入らない。(國の口)
- 明神様の水で風呂をたてて入る。(飯野新村)
- 朝早く起きて三つ辻で逆立ちしてゑる。(飯野本上)
- 人に見られないように、墓場の地藏様をしばつてくる。(飯野本下)
- 墓場の七木木を病人の知らないうちにふとんの下に入れてやる。(飯野待辺)
- おこりの起る時間より二、三時間早く御飯を食べて「さあおこつてこい」と待っているとおこらない。(飯野辻)
- ゆで卵を、しきに腰かけて食べる。(飯野岡村)

- 「じんない様」を手紙に書く。(飯野岡村)
- 足の親指つま先におきゅうをすえる。(飯野本下)
- 朝早く人に会わないようにして辻参りする。(大荷場)
- 三つ辻にサンダワラを敷いて、ドンデンゲリしてくると治る。(大荷場・難)
- 送り出す。(大荷場)
- タニシを土台の下に埋めて治つたら川に流しますと祈る。(難)
- 七木木を病人にわからないように真黒こげに焼く。(細谷)
- 足の親指にきゅうをすえる。(細谷・難)
- ネギ畑に入らない。(浮戸)
- おどかすとよい。(浮戸)
- 寝床に蛇を入れる。(除川)
- ミヨウガの葉に針をさす。(除川・西岡)
- ミヨウガのくきに針をさす。(大荷場)
- ナマズの頭を食べる。(西岡)
- びつくりさせる。(新田・大曲・難)
- ねているふとんの下に毒だみを入れる。(新田)
- マムシを食べさせる。(大曲)
- ミミズをせんじてのむ。(大曲)
- 先達に拝んでもらう。(先達・藤岡)

- 衛生。(北海道)
- たまがすとよい。(北海道)
- ミヨウガの木に針をさす。(浮戸)
- 新仏の七木木を知らないうちにおこりにかかっている人のふとんの下に入れる。(浮戸)
- 出抜け参りといつて午前二時頃神様道を通つて帰ってくる。(浮戸)
- (32) たむし
- たむしの出ている所に、シギの字を三つ書いておく。(北海道)
- すずり墨をぬる。(本郷)
- たむしの所へ、田の虫食うと三回書くとおさる。(下新田)
- (33) かんむし
- すみ水で手の平に虫を食うといつてまじないすればみずの様な虫がつかなくなって出る。(下新田)
- 「あぶらあんけんそわか」と三回すついう。(山口)

- 青いおがみむしを御飯粒でわつている。(東地区)
- とけぬき地尊様にたのむ。(東地区)
- ゆずのとけでほり出す。(東地区)
- (36) 風 邪
- 家中でかぜを引いた時いかの足を火ばちでいぶして二重に紙に包み、風の神大安売と書き、道の角にはつて来る。そしてそれを犬が食べるとかぜを犬が買ったことになる。(北海道)
- (37) 目まい
- 細と唐辛子で辻へ送り出す。(大同)
- 穴を掘つたり、杭を打つたとき嵐をまく。(原宿)
- (38) 中 風
- かにの丸焼きを食べる。(高島)
- (39) 癌
- 薬をせんじてのむ(高島)
- (40) よのめ
- 米を紙にわつて流しの下にくさるまで置く。(飯野新村)

(41) そごまめ

○とかげを黒焼きにしてつける。(東地区)

(42) 口の荒れたとき

○自分で御飯を食べる茶わんに水を入れて便所を掃除するまねをする。(飯野岡村)

(43) 目にゴミが入ったとき

○北を向いて三回つばきをする。(飯野岡村)

(44) 目をひきつけたとき

○井戸に首を入れて大きな声でその子の名前を三回よぶ。(西岡新田)

(45) 湯に酔ったとき

○ホークをまくらにしてわる。(飯野本下)

(46) バスの静止め

○半紙を四つ折りにして、しりの下に置く。(小台地)

十、その他

○針をなくした時はひざを三回なでる(大久保)

○地震の時は「まんじろこ、まんじろ

こ」という。(飯野本上)

(まんじろく、まんじろく)(飯野辻)

○長生きするには、ダイハンニヤの長持の下をくぐるよ。(西岡新田)

○大病人の時は、八まん様にお百度参りをする。(大曲)

○三月のみそかの前の日に、さおの先に、みけをつけて軒下に立てると、悪魔除けになる。(大同西)

○「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たるきな」とあらば、おこせ、こうばい」と三度となえてねればどんな事があつてもけがをして起きられないということがない。(大同西)

○四十の二つ子、親が四十才で子供が二才になる場合、子供を捨て子にする(あらかじめ、近所の人に拾ってもらうように頼んでおく)捨てた子が帰った時を「一才として赤飯で祝う。(四二年をきらう意、岩田新田)

○近所の火事の時は、屋根の上で腰巻を振る。(岩田原宿)

○牛、馬に逃げられた時、西東北と南に、マセハマテ中にたたずむこと止まる。(東地区)

○きたない虫を指したら、指で輪を造つてその中につばを入れる。(西岡)

附記

去る昭和三十五年八月一日、二日、三日、四日の四日間におわたる県教委主催の飯倉町民俗調査に引き続き、更にその発展的研究をなすべく飯倉町小中学校教育振興会民俗研究部「俗信(まじない)研究班」においては、町内において善て行われていた、或いは現在行われている「まじない」の調査取集に当たつた。

この調査取集は、東地区では東小学校校庭井邊、東中学校小暮新八、西地区では西小学校野村圭二、南地区では南中学校岡島彌男、北地区では北中学校飯島正吉の各教諭が中心となり、それぞれ学校の児童生徒を通じて調査カードを配布し、各地区民の御協力により取集したものであり、その整理に当つては前記の諸氏にお骨折りいただいた。

なお、この調査を担当された先生方や児童生徒の諸君、並びに指導助言を下された教委宮田王事には衷心より感謝申し上げます。

尚、本文中()内の地名名は採集地を示す。また東、西、南、北とあるのは、それぞれ東地区、西地区、南地区、北地区を示す。

水の民俗

近 藤 義 雄

板倉町は、昭和三年に排水機が設けられるまでは毎年のように洪水に見舞われ、町村教育委員会郷土研究部の作成した災害史年表によると、慶長以後でも百二十余回の洪水が記録されている程で、永い間水害になやまされた土地である。総論や各項目の中でも水に関係した民俗が多く記録されている。これらの中にもれたものをここに集録したが、このほかにも漏れた資料が多いものと思う。

I 洪水と水神信仰

(1) 高 島

この地方は蛙が小便をしても水が出るといわれるほどの低湿地で、出水になやまされたところであった。だから少しばかりの降雨でも出水の心配をしなければならなかった。このようなことに関連した事柄をを二三記してみよう。

この辺では、以前は板倉の雷電様へ雨乞いに行った。この神主におがんでもらった本を竹筒に入れて部落へもちかえり、それを大量の水でうすめて分けあい、それぞれ土地にふりかけて雨をまつのが例であった。その竹筒をもって雷電様へ雨乞いに行く人を見て、高島の人などは竹筒をうばいとったこともあったという。また蛙が家の中にとびこむと雨が降るといって心配したという。雨が降って水玉がとびあがると大雨があるともいふし、西に虹がたつと大雨が降るともいふた。こんなときは舟わたりするなといわれた。

水番に出るときには半鐘をならしたが、次のような区別があった。

一番組は 一つおき

二番組は 二つおき

三番組は 乱打

三番組が出るようになると、堤防があぶないといわれた。いざというときには男あるぎり、村全体が応援に出た。

水番に出るときには、すき、くわ、俵をもち、また竹を切って行く。

なお土俵倉があつて、そこに土俵が用意してあつた。

出水の危険がせまってくると、舟のある人は軒下から下ろして、軒先につないで用意しておいた。また、水塚への避難の準備もした。

水 神 様

水が出ないように願う神は別になが、堤防の何回もきれたところには、水神様をまつた。

(2) 細 谷

ここでもすりばちの底に住んでいようだといわれ、かつては(昭和四年以前)一年おきぐらいに大水が出たという。水害のときには水塚に家財道具をもって避難した。また出水のときにはあげ舟をつかった。

あんまり雨が長く降ると、タモキリフドウを寺でまつた。このときは村中で出てお経をあげ太鼓をたゝいて祈った。

水神様のまつり

細谷には次のところに水神様がまつられている。

中妻一人もち。

上―船一子全体でまつる。

下―細谷中でまつる。

陣屋―有志でまつる。

新吾曾根―個人もち。

水神様は水害よけのためにまつっている。

上コーチでは十二月一日子供がコーチをまわって錢をあつめておまつりをした。これは川へ「へし」をとりに入れておぼれた人をまつったものという。

下の水神様は、もと細谷中の水神様であった。まつりは十二月一日で、この日には赤飯をたく。

水難のために人命を失うと、個人的に水神様をまつる人もある。

細谷の氏神は長良神社である。この祭神は、藤原長良といわれているが、長良公に關した細谷での伝承は次の通り。

この辺の土地は佐貫の荘の土地で、もと荒地を開拓したところという。ここへ年に一回か二回、長良公が巡回してきて、この辺の百姓に目をかけていい政治をした。そこで、その徳をしのんで祭神としてまつっているものという。

他の伝承では、邑栗郡千代田村瀬戸井地先の利根川の土手がきれたときに、犠牲になった人が長良公だという。

雨が降って水玉がとびあがると大雨があるというので心配した。

西に虹がたつと大雨が降るともいう。このときは舟わたりをするなといつた。

水番について

この辺は矢田川、渡良瀬川にはさまれているところなので、しらじ(すりばち)の底の方にあたっているとわかれていた。上の方で荒れれば水がたまってくる。そんなとき、財産の大きい家から順に水番に出た。一番組は、大きい家

二番組は、中ぐらいの家

三番組は、小さい家

となっている。細谷の長良神社は、瀬戸井からの分社だという(みやま文庫刊「利根と上州」上所収、拙稿「伝説と祭礼」中に、邑栗、新田郷下の長良、長柄神社の分布を図示しておいた)。

(以上井田安雄資料)

(3) 板倉町の水神信仰資料

(中学生の調査カードによる)

(4) 中新田(針ヶ谷)

ここには寛政十二年十一月吉日建立の水神宮がある。この祭日は旧の六月二十日、中新田中でまつる。堤防がきれるので、水をまつったものという。

(4) 西 岡

現在は渡良瀬川の中になつていたのでなくなつてはいるが、むかし、船頭総代四名がたちあつておまつりをした水神様があつた。

(4) 離 下

祭日は十二月一日、昔は祭礼もさかんで、甘酒を村人や通行人に出したという。

(4) 侍辺字新部落

祭日は年三回、旧の六、七、八月の十九日

(4) 原宿蛭田

祭日は六、七、八月の十九日

(4) 扱谷字宮前

水が出る瀬戸井といふところの土手がきれるので、土手の中に瀬戸井の人を生き埋めにした。その人の供養のために七月十四日に念仏をする。

(4) 本郷松本豊太郎氏宅地先

ここはもとの渡し場のあとという。ここに水神宮が一つある。戦争前(第二次世界大戦)は七月三十日(水泳のさかな頃)におまつりをした。コーナの当役四名が中心になってした。現在はしていない。この水神宮は、ここが渡し場で、間違いないのでたてたものという。

(イ) 北海老瀬

祭日は旧の十二月一日、中山・舟戸・旧舟戸の三部落が主体となつてまつた。各戸から寄付をし、おそなえ、供物等をあげ、これを近所の子供たちに与え、水難者の供養と子供の水難よけとした。

(ロ) 宇奈根

昔、この部落には沼があり、その沼主をまつたもの。昔より六月二十四日に部落全体でおべっかをする。

(ハ) 岩田新田

祭日七月三十日、岩田と骨槽でまつている。

水難防止と、水難で死んだ子供たちの供養のためにおまつりをしてい

(ニ) 新村

夏の三カ月、八、九、十月の十九日が祭日。

新村全体でまつっている。水で死んだ人の供養としておまつりをして

明治四十三年の洪水

(1) 峯

この年の洪水はひどく、谷田川と利根川と渡良瀬川が一つになり、岡鳥宇一郎氏の家では水塚の上の土蔵の鏡前までのつた。天神様は堤防より二米近くも高いのに床上一米ものつた。一家権現様も石段が二段残っただけとなった。

出水が田盆の時で、水がひけないので秋に麦がまけず、二月に大麦を播いた。

食べ物がないので流れて来る青物を食べていた。二、三日過ぎて山口から舟で水運んでくれた。水の入らない家はなく、二階までのつた家もあり、土間が堤防と同じ高さのA氏の家は全部流され、水番の人に麦を五俵かついできてもらってやっと助った。天明六年の洪水の時は海老瀬の四四戸のうち一七軒が流失、一三三軒が潰家となった(市沢家文書)。

(2) 海老瀬字中下、中新田

水の流れば急行列車が来るようであった。妻沼の橋が欄干ごと流れて来て、その上家や材木が揃って流れその中に舟が入ったらもう出られない状態であった。これも渡良瀬川の堤防がなかったからである。このときは八月十日から十二月一日まで及びこの日の入営には舟で出発したものである。最近では昭和二十二年のときが最も荒れ、一丈二、三尺の砂山ができて被害も甚だしかった。この時には東武鉄道に砂を払ってもらったが、この地の洪水は水が流れないから物も流れず、床上浸水が四十日から五十日も続いたのであった。従って井戸も深く掘っている。藍毒も水があれば大した被害はないものである。この村では昔から洪水となつても他所には逃げ出さない。何故なら土地は肥えていて、水害のあととは無肥料で充分間に合うからである。

(3) 水塚づくり

海老瀬地区では母屋の裏の竹藪の中に塚を築き、上に土蔵や小屋を建てていた。中新田では、農閑期に畑の土をピツクに入れ馬にのせて土積みをやった。それをツチツケとよび、掘り下げた畑を田に変えた。

(以上池田秀夫資料)

水害食制

昭和三年に排水機場ができる前とあとでは、食制の上でも大きな変化がみられた。麦作中心の農耕から、稲作中心の農耕への転換がその第一の原因であった。以下には、主に過去における海老瀬地区の食制を中心に記してみよう。

海老瀬地区では、今は米が主食になっているが、むかしはこの辺は水害がひどかった地方なので、主食は麦にて、米三ぐらゐの割合であった。水害のときはやきもち、麦だけを食べたことがあった。

間食としては、やきもち・おたらし・こうせん・そばっかきなどあった。これらは場合によっては主食としても食べた。

やきもち、めしのこりをうどんにくくるんでつくった。これは油をひかないでやいたもの。

おたらしというのは、うどん粉をかきまぜて、あぶらをたらしてやいたもの。

こうせんは、はだかむぎをいって粉にしたもので、砂糖をいれてこじゅうはんとして食べた。天候不順のときは、麦がひきわりとか、押麦にできないので、こうせんにしてたべた、食糧不足のときには、こうせんを湯がきにして、夕飯がわりに食べたこともあった。

そばっかきは、湯のにえたつたものにそば粉をいれて醬油をつけて、夕飯に食べた。

麦かり時分の忙しいときには、正月の餅をとっておいであげて食べた。明治三十九年頃、河川工事のもつこかつきをしたが、このときには重

労働であったので、沢山食わなければ体がもたなかったもので、十時頃と三時頃の二回こじゅうはんをたべた。弁当は一升ぐらゐもつていった。このときは、五百匁の弁当もつていった。この当時の土端つきうらに次のようなものがある。

すつとこ上州館林、わりはんごぜんではらつとせ
この辺では、三食を、朝はん・昼めし・ゆうめしといひ、間食をこじゅうはんといひ。

大食の基準としては、六合はたまちがある。これは、小豆一合と米五合でつくつたもので、これはとても食べられないが、大食の基準にされた。

高島辺でも大水に悩まされつゞけてきた地域であるが、ここでは、水が出たときには、麦が主で、米は三分ぐらゐしか入らなかつたという。

むかしは、米がなかつたので、米の代用として粟で餅をついたほどであった。代用食としては、やきもちをたべた。麦を買えないほどの人は、

麦を粉にひくときにでるくずを食べたという。こんなことは、明治の頃、大水になやまされていた頃はよくあったとのことである。

石塚もまた水害の多いところであった。一年おきとか、ひどいときには月に何度も大水にあったこともあったという。そんなわけだから、米はあてにせず、麦は神様あつかいにされたとか。米は全くいれないで、

わりめしを食べて暮らしていたこともあった。身上のいい人で米三に對し

麦七ぐらゐの割合であった。この程度の家のことを、あすこんち（あそこの家）は菜のうちだといった、ふつうの人は一升のうちに米を一合ぐらゐいれてたべた。うどんでも、コト日でもないといひ食べられなかつた。

(井田稿)

麦の食べ方

昭和のはじめ頃までは麦一升到米二合はよい方で、昭和三年以後急に變つてきて、今ではその反對の米八合に麦二合ぐらゐの常食、丸麦は夜たいて朝まで煮るので小豆をにるようであった。ヒキワリは三つに分け、一番細い粉のようなのは魚を捕る飼にし、馬にもやつた。時には麦だんご（オコトの日）や麦まんじゅうをして食べた。ウドンの時はソバ代用にして大麦の粉を入れて食べた。お客にはウドンを買つてもてなした（通り）。

Ⅵ 排水機の出来るまで

板倉沼の干拓は、板倉町全体を豊かな町に生れかわらせた。これには永い間の努力もあるが、海老瀬の松本英一さんを中心としたこの地方の努力があったことを特筆する必要がある。元来毎年のような洪水と、洪水の度に足尾の鉱毒が流れ込むので三年一度の収獲があればよい方だといわれていたため、当時は竹藪も枯れ、青竹もすっぽりぬける程の鉱毒でどうにもならなかった。堤防を高くすればジスイのはけ口がなく、困窮の村では大工事も出来ないで、洪水の度に崩れる堤防工事で村人は手間賃をかき、女性も大部分この工事に出かけた。大正十二年頃農商務省令が出て、五〇〇町歩以上の土地改良は県営工事となるというので地元負担金二五パーセントですむから板倉でもと立上った。その中心が松本英一氏であった。しかし、当時は加藤高明内閣で、政友会の武藤金吉の地盤のため、松本氏等武藤派の圧迫で県が受けつかなかった。そのため、松本氏は同志一八七名と共に政友会を脱党した。その結果県会で一二〇万円の予算が成立し、この大工事がはじまった。しかし、松本氏は政友会武藤派から反対され、足蹴にされる程の苦を忍んで村の生れかわりのために斗ったのである。排水機完成までの沿革を邑菜土地改良区維持管理概要書から抜書きすると次のとおりである。

本改良区地域は群馬県の最東端に位し南に利根川北に渡良瀬川を控へ其の間にある約五千三百余町歩内板倉沼を中心に其の周囲の低湿地二千余町歩が排水対象地域にして、明治の初期迄は肥沃の土壌なりし故農作物も無肥料同様にて相当な収獲を挙げ得られたるも足尾銅山の開発により、渡良瀬川の水源地帯たる足尾の山々が鉱毒の被害に遭ひ山と化し僅かな降雨にも其の都度渡良瀬川に氾濫し時には破堤を来して大洪水を引き起こすこととなり、明治の中期には足尾の禿山より流れ来る泥土と鉱毒の被害に悩まされ農作物の収獲は年一年と減少、渡良瀬

沿岸の草木は枯死するもの多く加ふるに河床は急激に上流し其の影響により耕地は日増に洪水の度を加へ従来洪水の被害なかりし区域まで洪水又は洪水に昇舞はれ、農民は極度に疲弊困難に陥り北海道に移住するもの、都市へ離村するもの相繼ぎ往年の人口は次第に減少しつゝあるによりこれを憂ひ、有志相寄り相謀り識者を頼み次に河川に極力方途を講じつゝあり、鉱毒並に洪水除去の指導者時の代議士田中正造氏身命を賭して東奔西走住民相呼応して打開に邁進したので其の結果足尾銅山鉱毒除去施設並に渡良瀬川河川改修施行となり鉱毒除去設備は銅山側にて施設を行ひ、河川改修は内務省に於て施行せられ栃木県赤麻沼を中心に谷中村全村の立退きを行い遊水地約四千町歩を作り川巾を広げ堤防を増築、大正六年には完成の域に達し洪水の被害は免かれたとは雖も住民の安堵も東の間足尾方面より増水の都度流れ来る土砂にて折角完成せる河川も河床数年を経ずして上流爲めに洪水の被害相繼ぎ此処に於て、又々これが対策に有志相寄り相謀り仲伊谷田排水樋管普通水利組合を設立大正十年十月海老瀬村東谷地先に自然排水樋門を作り、板倉沼より直通水路を掘鑿田渡良瀬川を通し遊水地へ悪水排除に努めたるも最洪水時には、外水上升の爲め排出不能にして其の効減に渺なく止むなく機械排水を計画したるに住民中には機械排水に對する知識少なき爲めに反対者多く提唱者有志は説得に昼夜を分たず努力を重ね迂余曲折被溺を解切りつゝ猛運動の結果、其の熱情が報いられ大正十五年には政治的解決を見同年県営邑菜東部用排水改良事業として、群馬県営事業に採択せられ同年十二月邑菜耕地整理組合設立認可せられ昭和二年工事着手、昭和三年七月には局部的運転が開始せられし其の效果予想以上にして年々の洪水より救はれたるのみならず板倉沼周辺の不毛地たる沼沢地まで毎年を開墾せられ、一躍群馬のウクライナなどと賞揚せらるゝに至りたるも是偏に先覚者諸兄の偉大なる効績に外ならずと往時を忍び感謝感激に堪へず、人口戸數も日増に増加し遂に安住楽土の地と化しぬ此の実績より見ても如何に効果

があつたかを窺ひ知ることが出来る。

爾今五十有余年を経過したるも戦後上流部の土地改良推進により低地たる本地区に向け排水路を接続するは自然の成行にして当時集水面積老千五百町歩を対照として設計したる排水機にして且老齢となり昭和二十七年ポンプ電動機共大修繕を施したるも食糧増産による区内外の土地改良は集水面積を二倍の約三千余町歩の多きに達し加ふるに流水の速度は急激となり河床上昇の影響と共に板倉沼周辺の約五百余町歩は歳々洪水の被害を蒙ることあり、これが排水能力不足は第一排水機場に於て二屯、第二排水機場三、六屯、第三排水機場三、四屯、計九屯の大きに達す以上は桶承水講完成によるも尚不足分にして第二排水機場は継続事業としてデーゼルエンジン二百馬力ポンプ口径九百純増設中なれど尚且第一、第三排水機場分五、四屯の不足にて洪水排除の方途として桶承水講の早期完成と集水面積と排水機の増設の一日も早からん事を一同心から要望して止まざる次第なり、尚土地改良法の制定により昭和二十七年四月一日邑菜耕地整理組合を邑菜土地改良区に改組せり(昭和三十一年五月稿)。

こぼれ話 (12)

隠居のこと

隠居には年寄りが出た。別居する例はあまりない。隠居する場合、末子をつれて出る場合もあり、家人と不仲の為出るものもある。隠居免をもつて出るのは、隠居する人に後妻がある場合とか、つれ子をして隠居する場合などである。年寄りのところへ若い人が後妻にくるときには、隠居免をつける条件を出す場合もあつた。隠居は村人足には出ない(大曲での聞書)。(井田)

こぼれ話 (13)

子守りうた

ねんねろ ねんねろ ねんねしな
ねんねて おきれば おちちやる
ヨイヨイ

おともり こもりは つらいもの ヨイヨイ
あめかぜふいても 宿はない ヨイヨイヨイ

よいよいよい子だ

十五になつたら お屋敷ひろげて 倉たてて 倉のまわりには
松植えて お松の小枝へ たかためて たかとり天神さまへ
おさんけする(願かけて) ヨイヨイ

よいよい よいがかか のろまかか
去年の三月 はたかけて
今年の三月 おりきつた ヨイヨイ

(大曲にて採集 井田)

板倉町における水塚・揚舟分布集計表

(昭和三十六年一月一日現在)

区分	行政区分	戸数	水塚数	昔あつた数	揚舟現存数	昔あつた数	揚舟数
1	除用	190	4	1	12	6	12
2	西岡	179	1	1	16	13	16
3	西岡新田	68	2	11	25	10	23
4	大曲	63	21	2	31	3	31
5	大荷場	60	25	13	41	15	32
6	細谷	139	44	21	79	17	74
7	難	71	27	19	41	21	32
/	旧西谷田村合計	770	124	68	245	85	220
8	北海老瀬	79			16		16
9	頼母子・本郷・神伊谷田・下新田	125	30	5	72	23	58
10	山口	103	2		21		21
11	通り・間田・峯	72	19	2	32	3	32
12	中下・中新田・上新田	117	32	11	55	6	53
/	旧海老瀬村合計	496	83	18	196	32	180
13	樋之口・小合地	69	23	14	39	10	32
14	五ヶ・中妻・上五ヶ・前字奈根	106	27	19	36	6	36
15	高島・丸谷・宇那根	165	50	25	70	14	64
16	島・大久保	131	25	19	41	8	35
17	本上・木下・岡	109	13	25	19	22	19
18	新田・中新田・待辺	85	9	16	21	9	19
/	旧大筒野村合計	669	147	118	226	69	205
19	宿南・宿北・樋荷木南北	115	11	10	33	18	33
20	川入東・川入西・川入南	123	21		55	22	48
21	中ノ上・中ノ中・中ノ下	133	9	11	59	15	45
22	大同東・大同西・雲間南・大同北	159	4	1	50	24	42
23	石塚東・石塚西	69	8	1	28	6	20
24	原宿・新田・骨槽	209	13	17	49	21	48
25	下山前裏・本合・新田・風張・小平・高替	184	1		22	4	22
26	下宿・本郷・花見道・浮戸	108	2		33	16	33
27	糠中・下・宮前・業師堂・上北・松崎	155	2		9	8	9
28	内蔵新田南・内蔵新田北	45	4	2	13	3	13
/	旧伊奈良村合計	1,300	75	42	351	137	313
	板倉町総合計	3,235	429	246	1,018	323	918

板倉町の民謡と民俗芸能

は し が き

板倉町の今回の総合民俗調査で、筆者は前二回の分担とおなじく、特に全域にわたり民謡および民俗芸能の分野を分担した。ちようど例年にならない酷暑の年であった上に、八月一日からの板倉町は急に連日焦げつくような暑さであった。この炎熱の中でNHKの好意と村当局による車の手配で、予定に組まれた実演を次ぎ次ぎと見てまわった。目のまわるような調査行の苦しさはおそらく生涯忘却することがないであろうほどの重労働であった。流れ下る汗でぬれたシャツを絞りながら、写真機とノートを持った連日の調査を続けたのも、実は大きな理由があったからである。その一つは、この炎熱にもかかわらず、カシラを被っただけで脇しんとうを起こすような獅子舞を実演してくれた村の人々、流下する汗をこらえて踊ってくれた神楽の人々、さては渡良瀬川畔で、反射と草いぎれにムッとする現地での土場打ち唄の実演、祭礼のおねり、あるいは麦打ち唄の実演など、とにかく炎暑のもとでは到底行うべきはずでないものを今回の学術調査のため特に総出で待っていてくれるからであった。その好意に答えるためには、最早や自分の健康や都合は理由にならなかつたからである。その熱意その素朴な好意は、いくら言を費やしてもまだ述べつくことはできない。前二回の片品村、上野村でも、それなりに村の人



大杉神社の神輿

達

萩 原 進



きよき道の子獅子舞

達の協力はあったが、板倉町ほどの異常な熱意はおそらく今後もあり得ないであろう。立てられたスケッチャールでちゃんとして呉れる村人のことを思うととにかくどこまでも約束を守らねばならぬ義務が私にはあった。第二にこの調査行が無理押ししてきたのは、次ぎ次ぎと研究意欲をかき立てる未知の世界がくりひろげられたからである。その一つについては各項において述べるが、群馬県の東辺で、茨城、栃木、埼玉に境を接する立地上の条件と、利根川と渡良瀬川にはさまれている陸の孤島々々である邑栗都を代表する特殊な環境のもとにあるだけに、いわゆる平野部の文化産業経済とは全くちがった歴史を経てきた地帯である。その環境のもとに遺されている民俗芸能、民謡、行事の一つ一つが、いわば「非群馬的文化圏」に属するものばかりであったことである。たとえば、獅子舞にしても、県下の三百有余の多岐の獅子組の中でも、素朴さを持つ古い型を遺し、むしろ栃木から奥



飯野新村の踊り

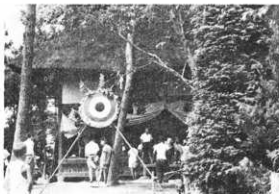
羽地方の系統に近いものが見られ、民謡でも麦打ち唄一つに、勢多郡の赤城南麓地帯とは全く別の系統であるものが歌われていた。念仏踊りもたとえ和讃の系統を引くものであっても、踊り自体は古いおもかげをとどめており、県下ではめづらしいものであったことや、あたらしい時代のもではあ

るが土場打ち唄が、おなじ邑栗部の千代田村あたりとほらがったメロディを持っていたり、一つ一つが私の興味をそそるものばかりであった。

綜合民俗調査が、板倉町において行われた意義と成果は、少なくとも筆者の調査対象においては大きな意味をもっていた。それがまた群馬県全域の民俗芸能と民謡に占める位置の高さをも物語っている。本報告は、少なくとも群馬県の大部分の地域の調査を進める上につねに一つの問題を提起するであろうことはたしかである。このすくなく芸能の宝庫ともい

うべき板倉町が余計に熱意と興味を抱かせたのである。
報告をする範囲は、主とし郷土芸能の分野であるが、特に行事の一つとして「弓取り式」のような特殊なものが調査分担の中にあつたのでこのことは他の調査者が実演に立ち会えなかつたことにもよるが併せて報告しておきたいと思う。

なお、板倉町の調査は今回の共同調査のほかに、以前群馬県議会史の



弓取り式の的

執筆中足尾銅毒事件の調査で往訪したり、道しるべの調査、民謡の調査などで足を踏み入れた地方である。また本調査のあとも、足尾銅毒悲歌や銅毒事件の再調査で訪れているので、かならずしも全部が今回だけの調査報告の内容ではないことをおことわりしておきたい。ただ今回の調査でどうしても手掛りのなかつた地方歌舞伎（地芝居）と人形芝居は痕跡さえつかめなかつた。調査不十分であるのか、他の理由なのか、今後

I 民謡

一、民謡概見

板倉町の民謡は、地方色のある作業唄が県内の他地方に見られないものとして採集できたことは特筆されてよい。田植え唄が現在も勿論なく過去においても歌われなかつたらしいが、その代わりに麦打ちに少なくとも二つの系統が存在していたことは、他の民俗一般でムギに関するものが多く、イネに関するものが少なかつたことと一致する。またこの地方は長い間ムギを主として作られてきた農業の歴史とも一致する。そういう点では水田耕作の民俗よりも畑作を主とした傾向が顕著であり、民

話においてもおなじであったことは注目される。

また板倉町地方の大きな立地条件である低湿地帯、湛水地帯である上に、連年大水害になやまされてきた「水」との関連性が濃く在している。そこに生業を求めたことは当然であり、民謡の作業唄に県下ではじめての獲取り唄が採集できたのもこうした特殊の条件下におかれていたからである。さらに水害と関連してのいま一つは、水害から村を守るための大土木工事の際に、村の婦人が狩り出されて、堤防を築く時に歌った土場打ち唄が採集できたのも興味深い収穫であった。畑作を主とした麦打ち唄のほかにも、水田関係では田の草取唄が歌われていたのも珍しかった。

機械唄と糸挽き唄もあったが、自家生産のものを糸にした時の作業唄と、機械はおもに賃機であった時のもので、貧乏のドン底にあって少しでも現金を得ようとした暮らしの一面をのぞかせるような哀愁を帯びたものが多かった。

一般的のものととしては、いわゆる八木節がまだ口説きを主とした頃のふしまわしで遺されていたことも意外な収穫であったといえよう。明治四十三年の大水害を主題とした門付芸の祭文が、まだ一部に記憶されていて聴くことができたが、これなども板倉町地方が持つ一特色としてあげられる。

しかしなんといっても、陸の孤島板倉町として特記しておくべきものは念仏踊りとそれに歌う念仏和讃である。勿論最初は信仰的な発生によって、仏を讃えるものであったのであるが、娯楽の乏しいこの地方の婦人が、レタリエーションとしての要素を持つようになり、それにつれて、時事問題や歌舞伎の筋書きなどまで和讃の中に採り入れた娯楽性への転換を見ている事実は、郷土芸能が信仰から出発したという一般論を実証しているようであることに興味深い幾多の問題を示唆しているのである。このようないくつかの例でわかるように、板倉町の民謡は矢張りその地域の中に芽吹き育ってきたものであるという重大な事実を前提と

しているのである。

二、作業唄

麦打ち唄 現在でこそ水稲と陸稲がゆたかに実のり、上州の穀倉地帯とか、上州のウクライナなどと呼ばれているが、米どころとなつたのはつい三十年の方で、明治四十三年の大水害をピークとしての板倉町一帯は名だたる水害の名所で、利根川と渡良瀬川にはさまれた低地は大雨ごとに濁流が流れ込み、耕地も宅地も水に漬ってしまった。水屋とかあ



▲ギ打ち唄を伴う作業（西岡にて）

び舟がまだ各地に見られるのもその頃の名残りである。しかも湛水地帯であるからひどい時は一月も二月も水が退かない。その水害期前に収穫できるのは麦だけで、稲作は収穫前に全部冠水埋没してしまふために収穫皆無を覚悟しなければならなかった。いきおい麦に頼るほかになかった。その麦をとり入れて、いわゆるコナオ時に歌われたのがこの麦打ち唄である。この作業はよく乾燥した麦をむしろの上に並べ、タルリ棒とよぶ麦打ち棒で、ドシン、ドシンと叩いて穂を落すものであるが、タルリ棒はまたこの地方ではフリ棒とよんでいる。単調な作業であるため、歌によって動作を捕え、疲労を少くしてのしみながら作業を進めるのに役立つ。作業形式は「むかい打ち」といって、十四、五人が両側に分かれむかい合つて麦打ちするやり方、「合い打ち」ともいう。いま一つは

一側だけに並んで打つ打ち方である。唄はその作業形式では別にちがうわけではない。現在歌われている麦打ち唄は二つの系統がある。一つは哀愁を含んだもので、メロディもすばらしいものがある。県内の作業民謡の中では断然傑出してゐる。大曲部落の青木喜太郎さん（六十三才）と橋本げんさん（七十一才）が歌ってくれたものである。囃子の合の手は橋本げんさんが入れたもので、普通歌うときは合の手はこれほどまかしくは入らない。

古河のサア二丁目の、アアドッコイドッコイ

あぶらやの娘、（合の手）ハアどこ通る畜生真ん中通りまがれ
油トトロ、ハイ、腰までつけて、ハイハイハイ

腰の光りで、ハイ、古河の町照らす、ハイハイハイ

いっちょようとれ、判とれ、娘に婿とれ……ブッコメブッコメ



青木喜太郎さん

合の手に入っているものは、どうも馬子唄のものらしいが、最後のブッコメ、ブッコメで麦打ち唄の特長が見られる。「ハア、ブッコメブッコメ」は、赤城南麓の麦打ち唄にも使われているが、ドシンドシンの力強く打ら込む加勢の囃子でもある。一見作業の手運びと合わないようであるが、実際に作業に合わせて置いたところかえってテンポのゆつくりしたのがうまく合っていた。この系統の別の歌詞は（合の手は略す）

○上州よいとこ、お山が招く

赤城つつじに、榛名のわさび

○来てはチタチタ、おもわせふりに
今日もとまらぬ秋の蝶

○義理はひと筋、流れは清い
利根でみがいた、心意気

○上州よいとこ、景気の波で
桑に黄金の、花が咲く

西國の小暮藤吉さん（七十五才）が歌ってくれたものは、この系統とちがって、テンポも早いむしろ端唄の変化したものに近かった。

古河の舟戸で、今朝見た島田
男泣かせの、ヤレ投げ島田、ドッコイドッコイ

という歌で、ほかに、

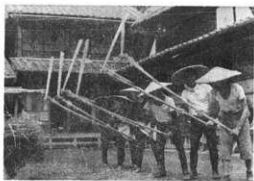
ふじの白雪や、朝日でとける

とけて流れて、ヤレ三島へ落ちる、ドッコイドッコイ

主にもろうた、洋傘を

暗れてナアさす日は、ヤレ何時だやら、ドッコイドッコイ

といったもので、古河の舟戸：はすぐ近くの茨城県古河を主題にしたものであるし、ふじの白雪や：は有名な民謡の替え唄、主にもろうた：は



ムギ打ちの実演 (高島にて)

明治大正期を物語る淡い感傷さ
えにじみ出している。

高島部落で聴いた麦打ち唄は
「古河の舟戸で」を「古河の
二丁目の」と同じ節廻しで歌
つてくれたが、そのほかに

わたしやお前さんに
首たけほれた
足駄はいても、とどかせぬ

という別の歌詞があった。最近
麦の脱穀も機械でやるようにな
ったので、だんだん麦打ちもや

らなくなつたそうであるが、この麦打ち唄だけはまだ生活の中に生きて
溶けこんでいる。前橋近辺の麦打ち唄の
浅間山から鬼がケツ出した

なたでブツ切るよな尻をたれた
ブッコメブッコメ

といった威勢のよいものではない。どこかに哀愁と素朴さを持つ唄で、
非常に郷愁をそそるものである。大正十一年に内務省が全国の府県に紹
介して民謡の調査を行ったことがあるが、群馬県で行った調査につい
て、当時の新聞が次ぎのように報じているが、その代表的なものの中
に、邑楽郡地方の「古河の二丁目の」が入っているのを見ると、伝承
の正確さと共に、現にそれが今も歌われているという事実との関連を知
る上に興味深い。

県下各郡の民謡を調査、県では内務省からの照会で県下各農村に唄は
るゝ民謡に付いて調査中であつたが、此程に漸く取纏を了して同省に

報告した。今其主なるものを挙げると左の如くである。
勢多郡地方の田植歌

吉原の出口の茶屋でイヤハノ三味が鳴るく
立より聞けばイヤハノ女郎衆がひく
北甘菜地方雑謡

妻上手の嫁とりあてて家のしんしょも太り積
佐波郡地方

南山根笹の露かイヤハノ雨となるく
簀笠持てやイヤハノ太郎治殿(田植唄)

孫が唄へば伯父がはやす、瑞穂棠へる田植歌(都々逸)

花の盛りを人にも見せず、知らぬ顔するやぶ椿

ヤレ打止(込)めく(麦打唄)

邑楽郡地方

古河の二丁目の油屋の娘、油とろく腰までつけて
腰の光りて、古河の町照らす

(「上毛新聞」大正十一、四、十五)

田の草取唄 これは大曲部落の青木喜太郎さんが一人だけ歌えたもの
であるが、節は軽い端唄系統のものであり、歌詞も都々逸あたりの影響
を多分に受けている。かならずしも田草取唄とはいえないが、田の草と
りによく歌つたものだといっていた。

三千世界のカラスを殺し
主と朝寝がしてみた

赤城おろしの西風よりも

主の口禱（くぜつ）が身にしみる

遠く離れて逢いたい時は
月を鏡にすればよい

お月さまさえ泥田の水に
落ちてゆくよな浮き沈み

といったものである。ことに「お月さまさえ」は、長い間水害に苦しめられたこの地方の農民の歴史を物語るかのように、民謡と社会性を如実に思わせるものがある。群馬県には田の草取りの作業唄がほとんど知られていないだけに、板倉町のこの歌は資料的にも一つの価値を持っているものである。

土場打ち唄 土場打ち土羽打ちとも記されるが、堤防を築く時の土盛りを固めて作ってゆく作業の時に歌われる作業唄である。明治四十三年の大水害のあと、内務省の直轄工事で利根川渡良瀬川の河川改修工事が巨費を投じて行われた時に、この板倉町区域にも大きな築堤工事が多大の人力を注いで続けられた。作業はおもに婦人でカスリの上着に股引をはき、夏は焦げつくような炎天のもと、冬は指も凍るような霜柱を踏んで行われた。当時の土場打ちに出たという佐藤トクさん（七十二才）と齋藤しうさん（六十才）の二人の話によると、当時現金収入が少なかつたのでたとえいくら金でも欲しかったので毎日働らぎに出たものだという。手に六尺ぐらゐの棒を持って、十四、五人から二十人を一組みとし、その中に音頭取りとよばれるのど自慢を中心に、土工達をつみあげた堤防の土を打ち固める仕事が目であった。土木機械のなかった大正時代の築堤工事はすべてが人の力でやる以外なかった。毎日朝の三時半頃に家を出て現場にゆき、夕方は四時半までやったが、仕事をして家に

帰ると疲れてしまつてなにをする気力もなかった。それで日当は最初一十五銭、あとで四十五銭になり、最後は五十銭となった。勘定は十五日であったそうだ。音頭取りをやつた齋藤しうさんは、土場打ち唄を歌うために、毎日船が配給され、その船をなまめ歌つたそうである。時にはなめ切れないこともあった。作業は単調なもので、ちよつと鉄道線路工夫がやるように、力をゆつくり長く使うようにし、破れるために唄を歌いながら進められた。作業は「均らし」とよぶ土盛りをならす仕事と、「踏み付け」といって踏み



民謡を歌う齋藤しう（左）
佐藤トク（右）さんの二人

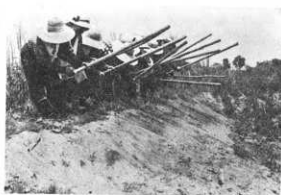
固める仕事と、「棒打ち」とよばれる強く斜面を打ち固める仕事が多くかえされたものである。

唄は地搦唄とかサンヤ搦きとよばれる系統の曲節を持っている。今回の調査では、わざわざ海老瀬地区の山口の堤防下で、村の婦人十名ばかりに、当時そのまゝの服装をしてもらつた。土手の上に並んで、唄に合

サアサ、皆さんだあよ——
やりましょじやないかよ——
お角力甚句でも、ソオレ端唄でも

と、音頭取りが一だんと声を張りあげて歌うと、そのあとに打ち手は土

羽棒とよぶ六尺棒で土を打ちながら均らしてゆく。この一節ごとの合の手には作業があるわけで、しまいには歌い手と打ち手の呼吸がピッタリ合、機械的にリズムカルに作業が進んでゆく。音頭取りの歌っている中は打ち手は足踏みしながら休んでいるのである。



土場打ち作業

土羽棒ナア
ヘア揃い手だよ
ならしを頼むよ
ならしナア
無ければだよ
土羽じゃないよ

もならし唄の一つである。これに対して、特に力の要る棒打ちになると唄も力が入った「棒打ち唄」になる。

ドッコイサノハイコリヤサ
東山出てみる
筑波の山で
鹿が紅葉を踏み分ける

といったものが歌われた。しかし、このふたつとも似たメロディである。わたくしが以前に採集した邑楽郡千代田村赤岩の土場打ち唄は、板倉のものより調子が高く、テンポも早い。節まわしもいくらか違っている。作業のやり方はほとんど同じであった。その歌い方は、
(音頭) サアサ皆さんやりましようじやないか

(一詞) アドッコイコラコラ

(唱和) 角力甚句でもさんさでも

というもので「さんさ」というのは、「さんさ時雨か置野の雨か、音もせて来て濡れかかる」の有名な仙台のさんさ節のことである。板倉ではやはり「角力甚九でも端唄でも」といっているが、共通していることは、角力甚九をあげること、甚九がかなりの要素をなしていたと見てよいであろう。赤岩のものとしてはほかに、

ここは上州赤岩河岸よ
出船入船繁昌する

蚤上手の嫁御をもらい
細い身上(しよう)も太り縮

可愛い男に店番させて
そばで糸挽き悪くない

米のなる木で草鞋をつくり
歩けば小判の跡がつく

舞木片町や片側土手よ
前は利根川帆があがる

永い均らして三善芳かけて
上町へ着いたら御苦勞さん

(註「三善芳かけて」は数字の三×三のこと。九を御苦勞にかけたもの)

おなじ頃に歌われたものであるから、系統は同じと見てよいし、板倉の土場打ち唄を考える上に非常に参考になる。なお、千代田村の土場打ちの音頭取りと打ち手の掛け合いをここに歌詞で記してみよう。

(音頭) ヨイトコラセー

(一同) アラヨシヤコラセー(堤を打つ)

(音) ア受け声しつかりだよ

(一) ヨイトコラセー(堤を打つ)

(音) ヨイトコラセー

(二) アラヨシヤコラセー(打つ)

(音) どっこいまたどなたも

(一) アラヨイトコラセー(打つ)

(二) この次ぎやそれ入れます

(音) アラヨシヤコラセー(打つ)

(一) おおいけづか八百屋さん

(音) アラヨイトコラセー

(二) お平は一升いくらです

(音) アラ、ヨイトコラセー

(一) いまらっとまけぬ芋屋さん

(二) 土場打さんならまけてやる

といったように、時には両者が問答形式でやりながら作業を進めてゆくのである。その中に、卑わいな歌も出てくるが、その卑わいさも、重労働にはむしろ気分転換となつて、たのしく仕事を進める要素になつているのである。とにかく、邑楽郡の土場打ち唄は、邑楽の水害史とともに生まれたローカルのある民謡の一つであつて、保存してゆきたいもののように入る。

藻採り唄 土地ではモクトリ唄とよんでいるし、茨城県で藻取唄といつてゐる。湖沼地帯で沼に生ずる藻を漕ぎ出して採集するもので、その時X型の二メートル五〇センチほどの竹を二本中央で結わえたものを持ってゆき、水中の藻をからませてねじり取って舟に積み込むが、

その藻は陸に揚げてからおもに作物の肥料に使つたもの。板倉沼は以前百艘からの舟が出て、ムギの収穫後秋まで藻採りをした。一日一艘で六ばいをあげたという。大正七、八年の頃が最も盛んだったらしい。採取は自由で、大舟一ばいで五銭ぐらい。作物の根元に敷いて干ばつを防いだり肥料にして一艘分一畝に施したが、金肥が出廻つてくると自然やらなくなつた。仕事は、舟の上から藻をはさみ、巻きつけ、よく水中で洗つてから



板倉沼の藻取り一新井七蔵さんと
同乗はNHKの松下氏

揚げて舟に積み込む。舟は三間半ぐらいの舟を使う。藻採りにもなかなか愉快なことがあり、盆踊りを沼の上でやり、男女掛け合いで歌いながら踊つたそうである。最近の昭和二十五年まではやつたそうである。藻の種類は、モ、カツモが多く、女子供でもやれた。今回の調査では、板倉の新井七蔵さん(五十六才)と柏崎一郎さん(五十六才)によって、わざわざ板倉沼に

舟を浮かべて実演してもらつた。

唄は素材単調なものでんびりした節廻りである。作業がユツクリやるものであるから、唄も休み休み歌うといつたものであるが、どこかに水郷風物詩的なものが漂つていてなかなか捨て難い民謡の一つである。

わたしゃ板倉のもくとり野郎(唄)で



ヌハの沼倉板

もくをとるせい

お色が黒い

お色黒くも

味みやしゃんせ

味は大和のつるし柿

味は大和のつるし柿

東篇に収録されているが、作業そのものはほとんど同じであるが歌詞は大分ちがうから、必らずしも茨城方面から伝承されたものとは言えないようにある。とにかく、群馬県としてはここだけにしかないすばらしいもの一つで、今後なんとかして保存してゆき、板倉沼の観光と結びつけてでものこしてゆきたい一つである。

機織り唄 この地方は織物の生産地ではないが、佐野や足利の栃木県の機場に近かったので、賃機が農家の主婦や娘によって行われた。材料はすべて供給され、それを織りあげて一反いくらという賃金をもらった。朝早くから（五時頃）夜十時頃まで織っても一日一反しか織れなかつた。おもに大正年間であったが、その頃は一反で一元二十銭位にし

ならなかつたという。村には共同の機織り場があって、そこへはよく村の若い衆が娘と寄り合ったものだという。行燈（あんどん）のあかりで糸を燃つた話も聞いた。唄は斎藤しうさんに歌ってもらつた。

切れて困るよ一二の糸が

切れてからまる三の糸

誰か来たよだ垣根のもとにや

五分刈り頭のかげがさす

話山々友達ア急ぐ

背中叩いて明日の晩

といったものであるが、桐生辺の機織り唄と少し調子が違っているが、大体似たものようである。明治期に一番歌われたらしい。

糸挽き唄 上州の糸挽き唄はかなり広範に分布している。坐繰り製糸とよばれる一人で一台を使う製糸方法であるが、単調な作業だけに作業唄が当然要求されてくるのであろう。しかし、少しずつ節廻わしに差異が見られるが、板倉のは斎藤しうさんの歌つたものによつたが、前橋附近の糸挽き唄に、いま佐波郡境町の旧町志区域で歌われている桑摘み唄の雛子を加えたようなものである。前橋近辺のように、最後に「……かねえ」というのを入れないで「ドッコイナー」と入れる。その旋律が、桑摘み唄に似ているのである。

糸をひくならむらなく細く、ドッコイナー

あげてふし（節のこと）なく銀の糸、ドッコイナー

男銀流しの政ちゃんよりも、ドッコイナー

三尺単袂（ひとえ）の人がよい、ドッコイナ！

円い卵も切りよで四角、ドッコイナ！

物も言いよで角（かど）が立つ、ドッコイナ！

潮来出島の真菰の中に、ドッコイナ！

あやめ咲くとはしおらしい、ドッコイナ！

といった歌詞である。そう大きな特色は見られないが、ここの糸挽き唄はかなり正確に遺されている。

木やり 板倉の雷電神社近くの野村熊市（五十九才）さんが歌ってくれたものである。おなじ木遣りでも比較的古いと思われる。この時採集できたのは「かまくら」という曲目だった。

オーイ、かまくらの

お酒の祝に

庄屋さんの、庄屋さんの

ヤレコリヤネー、庄屋さんの

ヤー娘が酌に出た

酒よりも肴よりも

庄屋さんの娘が目についた

目についたらば

つれて出てくれ

わたしやどこまでも

女子（おなご）はよそへの縁ぢやもの

といった歌詞である。ある種のその家を褒める寿ぎ唄である。この木やりを、棟上げ式の時などに三回もやるとおつもりになったという。木

りについてはさらに記すべきであるが、この地方としてはそう重要な位置にないので略述にとどめる。

三、その他の民謡

盆踊り唄 八木節が現在のように固定する以前に、各地で自由に盆踊りに歌われ踊られたものはまことに多種多彩のようであるが、いずれも語り物的な「口説き節」の系統をひいていることは認められるが、その系統の中でも、たとえば利根郡新治村、同月夜野町地方に遺るものはかなり越後の盆踊り唄に近いし、「木崎音頭」とよばれる木崎のものも、益々らしいシットリとした囃子と節廻りから成っており、雑然としてジャズ化したいわゆる八木節よりもズツと地方民謡の特色を備えている。ところが板倉町の岩田で、福地吉次郎（七十才）関野好治（五十八才）増田又吉（七十五才）島村ます（五十八才）の四人の古老から歌い踊ってもらった盆踊りは、「ぶっ切り節」と土地でよんでいる特殊のものであった。囃子に鼓を用い、これをタケで叩くのであるが、唄の合い間合い間に鼓が入るのが極めて素材である。一節一節がぶっ切り節の文字通り、歯切れよく切られる歌い方は特長がある。おそらく祭文などのように、語り物を主とした口説きの盆踊りでは、水のように流してゆくよりこの方が説得力があり興味をそそったであろう。こま切れの合い間にとときどき踊り子の囃子や合いの手が入ったはずである。伝授は小平の小平という関東一とよばれたのと自慢が村に来て教えたという。この小平は犬正十年頃に死んだということである。

ハアアア、出たよ出た出た、三角野郎が、三角野郎が、やぐらが四角、四角四面のやぐらの上で、音頭をとるとはお！それながら、さても一座の皆さま方よ……

というのが出ではじまってゆくのであるが「天一坊」などはよく歌われたものだそうである。ほかの調査者によつて採集されたものに、

○いちに 板倉天神さまよ

には 日光の権現様よ

さんには 讃岐の金ひらさまよ

しには 信濃の善光寺さまよ

いつつ 出雲のいろがみさまよ

むつつ 武蔵の弁天様よ

ななつ 成田のお不動さまよ

やつつ 八幡の八幡さまよ

ここのつ 小中の人丸さまよ

とおで ところのお鎮守さまよ

○さつて東西皆さんがたよ 何か一言読みあげます

何をいうにも百姓なれば うまいわけにはまいらぬけれど こんじば

なしでよみあげます

国は京都の糸屋の娘 年は十六つぼみの花よ 糸屋の番頭にせいざと

いうて 年は三三で男もさかり きりようよければお吉がみそめ か

ようかようがたび重なれば 親の耳にもそろそろ入り それを聞いて

はおくことならぬ ひまをやるから出て行きやしゃんせ じたいせい

ざは大飯生まれ ものもいわずに仕度をいたし 向う三軒両隣りまで

いとまごいしてせいざはいきやる せいざかえりて四、五日たては

お吉思いで病氣となりて ついになわらず相はてました お吉とろと

ろねわりしそこへ 夢かうつつか現れいでて そこでお吉はふと目を

さまし さらばこれからせいざのもとへ 船にのろうか陸地をゆこう

か もしも船にけがあるときは かわいせいざとあわずにしまう

たいぎながらも陸上ゆこうと 行けばほどなく大飯町を せいざやかた

たはどこかと聞けば 橋のもとより三軒目でござる せいざやかたの

前とまれば かさを片手に腰をばこめ あまり長いと皆さまたい

ぎ さらばこらで止めおきます おゝいさね

祭文 大正頃は夫婦ものでよく祭文読みが村を訪れたそうである

が、明治四十三年の大洪水の時には、その状況を祭文にしたものを持つ

てきて門付芸で歌いあるき、文句の刷ってある印刷物を売っていったそ

うであるが、その一節を増田氏が覚えていて歌ってくれたが、

一つとせ、人も知りたる大洪水は、四十三年戊の年、旧の七月の七夕よ

あちらこちらの大荒れは、聞くも涙の次第なり……………

といったもので、数え唄風であった。斗合田にはゴゼの師匠もいて、祭

文は一時かなり歌われたという話であったが、そのわりに諸国民謡は真

跡をのこしていなかった。

念仏和讃 各部落の婦人たちは、時々集って今でも念仏和讃をやつて

いるが、今回調査したものは高鳥部落の念仏講の人達によつて演じられ

た「念仏踊り」と和讃であつ

た。出演して呉れた人々の氏

名は次ぎのようである。

斎藤 たい (八〇)

長谷川 たま (七二)

早川 とよ (六六)

小野田 たみ (六三)

斎藤 いち (六六)

矢鳥 かつ (六〇)

小島 はる (六七)

小林 よし (六六)

阿部 とら (四六)

の九名であった。いづれも

六、七十才の老婆である。踊

りについては舞踊の部に述べ



高鳥の念仏和讃

ることとし、ここでは和讃について紹介しておきたい。楽器は鉦だけである。

(一) 宗教的なもの

1 大日御庭和讃

婦命頂礼ありがたや、大日御庭の玉椿、七重にさく花八重に咲く、なにがし(ひ)がんで八重に咲く、あまりこの世がじやけんさに、念仏すすめ八重に咲く、念仏すすめの御庭には、天からひやくよの花が降る、その花手にとり眺むれば、花ではござらぬみなるくじ、六種の名号はありがたや、なむあみだんぶつありがたや。

2 極楽

極楽の弥陀の浄土へゆきたくば、なむあみだんぶつ、ソレハ口ぐせにせよ。

ソレハ、極楽のたからの池を思いただ、黄金の泉すみただいたる。

ソレハ、眺むれば、月日妙の夜半なれや、ただ黒谷に墨染て……

3 十九夜

婦命頂礼観世音、如意輪さまは有難い、産前産後の血の道を、御救いなきる御誓願、念仏講じ(者)が集りて、十九夜念仏申すなら、如意輪さまの御姿を、ごしこうなされて有難い、願いし如来安産に、守りたまいや観世音。

婦命頂礼子育の、十九夜観音ありがたや、女人懐胎いたすより、安産までも守らしめ、みこるはじめの月よりも、十月を守るみ仏の、御慈悲の仏にましまして、あまた女人のそのために、はじめの月は不動尊、二にはしゃかさま三ツ文珠、四には普賢で五に地藏、六には弥勒の七薬師、八には観音九に勢至、十月を守る弥陀如来。

十九夜さまの御慈悲にて、親子息災いんめいに、守らせ給う有難や、南無有難や観世音。

4 西の河原

婦命頂礼幼な子が、死んで冥土に行くときと、親のごおしをおくらす

に、西の河原に住居する、ひるがむとき夜がむとき、十二時が時の苦しむと、小砂を集めて塚を積む、八万てんの鬼達が、小石あつめて塔を組む、陽も入相のその頃は、積めば寄り手がかき崩し、組めば寄り手がかき崩す、父よ母よと泣く声は、天に響き地に亘る、其処へ地藏があるうちに遊ばれよ。

婦命頂礼父母は、一つやふたつや幼な子を、水の泡とも夢知らず、蝶よ花よと育てても、無常の風に誘われて、初の旅路の哀れさよ、後を見て人も居す、心細さにメソメソと、落ちる泪が草の露、西の河原に参りしは、二つや三つや四つ五つ、何にも知らない幼な子が、集りたまいや南無阿弥陀、一組組んでは父をよせ、二組組んでは母を呼び、三世の塔まで組みあげて、喜ぶ間もなく怖ろしや、かきやくの鬼が現われて、組んだる塔を打ちこわし、また組め組めと責められて、河原へ伏して泣くもあり、又や父母呼んで泣く、そこへ地藏さま現われて、持たししより振りまわし、青鬼赤鬼追いらし、我等が父母沙婆なるぞ、ここでは俺が父母だ、サア来い、と呼び集め、袖や衣にすがりつき、右や左の手をとりて、花の浄土へ連れ参る、花の浄土花遊び、わが子が大事と思うなら、地藏菩薩が大切に、南無阿弥だんぶつ南無阿弥陀。

5 天の川和讃

婦命頂礼天竺の、天の河原の川上に、弘誓の舟がいそいそと、舟は唐金樽は黄金、金の帆柱つき立てて、地藏菩薩は櫂の役、観音勢至はろ(櫂)の役、阿弥陀如来はなか乗りで、六字の名号帆にあげて、南無繁昌の風が吹く、ぎやてい、の波がうつ、西へ西へと赴けば、西は西方極楽で弥陀の浄土へ着きにけり、南無阿弥陀仏阿弥陀仏

6 岩舟地藏和讃

婦命頂礼下野の岩舟地藏のお召舟、舟は白金樽は黄金、柱は金銀巻絵して、綾に錦の帆をあげて、極楽浄土へ乗り込むに、極楽浄土の洞門

は、自力や力で開けばこそ、念仏六字でさらりと聞く、念仏申すお庭には、天から五色の花が降る、その花手にとり見給えば、一字も要わらぬみな六字、なむあみだぶつあみだぶつ。

7 七 他

黒谷円光大師和讃、菩提心和讃、弘法大師和讃、過去帳和讃などの多くが歌われた。

(一) 宗教関係故事和讃

1 壹坂和讃

婦命頂礼観世音、大和国には高市の、壹坂寺のかたととり、手なれし業の糸よりも、細き心の沢市は、妻のお里と二人にて、たのしき月日を送りしが、楽しからざるわが体、今日は心のうさ晴らし、糸の調べもようように、歌う折しも妻の里、そばに来て声をかけ、久しぶりにて糸調べ、少しは心も晴れたよう、言えは沢市声くもり、見えめ目よりもホロホロと、落ち来る泪は壹坂の、御利益よりもなお熱き、涙を払いこれお里、私の心は深山の、霧と同じで晴れ間なく、楽しき人でありはせぬ、夜はひとり寝たるまま、さぐりみてもそちはいはず、声をかけても遠山の、み寺の鐘より返事なく、かたわのこの身因果だと、疾うにあきらめぬゆえに、よきことあらば打ちあけて、花の盛りそのそなたゆえ、散らさぬうちにこれお里、口では言わぬ胸のうち、見えぬ両眼閉じたまま、落ち来る泪は壹坂の、岩にせかれて哀れなり、始終をきいて妻の里、夫の顔を見上げつつ、何をいわんすわが夫や、幼なき時よいいなすけ、この世はおるか未未まで、ひとつ運と楽しんで、暮らすそのうちほうそうで、思いもつかぬこの姿、お前のその目をおさんと、観音菩薩にお願ひし、明けの七つの鐘をきき、お前の眠りをささんと、そつとぬけ出で壹坂の、み寺へ今年で三年目……(下略)

2 七 他

中将姫和讃、阿波の鳴戸和讃、浅茅ヶ原和讃といったものがある。

これらの敘事的な和讃は、一つには歌舞伎芝居の筋を脚色したものであるともいえる。鶴葉の少なかったこの地方の婦人たちが、こうした和讃を機会にして芝居の世界をたのしもうとした娯楽性も多分に加味されたと見てよい。というのは次ぎの例のように、宗教的な仏教的臭味のない祝い歌の性格を持つ和讃まである。あきらかに和讃万能の婦人達のレクリエーション的なものであることを物語っているのとみてよい。

(二) 祝い寿和讃など

1 高 砂

国は播州姫路の城下、高砂村には名所がござるよ、尾上の松にはそのやしたには、お爺さんお婆さんが、箒をかついで熊手を手に持ち、松の落葉やすすきのはかまを、みなかき集めて目籠につめてな、婦ろとなされば上を見たまえ、松の古木に一なる枝には、ぜに花咲きそよ同じく二の枝、金銀小判のお花が咲いてな、小判の実がなる、三の枝には鶴の巣ごもり、羽がいを休めて下なる小池を眺めて見れば、雌亀と雄亀が、よねの守りを口にとくわえて、あなたに向いたりこなたに向いたり、空を眺めてちよおなむすんで、おめでたい、やれそうだよな、このやおんいはめでたいおんい。表御門を眺めて見ればな……(下略)

2 七福神和讃

婦命頂礼おん家の、富貴繁昌の始まりは、親を敬い子を思い、夫婦の中もむつまじく、人の愛敬慈悲情、それが世上へひろまりて、七福神のおたちより、宿のお家のしあわせと、常誓の松も色まして、幾万年の年を経て、ひらく扇の末広く、花の座敷へすわりいで、戌亥の方を眺むれば、鶴と亀との楽遊び、そのつるかめの伝えには、米降れ札降れ黄金降れ、降りたる宝を蔵に積み、花は七福深く、一に大黒二に恵比寿、布袋はくろく寿老神、毘沙門天の美しき、十二単衣の耕のはかま、ようらくく下げておわします。五穀成就国栄え、おん家も栄えてありがたや、南無阿弥陀仏あみだぶつ。

と、全く和讃本来の仏教臭味のないもので、和讃の世界がかなり広く解
釈された一例とみてよいであろう。この応用面がさらに娯楽に転化した
ものとして、次ぎの「尻とり和讃」というものまで行われていた。

竹に雀は仙台さんの御敵、ごもん何処ゆく油買いたかい、高い山から
谷底見れば、見れば目の毒そらはのくすり、くすり峠の権現さまよ、
さまよ三度登よこちよにかぶり、かぶりからかさかこの足駄、足駄
で通れば二階で招く、招く姉さんおん山はいくつ、姉が二十一妹がはた
ち、はだしてどうしがなるものか……山に登れば石童丸よ、円い卵も
切りよで四角、四角四面の栗餅よりも、かたまりはじでももらうにゃ
お米、かない揃うてめでたく暮らす。

といった全く和讃の世界ではないようなものが現実には歌われているので
あって、ことに驚くのは満洲事変などまで和讃化されていた。そこに板
倉町地方の和讃が大衆特に婦人層に占める比重が非常に大きいことを証
している。これを逆にいうと、この地方の娯楽にめぐまれていないとこ
ろでは、どうしても入り易い芸能の世界から拡大して娯楽にまで進む過
程を示すものといつてもよろし、このことは日本の芸能の長い間
の発達で、宗教的なものから分化発達してきた事実を傍証することでも
あるといつてよく、その意味で板倉町の和讃は興味ある課題を提供して
呉れたといふべきである。

伊勢音頭

○伊勢は津でもつ 津は伊勢でもつ 尾張は名古屋の城でもつ 坊主鉢
まき耳でもつ 人の身はかかでもつ かかかふんどしひもでもつ
ひものしらみはひもでもつ ヤットコセエ アリヤセエ コリヤセエ
ナンデモセエ コロボット おきたらよかんべ(カーヤド)。

足尾鯀毒悲歌 これはいわゆる民俗学分野に入る民謡ではない。し
かし、この地方にのみ残る特殊な発生理由と特殊な社会情勢の中におい
て歌われ、現在もなお一部に記憶されているもので、その点では矢張り
貴重なものといふべきである。足尾鯀毒悲歌というのは足尾銅山に源を

発する渡良瀬川沿岸に、明治二十年頃から顕著に現われ始めた鯀毒被害
が、群馬、栃木、茨城、埼玉の四県にまたがって流域の死活問題とな
り、遂には表面化して、政府および古河財閥を向うにまわして戦った農
民運動の中において歌われたものであった。(足尾鯀毒事件そのものにつ
いては、小著「騒動」群馬農民運動史ノート」および「群馬県議会史第一巻」を
参照されたい)。新田・山田・邑原の直接被害地の三郡農民は、このお
それべき鯀毒をなんとか除去し、平和な米土にしようとして決死の覚悟
で、上京、請願、陳情をくりかえしたが、古河財閥と結託した政府は容
易にその手を打たなかった。久しい闘争のために、戸主階級は半ばあき
らめようとした時に、青年の間にかくましい行動力が結成されて有利に
運動を導いたのであるが、意気をさかんにし、士気を励ますためにこの
運動のための歌が作られ、題して鯀毒悲歌とよばれた。幼い子供までが
歌うようになったのであるが、当時の警察当局はこの歌は不穩な内容を
持つものだとし、出版人発行人は所罰され、巡査や教員は各村をあるい
て、子供達がこの歌を口ずさんでいると止めたという大きな弾圧をして
いる。館林警察署記録明治三十三年八月二十八日の条に「川井署長ノ告
発ニ依リ鯀毒悲歌出版人佐藤留吉、見村房吉、大沢新八郎ノ各罰金ノ処
分ヲ受ク」とある。勿論印刷した悲歌は発禁処分された。ところがこ
の足尾鯀毒悲歌とよばれるものが何通りもあり、どれがそれに当るのか
ということがわからなかった。たとえば永島与八の手記「鯀毒事件の真
相と田中正造翁」に収録され私も印刷した歌詞を入手したものは、

足尾の山より渡瀬の
大間々はね滝近辺に

(中略)

流れを下りて雨せば
到りて原野は開放す

かくて沿岸人民が
渡良瀬川の其水に
沿岸田畑に殺到し

命の親と頼みたる
毎注がれて絶間なく
財産権利を奪ひ去り

尚あきたらず沿岸の

(中略)

嗚呼諸共に覚悟せよ

相手は卑き稼業人

斯く成る事のあるべきぞ

恢復請願努めなば

艱難辛苦も何のその

人跡絶えなん勢ひぞ

山又川に罪はなし

国家の亡ぬ其内に

憲法条規に則りて

此行先は知れた事

敵をも徹さで置くべきぞ

とある。いま一つは、筆者が東京の古木屋より求めたもので、これにははつきりと足尾銅毒悲歌とあり、作詞者は悟毒居士とある印刷物(一枚)で、この方には

抑渡良瀬水源は

関八州の沃野をば

機業に名高き桐生町

其他沿岸村々は

頃ほ明治の八、九年

古河稼業の其日より

野火煙毒と乱伐に

降る雨毎の洪水は

かてゝ加へて流毒は

其害いと著るしく

沿岸田畑は害されて

枯れて堤も岸もかけ

少しく水嵩増す時は

見渡す限りの良田は

家屋人畜流亡し

家に喰ふの粟もなく

遠く流れを足尾より

貫き渡りて六十里

足利佐野に館林

皆此河の賜ものぞ

渡良瀬川の水源は

昼酒踏き足尾山

雨露湛る力なく

岩石崩れ砂流れ

渡良瀬川をかき濁し

魚介の類は云ふもさら

芝芦竹や木の根迄

今は河身も荒れ果てゝ

兩岸堤はかけ破れ

皆毒波に浸されて

田畑に一穂の稔りなく

見るも哀れの栢野原(中略)

時の政府は何故に

嗚呼我々は身の為と

嗚呼我々は土地のため

時の政府は何故に

早く清めよ渡良瀬川

清めて我等を殺すなよ

嗚呼我々は皇帝の

早く清めよ渡良瀬川

斯も我等を慮ぐる

人の為には死も恐らず

国の為には死も恐らず

守る為には死も恐らず

斯も我等を慮ぐる

清めて死人の処置をせよ

清めて我等を殺すなよ

愛し賜はる国民ぞ

早く清めよ渡良瀬川

という歌詞である。この歌を知ったのは群馬県議会史編集の時に毎日新聞(明治三十五年一月十四日付)で知ったが作者が不明であった処、先述した原本を入手できてはじめて悟毒居士とわかった、悟毒居士はおそらくこの運動を最初から支持し、田中正造を助けて活躍した沼田市奈良に産まれた左部(さとり)彦次郎であろう。悟(さとり)と左部はあり得ることである。この歌が当時いかに当地方に歌われたかは、前記の毎日新聞の投稿した記事に、

各村の青年児童は競ふて其の悲歌を号呼し、学校の往復にも恰も軍歌を誦すと同様に流行致し候哉、因らず駐在の巡查は路に擁して其の声を止め、学校の教師は生徒を捕へて其の口を塞ぎ、若し強ひて唱ふる者あれば、必ず威嚇を以て加へらるゝの干渉相始まり候ため、折角流行の悲歌も全く唱へられず相成候、然るに近頃又各村に於て其悲歌を唱ふる者有之候也又も警察の干渉教師の叱責相始まり候由如何にも残念至極の至りに御座候……。(一被害民)

とある。共同調査の時にはこの調査まで手が伸びなかったが、わたくしの案内をしてくれた福富総氏が調査してくれることになって、いとこ、三十五年九月に宮田茂氏を通して、足尾銅毒悲歌を歌える伝承者があるといふ報告に接し、九月十七日に調査に赴いた。伝承者は西國新田

二八六番地の加藤由造翁（明治十八年十二月二十一日生）であった。翁が十四才の頃―明治三十三年―栃木県佐野町の厄除大師の春日岡ではじめて覚えたという。その後も栃木県の青年が紋付袴で来て教えたそうである。そのほか大島村（現館林市）の小林猪之丞という人からも練習させられたそうである。驚いたことに歌



藍毒悲歌の加藤由造氏

詞をかなり正確に覚えていたことである。いま翁の歌ったまをここに記録しておく。はじめは前者の悲歌と同じである。

足尾の山より渡良瀬の
大間々はね滝近辺に
ひと度水かさます時は
みなこの河に押流す
海老瀬の間田を始めとし
越名に高山えほうちや
おくだ上下（かみしも）野田もでき
最近五年のその間
生まるにまさりに死に数
そもそも今の大御代は
君まつりごとみそなわし
肩を並べて劣るなき
三陸津浪も悲惨なり
藍毒被害は人のわざ

流れを下りて南せば
到りて原野は開放す
かてて加えて硫毒を
藍毒被害の激甚地
そこや大谷田船津川
はね田に高橋川崎に
およそ三十四ヶ字で
一千六十余人こそ
立憲君子の政体で
イギリスアメリカ露国仏
み世に生まれて有難さ
さりとてこれは天災ぞ
人手にとまらぬ数のもの

人と人にてやむものを
人々の命をたおしゆく
しかも乱暴果てしなく
（以下忘失のこと）

この貴重な聴き書がとれた。節廻わしは単純な祭文読みのようなくりかえしであるが、予想した軍歌調ではなかった。教育委員会のテープで録音をしたので後刻譜に再現できるであろう。なおこの時いま一人除川の関口清次郎翁（明治二十年九月二十一日生）も藍毒悲歌を覚えていてというので往訪したが、節まわしだけで歌詞は全部筆者の提供したものであった。曲はよく加藤翁と似ていたからその点参考となった。とにかく、一時邑楽郡の水害地を風びした藍毒悲歌が、曲詞ともに採集できたことは成切であった。

Ⅰ 民俗芸能

一、獅子舞

総説 板倉町の獅子舞は、従来は県下の獅子舞の中でも遠隔の地域であるため、ほとんど調査の手が伸ばされていなかった。それだけに今回の調査では大きな期待がかけられていた。しかし、八月一日からという炎暑のまっ最中は獅子舞を演ずることはほとんど不可能な時期であった。あの重いしかもスツボリと面を包むカシラを被り、手甲、脚絆、股引といったいでたちでは到底獅子舞を演ずるということは考えられないのである。ところが、この分野を受け持った筆者にとつて、町教委の宮田茂氏の斡旋の労と村人の熱意ある理解で、実演がしてもらえ、獅子舞はほとんど見られなかったのに比べて板倉町の異常な熱意にはいたく動かされた。したがって、飯野本村と新村の獅子舞調査の日の如きは予定のスケジュールがどんどん遅れてしまい、もう夕方近くになったので、わたくしとしては翌日に廻りたいと思ったのであるが、村人の熱



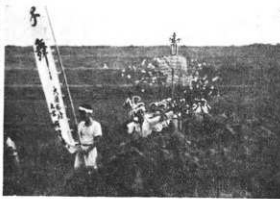
観 谷 の 獅 子

意を思うと断然予定通り決行することにしたのであるが、夕暮れの利根川べりに近い部落での獅子舞調査で聴いた笛の音は、今もって忘れることができないほど耳底についている。

実演を見せて貰ったのは、観谷の獅子舞と飯野本村、飯野新村の三組であったが、この三組ともそれぞれ系統を異にしている。観谷の獅子はその構成が最も花やかであるし、古い型を遺している。飯野の獅子は本村が万燈に特色があり、新村のは最も簡素化されたものである。流派はいずれも「助作流」を名乗っている。観谷では「平井助作流」本村では「日光助作流」新村では「助作流」とよんでいるが、いずれも助作流に流れを引くものと見てよいであろう。この助作流についての伝承由来は明らかでないが、上州の東部に多く、別に「坂東助作流」といっている所もある。どうも日光とか坂東とかあるのを見ると、日光方面あるいは関東地方に根拠を持つ獅子舞の系統であろうことは推定できる。今後の研究に待ちたいと思う。では各獅子組について紹介することにしよう。

観谷の獅子舞 獅子舞と称さないで「ささら」ともいっている。以前には影（ささら）をすったものであろうか。獅子は三つで、前獅子、中獅子、後獅子とよんでいる。一組の構成はこの獅子を中心とし、錫杖二人、柏子木六丁（六人）、万燈二人、八丁じめ一人、花笠四人、笛四人、法螺貝一人、世話役若干名という二十数名から成っている。勿論一

人立ちの風流獅子である。行われる日は昔は六月十八日十九日であったが、現在では七月二十五日だという。外の地方では、四月十五日を中心として大部分が春に行われるが、夏の土用の中に行われることはそこに獅子舞本来の目的である「雨乞い」とか「疫病除け」の現実との結合を考えさせる。獅子は例のカシラを冠るが、カシラは角（黒と赤のウルシで製の輪となつている）を着け、ニワトリのカシワの尾羽をもって飾ったものである。歯は四角の箱型であり、牙は下向きになつてゐる。腰太鼓



飯野新村の獅子舞の「おねり」

(かつこ)は、直径一九センチ、長さ三〇センチで皮部は三ツ巴が描かれている。カシラはキャップ型式で、下あごから垂らす小掛け（前垂れ）は、両先端に糸の輪がついており、ここに両手の親指をさし込んで小ガケを複雑に動かす。お伴につく錫杖はほんもので、大地に突くとチャラン、チャランと音を立てる。柏子木は普通のもの。万燈は頂部に燈籠をつけ、燈籠の上に御幣束がX型に交叉されて立っている。

燈籠の基台は円型で周りに垂れ幕が下がり、垂れ幕の基部から竹を割ったものに造り花を着けたものが四方八方に出て垂れ下がっている。これを二人で持って、おねりの時には大名行列の毛槍持のように、往來を左右に動きながらクルクル廻わしてゆく。花笠は角型である。現在やれる曲目は次ぎの六つになっている。

一、渡り節（はざさらともい、おねりのことをいう）



榎谷の獅子舞一天に向つて雨乞いするポーズ
と思われ原始的な獅子舞の起原を説明する珍
らしい場面

一、しめがかり(ほかの獅子でいう騒がかりのことで、廳先ぎに四本の棒を四方から出して一点を結んだものをめぐつて踊るもの)

一、神祇(神社の前などで振る舞いである)

一、歌切り

一、小がけ(前垂れに両手を掛けて、腰を低めてパツパツと踊る曲目)

一、雄獅子隠し

この中最も注目されるのは渡り節と七五三掛りと神祇の三曲目ではないかと思う。最初世話人の家の庭では、七五三掛りが演ぜられたが、小掛けをパツと聞いてうすくまったりする荒々しい動作をくりかえす勇壮なものである。最もデラックスな祭礼気分を引き立たせるのはなんといっても渡り節であろう。世話人の家から部落の長柄神社までの間を当日そのままにやつたのを見たのであるが、法螺貝と笛を先頭にし、そのあとへ三頭の獅子、次いで花笠―八丁じめ―万燈―柏子木―錫杖―村人とい

う順序に並んで静かに進んでゆくが、時々立ち止まって、万燈振りが行われる。器用に万燈をクルクルと振りながら道の両側へ往ったり来たりする。柏子木はタスキを掛け派手な襦袢を着て一せいに道の右と左に動きながら、笛と合わせ万燈と合わせてカチン、カチンと鳴らす。錫杖は時々ズンズンと大地を力強く庄しつける動

作をする。この仕草はあきらかに悪魔を大地に封じ込む原始民俗からの変化であろうかと思はれる。その中に、行列は再び動き出し、しばらくゆくとまた休んでいよいよ村人の待つている長柄神社の境内で、神祇の曲目を演じた。この境内がいわば榎谷の獅子舞の「獅子場」であり「踊り場」となっている。この神祇の曲目で特に注目されるのは、ドンンドンと大地を踏みつけるいわゆる反問(へんべん)の動作の多いことと、

時々上体を仰向けに反らす動作である。反問の法は東南アジアあたりの呪術的芸能に多いもので獅子舞がその痕跡をのこしているのである。体の反りはおそらく天の竜神に雨乞いを祈るポーズではないかと思われる。笛は七穴を使っている。ただこの獅子舞には歌詞が全然ないことである。終始パントマイム形式であることは注目してよい。とにかく、榎谷の獅子は板倉町では最も華麗であり豪華である上に古い雰囲気をよく遺している点でわたくしの興味を惹いたことは事実である。

榎野本村の獅子舞 旧大筒野村に属す板倉町でも南部地区で利根川に接する地帯である。この獅子舞は「日光動作流」とよんでいるが、榎谷とはかなり違ったものがある。獅子は一人立ちで、名称は雄獅子、雌獅子、中獅子とよんでいる。カンラは角状の口で、歯は四角箱型、耳は固定式、牙は下向きである。かっこ(腰太鼓)は三〇センチ×三〇センチでほぼ榎谷と同じ大きさ。ただその中の一個の胴の内部に墨書銘があった。

依古彼来候付

天保三辰六月吉日

小見村

榎川 七平

時ノ世話人

大工六右衛門掾

とある。するとこのかっこの新調は天保三年ということとなるが、「古より故来り候に付」とあるから、獅子舞そのものはもっと古くからあつ



飯野木村の獅子

たと見てよいであらう。

小掛は背中に紐で結んでつける。小掛けの模様は三つ巴の神紋をつけているのが変わっている。戴着でなく袴をはくのも面白い。一組の構成は鉦一人、旗一人、花笠(子供)二人、笛数人、獅子といつたもので、榎谷から見るとズツと簡単である。村の経済力のための差異が系統の差異が明らかでない。笛は六穴で当日は六人の笛手が出演した。曲目は道中と庭に大別され、庭というのは一定場所である。

演ずる曲目のことである。道中というのはいわゆるおねり、道ゆきのことである。庭はさらに「花」「綱渡り」「橋わたり」「梵天」「笹がかり」に分かれている。ほかに「宮ずり」といって神社の境内で行う。笹は使われない。曲はむかしはもつとあつたのであるが、最近略されて消滅してしまつたということであつた。歌詞はあるが変わつたものは少い。

飯野新村の獅子舞 流派は「助作流」と称している。一人立ちの風流獅子である。道ゆきの構成は旗、弓、柏子木(六人)、万燈二人、笛五人、獅子三人の順序で進む。曲目は次ぎのとおりである。(○印は今同調査のもの)

○かんむり 弓がかり ○三本づくし 社切り すがわきの五種目になつてゐる。獅子の扮装は榎谷と似ているが動作では小掛けに両手を通して、パツパツと勇壮にやる点がよく似ている。実演は鎮守の境内で行われたが、最初道ゆきから見た。ここでは「すり込み」と称

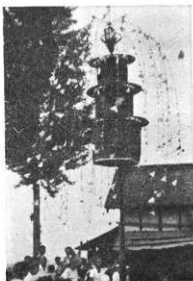
している。「ささらをする」というのが獅子を舞うという意味であるからそれから実演に移るということで「すり込み」とよぶ。定時の上演は毎年六月十五日であるが、昔は厄病除けに舞われた。ここ五年ばかり獅子を踊る者が老人ばかりとなつてしまひ、一定しなくなつたと慨いていたが、三組の中では最も水鏡が心配される一つである。



飯野新村の獅子万燈

曲目のうちの「かんむり」では、雌獅子が後に出、雄獅子二が前に並んで△型になつて演じられた。腰太鼓は雌獅子だけがバチで打ち、雄獅子はバチで調子をとるだけ(叩くまね)であるが、そのかわり小掛の両端を持つて、すばらしくダイナミックな動きを見せる。三組の中でも最も力が入つたものである。次ぎ

の「三本づくし」という曲目では、ボンゼン(梵天)といふが御幣束のこを三本社前に立てておき、これを三頭の獅子が代わる代わる奪いとりとうとするドラマである。最初近寄ると幣束の神威ではね返えされ、モンドリ打つ真似さえある。二回三回と奪いとりとうと掛るとこが見もので、最後にはこれを手にし、共に喜び合うという筋であるが、笛と腰太鼓のリズムによつて演じられるだけになかなか興味ふかひものがあつた。その間の激しい動作は驚くべきものでよほどの体力がない限り堪えられないと見えていた。歌詞は全然使われず、古老から聞いても昔からなかつたといつてい



飯野本村獅子舞の万燈

獅子舞はたしかにすばらしい獅子舞本来の降魔の一面を伝えるはげしいものだった。

二、神 楽

概説 板倉町の神楽は神社に付属しているもので現在三座ある。一は西岡の赤城神社の神楽、二は板倉の雷電神社の神楽、三は高島の高島神社の神楽である。このうち第一の西岡のは館林市大島の神楽が来演するものなのでこの土地にあるものではないので略すことにし雷電神社と高島神社の天神宮の神楽について報告することにした。この二座は全く別の様式を持っている極めて対照的のものである。群馬県の神楽は大體二つの系統に分かれており、第一は群馬郡種名町や高崎市八幡の八幡神社神楽などに見られる荘厳な儀式祭典向きのいわゆる神代神楽の系統であり、第二は桐生市賀茂神社や北橋村南室の赤城神社のように曲目の中に、非常に俗受けするユーモアやわい雑さを持っている里神楽或いは太々神楽の系統である。ことに里神楽は一部神代神楽のなものを曲目にしているが、いくつもおどけたものがあるように、発生当時から神事芸能にはつねに鎮魂と神賑（かんにぎ）の二つがあったことは、すでに

た。曲目が少なくなつていゝるのは矢張り長い間に省略されてきたためであろうと思われる。夕暮の黒い帳がシットリと降りかかった境内でみたこの

以前の報告書でも記したとおりであるが、神代神楽は鎮魂を主とした厳肅なものであり、神賑は氏神と氏子が共に笑いたのしもうという余興的なものとなつて里神楽へと派生していったのである。板倉町の二座の神楽は高島の天神社に付属するものが神代神楽系の里神楽であり、板倉の雷電神社付属のものが「火男踊」とよばれるように極端に余興化した太々神楽系である。前者の荘重さと後者の諧謔性とは全くよい対照をなしている。この二つとも当日わざわざ実演してもらつて見学することができたのは幸いであつた。以下その各々について記してみよう。

高島天神の神楽 板倉町大字高島にある天満天神宮はその由緒も古いものらしく、社殿・境内も立派であり、県内は勿論県外からの参詣者も少なくない。邑楽部内でも名社の一つになっている。この境内にある神楽殿で村人による神楽連の人々によつて毎年元旦、二月三日、二月二十五、六日、四月三、四日に演



高島神社の社殿

一 一座の構成は高島部落の人達七人によつて守られている。伝承としては館林市大島から明治初年に伝わったと古老が話している。大島の神楽は東京都の有名な御岳神社の豊穂講とよばれる神楽の伝流をひいていゝらしく、この系統は県内でも北橋村から北群馬郡地方にかけて多く見られ

る。神楽座の頭を「講長さん」とよぶの小豊種神楽の特長であるが、大島では現にそうよんでいる。すると高島の神楽もおそらく初めは豊種講系であったと思える。しかし、神楽殿に掲げられた額には「吉田殿御免太々御神楽」とあるから、京都の吉田神道家との関係も考えてよいであろう。地元では「固定神代神楽」というそである。前述したようにたしかに神代神楽ではあるが、榛名神社のもののように厳密な重さばかりが曲目にあるのではなく、次ぎにしめすように、興舞とよばれる余興的な里神楽も入っており、厳密に言えば里神楽であろうが、おなじ里神楽でも高島の方は神代神楽の色彩が濃厚に遺っているし、板倉の方は余興的色彩がより濃厚に表現されていると見られる。

高島神楽の曲目

式舞：幣舞（別に弓矢）、思金神、天狗、翁、太魂、古屋根、銅女

（うずめ）、手力男命、計八座

興舞：金山、夷（えびす）大黒、狐、三神、計五座

で、合計十三座から成っている。一座の上演時間が大体三十分から四五十分に及ぶものである。曲目と採物（手にもつ道具）の関係は次ぎのようになっている。

幣舞（御幣）思金神（御幣束）天狗（槍）翁（笛と鈴）太魂（槍と鈴）古屋根（刀と槍）銅女（扇と鈴）手力男命（扇と鈴）金山（刀と槍）夷（釣竿と鈴）大黒（種と扇と鈴）狐（歌）三神（扇と鈴）

この曲目の中には芸能の種々の要素が入っており、たとえば能や歌舞伎、人形芝居で重んぜられているところの翁がこの曲目の中にも入っており、神話に基づくところの天狗（天孫降臨）銅女（同上）手力男（同）や、出雲神話の夷と大黒、産業のもとを開いた金山神（鍛冶）、狐（豊受神の眷属で参拝）大黒（経済）といったものを採り入れている。式舞が荘重なのにくらべて、興舞になると囃子も一変し、古い芸能における猿楽的な要素を多分に盛りこんでいる。

囃子方は大太鼓一、小太鼓一、笛一である。現在の上演者は橋本淳さ

ん（四十八才）ほかの人々でまた壮年の人が中心である。今回見た曲目は時間の都合で手力男命と金山彦の式舞興舞各一座ずつであった。いずれもパントマイム形式で唱え言はないとのことである。手力男はいうまでもなく天の岩戸の神話で知られている場面であるが、約十五分間に編めてもらったので十分の調査はできなかったが、手力男が天の岩戸の前でしきりと反問を踏んで力強く舞うのは印象的であった。岩戸は一枚の



高島天神の神楽（金山彦の場面）

板三尺位の細長いものを使い、やつと最後にこれを除くと天照大神が現われ、手力男はその威光で一瞬神憑り状態になるところなどなかなかドラマチックであった。そして樽と鈴をもって大神が明かるくたのしく舞うあたりはまことに典雅という言葉に尽きる。面もかなり見られるものであった。

次に金山彦であるが、鍛冶屋の元祖といわれる神であるから、鉄から刀を打ってゆく仕草を演じるものであって、金山彦の向う槌をとるのが例のヒョットコである。ヒョットコは「火吹き男」が跳つたもので、火を吹いて起こす役目から口が曲がつてつぼんでしまったのだという話のある役である。このヒョットコが、おどけた仕草をしながら刀を打ってゆく筋であって、演技もなかなかうまい。

囃子は「かまくら」「岡崎」といった他の神楽と似たものを使い分けていた。大太鼓の腹に響くような音とともに、里神楽らしい雰囲気を出

分に味うことができた。衣裳もなかなか立派で、手力男のトリカブトや天照大神の装束などきらびやかに目立ったのが印象的である。

板倉の火男踊 雷電神社の神楽殿で演じられたものを調査したが、火男（ひおとこひよつとこ）踊りと地元ではよんでいるが、実は単なる踊りでなく、神楽である。火男踊と称するのは関東地方では茨城県地方に三、四あげられているほかは少ない名であるが、茨城のものを見ないの

でなんとも言えないが、おそらく板倉のと同じく里神楽の一種

だろうと思う。正しくは板倉の里神楽とよぶべきであるが、地の元と呼称によって火男踊としておく。由来はこう伝承されているからである。

面場の「三韓征伐」の場面
（石が神功皇后左にトヲ）
板倉の神楽



たのが最初だそうである。村に観衆がなにつないから、買って来いといわれて始まったという。それから今日まで行われているのである。従って一座を構成している現在の人々は比較的高年齢のもので多く、高島と対照的である。上演されるのは板倉雷電神社の祭礼の時であるが、この雷電神社は板倉沼の畔に沼を背にして位置する神社で県下でも出楯の古さで知られた雷電神社で、昔から講中も結ばれており、県内は勿論近

県からも参拝者が多い名社の一つである。現在行われている曲目は次ぎのようである。

ひよつとこおかめ 三韓征伐（神功皇后） 大蛇退治 安達（鬼婆）

道成寺 葛の葉の子別れ 大江山 狐釣り 種播き 鍛冶屋 十座 この十座の曲目を見てまず気のつくことは、普通の里神楽に見られる神功皇后と種播き、大蛇退治、鍛冶屋（高島の金山彦くいで、他は歌舞伎や狂言であることがわかる。十座のうち六座は観衆性の強いしかも人口に親しまれている芝居からの脚色である。おそらく県内の里神楽では最も大衆化され俗化された神楽としても異論はないはずである。その点

貴重な無形文化財である。なお曲目と歌舞伎狂言との照合をしてみると

（板倉の曲目）
（歌舞伎狂言の名称）

安達（鬼婆） 五松半二作「奥州安達屋」
道成寺 長唄舞踊「京鹿子娘道成寺」
葛の葉の子別れ 竹田田雲作「芦屋道満大内鑑」



火男踊り

能狂言長唄歌舞伎等「釣狐」となっており、こうした神楽と歌舞伎との連絡あるいは脚色同化されたのが何時代誰れの手によったかということは実は大きな問題になる。地廻りの旅芸人が創り出したものか、或いは神楽の側が採り入れたか、いずれも討究すべき課題であるが、遺憾ながら今回の調査では実演を見る時間に制約されて、わずかに「おかめひよつとこ」と「三韓征伐」の二つしか見ることが

できなかったので何れ後日ゆつくりと見た上で結論を出したいと思つてゐる。囃子方は大太鼓一、小太鼓二、笛一、鉦一である。

さてそれでは「おかめひよつとこ」についてその筋だけ簡単に紹介してみよう。この面はいずれもそう逸品ではないがおかめはやや見るべき彫りである。ここでまた少し由来伝承にふれておきたいが、六人のものが先ずやろうとした頃、衣裳は各自の親達が子供に買ってやり、芸の方はその頃板倉に芸好きの正田幸八という人物がいて、それに教えられた。この幸八という人は埼玉県越生の人で祭り囃子が得意だったので、この人から太鼓と笛を習ひ、踊りも指導して貰つた。毎晩通つて練習したが、不明のころは長竹までいって教へを受けた。囃子の元は神田囃子の系統である。その後越生の先きの三田ヶ谷といふところに「高須賀」とよばれる歌曲があつたのでこれを稽古したそふである。この歌と踊りは、万作踊のものであつた。万作踊といふのは埼玉県一帯に行われ、現在もその流れが伝わっているが、口説節で、歌舞伎芝居のお軽助平（忠臣蔵）の道ゆきや、お半長右衛門の道ゆき、奇人お松といふ所作事を踊る民間舞踊劇である。邑栗郡にも現在の邑栗村辺に最近まで行われ、中庭淋一といふ薩摩の者などは名人芸であつたといふことである。現在のおかめひよつとこの踊る手には、多分こここの万作踊の流が入つてゐる。そのうちにこの地方にも地芝居が盛んに行われるようになり、それを見て、埼玉県の市川福十郎といふ役者を頼んで地芝居の稽古をしたが、女形の役がうまくやれないので、東京の中村福助を頼んで振り習ひ、歌舞伎芝居の演しものが今日のように仕上がつたのだそふである。太鼓はその後栃木県佐野の福富町の囃子を見て真似たそふである。こうした複雑な時代の移り変わりによって現在のものが完成したのである。こうしたが、おかめひよつとこを見てみるとすぐわかるのであるが、単なる神楽の反問や仕草とは全く違つた日本舞踊の型が多分に採り入れられてゐるのであつて、たしかに神楽とよんでよいのかさへ実は問題になるだらうと思ふ。しかし、三韓征伐と大蛇退治のような曲目によつ

て神楽としての面目を保つてゐるのである。

「おかめひよつとこ」の筋は、最初におかめが子供を背負つて出てくる。最初は日傘踊りで、日傘を持って囃子につれて踊る。その次に囃子の舞がある。そこへひよつとこが現われて、おかめの背中の子をあやす。曲はこの時郷愁をささう子守唄に一変する。演出はこのあたりなかなか微妙である。おかめとひよつとこは羽根つきをやつて互いに遊んだあと、おかめが背中の子供を下におろしてひよつとこにやると、ひよつとこが抱いて座わり、おかめが踊る。そのあと、おかめがひよつとこの髻を刺つてやる。このあたりの仕草もなかなか面白い。最後にひよつとこが子供を背負つて楽屋に入り、つづいておかめが退場して一曲の舞台が終わる。正式にやるとこれだけでも一時間を要するとのことであつた。とにかく、このおかめを男性の老人が踊るのであるが、その手振り腰のこなし、足運び、すべてが堂に入ったもので、おそらく興舞の神楽としても異色のものであらう。

第二に今回見た曲目は三韓征伐である。最初虎に扮した一人が出て舞う。次ぎに青鬼が現われ、二人で大きな徳利で酒をくみかわして大いに暴れる相談をする。虎と青鬼で三韓の悪者を象徴しているわけである。二人が酔つてグデングデンになつた所へ神功皇后が弓を持って現われ、二人を退治する。次いで野見宿弥が子供を抱いて出る。宿弥が先きに退場し、最後に皇后が六方を踏んで退場するといふもので、この間二十分ぐらゐ。ほんとうにやると矢張り四十分ぐらゐは要するといふ。

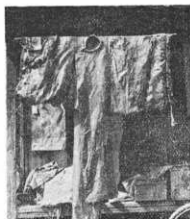
以上のように今回はただ二種目しか見られなかったが、歌舞伎の脚色になるものが見られたらもつと興味あることが示唆されたかも知れない。しかし、この二つから、板倉神楽の特質は十分に推定できるはずであつて、大道芸に変化していった㊦の大神楽などへの過程として見ても見られないことはあるまいと思ふし、郷土芸能としてその発達史的的位置はきわめて高いといふ事実は認められるのである。

二、能の式三番

式三番が神事芸能として、むかし神社に付属する重要なものであったらしいことは、現に行われる城南村一ノ宮の赤城神社、前橋市下長磯の人形芝居式三番（県重要文化財指定）や多野郡上野村乙父の貫前神社に宝物として所蔵されている翁面一式（「上野村の民俗」下、拙稿参照）などでもある程度察せられる。能の式三番は非常に厳肅なものとされており、それが人形芝居、歌舞伎の世界でも重視され、長唄による式三番や舌出し三番叟へと変化してゆくのであるが、今回の調査で、板倉町に二組の式三番関係の遺品を調査することができた。一つは石塚の式三番衣裳であり、一は岡の翁式三番関係一式の遺品である。両方とも現代を去るズツと以前に廃されたらしく、石塚の方などは廃された年代が全くわからないほどであるが、岡の式三番は最後が大正十一年頃だったというからもうやらなくなって四十年からになっている。当時は毎年天神さまの祭（高島神社）の正月二十五日に演じたというが、道具類はその間田島齊氏の宅に保存していた。すると比較的最近まで岡ではやっていたことになる。したがって本報告書に現在行われていないが、過去において盛んに演じられた事実から見て紹介しておくべきだと考えたのでここに記しておくことにした。

石塚の式三番衣裳　こんどの調査で石塚の集会場にわけのわからない古い衣があるからというので、予定になかったが往訪して調査したところ、能装束で、明らかに式三番の翁の着用するものであることがわかった。一部痛んでいるほか、かなりよく原形をとどめていた。ポロポロに痛んだ他の二枚は一千歳着用のもの、一はこれはまぎれもなく三番叟着用のもので、三種ともちゃんと保存されていた。鼓を打つ囃子方の袴（かみしも）と、二重縫いになっていろいろ引き幕もある。それなのに肝心の面が一つもないのは途中でおそらくいたずらされたか持ち去られたものであろう。ことに注目されるのは衣裳類の納めてあった道具箱があ

り、そのフタに墨書があつて、元和二年に新調したものであることを記している。これは群馬県の芸能史の資料として貴重な事実を物語るものである。戦国時代のあと一応天下が平和を取り戻したとはいへ、豊臣方と徳川方との対立は深刻なものがあつた、その終止符が元和元年の大坂落城で打たれた翌年に、板倉町地方で農民が能の式三番を演じる一式を撮



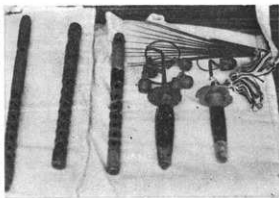
石塚の式三番装束

えたことがわかる。

もともと能の翁はその発生がインドか、インドが蒙古地方に接するあたりか、あるいは蒙古あたりだというし、東南アジアだともいうが、日本芸能の中で神格視されているのを見ても原始神事芸能との関連が深いものであることが推定されている。いわば異国から最初の日本民族とともに将来されたという見方が強い。天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を祝する神事芸能として中世から重んぜられていた。したがって農村でも神社の祭祀に、この式三番を演じて祝禱をしたものらしく、やがてそれが農村の民俗芸能として独立して存在するようになったものである。石塚の衣裳箱の墨書銘は、群馬県の式三番の普遍化の時期を推定するのに貴重なもので、衣裳とともに大切に保存してゆきたい。

岡の式三番　旧大筒野地区の岡にも、翁の面があることを調査中に聴き、急に調査することになった。岡部落の田島齊氏宅に道具箱（これは新しい）に収納されているものを出して調べたところ、次ぎの品々があった。

翁面　二（白式附一、黒式附一）鈴　二　笛三本（中一本は特に古い）翁



物の持と笛の三番式網

装束 鼓四 大胴二幟
(嘉永六年)

このほか中啓は扇面が全部とれてしまつて骨だけがアゴ彫りもかなり深く立派な作である。衣裳や面からみて石塚よりあたらしい時代のものであると思う。鈴は神楽や能では霊的なものとされ、むかしの旅人などは途中の猛獣や悪魔を防ぐために鈴を身につけて歩いたほどであるが、七五三につけられた鈴も古いもので（一つはごくあたり方を用いたことがわかる。柏子木は見えなかつたがおそらく以前あつたであろう。

網の式三番は大正十一年を最後として止められたらしいが、現在当時翁をやつた人は死亡したが、三番叟をやつた今井喜兵衛、大塚藤一の兩人は健在だというし、千歳をやつた者はいく人か健在だとのことであつた。実はこの文化財の担い手であつた人達に会つていろいろ聴きたかつたが予定がばいばいで次ぎ次ぎと遅れてゐるためたこの機会を約して聴書調査を後日に譲つた。その頃の上演は神社(天神社)の拝殿を舞台としてやつたそうで、終わると千歳が外にいる氏子のために面箱を舞台とし、氏子はこの面箱の下を一人一人くぐつて、その年の幸福と無病息災を願つたという。この神聖な面箱(実は翁の面)の下をくぐる習俗は、現在でも前橋の下長磯の人形式三番でやつてゐる。対照してまことに興味があ

る。この式三番一式も町当局でしかるべき保存方法を講じてもらいたいもの一つである。

四、祭 囃 子



面の白式三番式網

祭礼の屋台や山車に乗り組んで囃子囃子を、一口に神田囃子とよぶほど江戸の三大祭の一つである神田囃子が有名である。が関東地方の囃子は多かれ少かれこの神田囃子の影響を受けてゐる。数多い祇園の際の囃子にしても、祭礼の時の道ゆきの囃子にしても、祭子、山口地区の大杉神社の氏子によつて伝えられてゐる「大杉囃子」を調査することができた。この囃子は、大杉神社の祭礼の八月四日に毎年行われてゐるものであるが、今回その当時のままの仕来りである。大杉神社といふのは茨城・千葉一帯にまたがる水郷地帯を中心とした船乗りが守護神として信仰したもので、本社は茨城県稲敷郡阿波村にある。赤松宗坦の名著「利根川図志」には、この大杉神社を輸入りで紹介してゐる。舟運関係で船頭が信仰したが、地元では漁撈の神としてゐる。下利根川と交渉のあつた群馬県の各河岸(川の港)には、いずれも大杉神社が勧請されたらしく、佐波郡玉村町五科や前橋市の利根川沿いの村などにも奉祀されてゐる。同様に、この板倉町山口地区も分祀したものと見てよいであらう。大杉囃子という名称は、もとの本社の大杉神社



大杉囃子の遊び

ときに、それを村から追い払うために、この唄を歌いながら囃し立てた笛・太鼓などの囃子を阿波囃子とか大杉囃子とよんだのである。茨城県各地に多く見られるのであって非常ににぎやかな囃子である。この大杉囃子が板倉町の山口地方に伝わる理由は十分に考えられる。古河を中心としこの地方の交渉は茨城県との方が密接であったことは他の事例から立証できる。すぐ川を距てた対岸はもう茨城県



大杉神社

にあった囃子が伝わったと解釈するよりも、大杉神社に行われるところの大杉囃子と解釈した方が自然かも知れない。しかし茨城県の大杉神社のある阿波(あんば)村には、民謡として「あんば囃子」とよばれるものがある。歌詞は
阿波大杉大明神(ア、コリヤコリヤ) 悪魔を払ってよういやせ(ア、サノセ) ヨーホウイ、ヨイトコ、ドッコイセ
といったものであるが、ある時この地方に病気が流行した

と見れば当然大杉囃子が取り入れられてよいからである。「日本民謡大観」(関東篇)の三十三頁に収録されている、茨城県鹿島郡矢田部村の大杉囃子は五人囃子とも称し、笛二人、太鼓(大と小)二人、大鼓一人、小鼓一人、鉦一人の五種の楽器を用いて七人で合わせると報告している。曲譜も掲載されているがよく似た旋律のようである。おそらく、山口の大杉囃子は大杉神社とともに茨城方面から受け継がれたものであろう。



大杉囃子の演奏

山口の大杉囃子は、大太鼓一人、小太鼓一人、鼓一人、鉦一人、笛三人、計七人であって茨城県の場合に比べて大鼓だけがない。大鼓は鼓の大きいものであるが以前はあったらしい。現在には鼓を五つにふやして大鼓の役目をさせているらしい。調査当日祭礼そのままで実演した(後でこの調査のためわざわざ変更して呉れたことがわかった)ものを見るとまず大杉神社の境内(村中で一番高い位置で絶対に木害を受けない位置)に、神



大杉 雛子のおねり (下につづく)

と、その家の主人は外に出て出迎え、先ず御神酒を呈し、一同にも神酒を注ぐ。こうして一軒廻わり、最後に神社に戻るが、これを「引き込み」という。引き込まれた神輿は、雛子に合わせて担ぎ手が振りながらグルグル廻わす。一見危険に見えるほど荒い所作である。これが終わると一同社前で「しめて」この祭を終えるのであるが、むかしは厄病除けや雷の時に臨時にやったと伝えている。こう見ると、矢張り茨城県のものと同大分似たものであることがわかり興味深い。

問題の雛子の曲目は、現在下記の十一曲が行われている。

- 一、太 刀 (或いは打つ込みともいい調子の速い曲)
- 一、しようでん (運ゆきの時の曲で荘重で緩やかな曲)
- 一、社 切 り (にぎやかな曲)
- 一、が く
- 一、新ばやし (屋舎雛子に近いもの)
- 一、祇 園 (十一曲中最も美しい旋律とハモニーを持つている曲)
- 一、三、べん
- 一、しようわん (この二曲は最近栃木県の方から覚えたと)

- 一、雷 (名のように大太鼓の調子をあげた力強い曲)
- 一、山 王
- 一、そこやれ (軽快な踊り出しのような曲)

いずれもあたりを庄するような曲が多く、ある時はにぎやかに、ある時は勇み立ち、ある時は沈んでゆくように、さまざまな感情をよび起こすものが多く、雛子としては多野郡上野村の雛子と並べていずれ劣らないものであるといえよう。笛は七穴であるからなかなかむずかしいであろうが、よくこなしていて、いかにも祭雛子にふさわしいもので、こうしたものが、群馬県の最東端に保持されて来たことは実によろこばしいことで、黄金の文化財にまさる価値をもっている。

五、舞 踊

概説 舞踊もひろく解釈すれば獅子舞や神楽なども舞踊であるが、それらは一応独立したものとみなし、ここではいわゆる踊りを主としたほかのものを紹介しておくことにする。「歌い踊る」ことは人類の発生とともにあったはずで、悲喜哀歓をそれぞれ肉体によって示めそうとする時に歌いそして踊るのであるが、それだけに舞踊の歴史は古くしかも究め難いものの一つであろう。芸能の最初が神と人との関係から発生したという原則はおそらく崩れまいが、同時に個人である場合の感情意思の表出方法としても踊ることは自然発生的であったはずである。板倉町で特に舞踊として採り上げるとすれば、盆踊りと念仏踊りの二つであろう。盆踊りは最初天上界から先祖の霊をこの地上に迎え、ともに現世を踊り狂ったのに始まったといわれているが、手拭いで頬振りするのは靈魂がその顔を隠すことから始ったろうとか、両手を合わ



大杉 雛子のおねり

せて打つ拍手は、靈魂を地の底から現世に呼び戻すことから始つたらうとか、いろいろの説はあるが、たしかに盆踊りはただ単に一人が自由に踊るものではなく、集団である一夜を現世の人間と幽界の人間とが一つになって楽しむものであったことは事実である。念仏踊りも、もともと盆踊りであったもので、それが別々になってしまったに過ぎないのではないかと思われる。ただ今回の調査では、盆踊りそのものの集団でやるものは見られなかった。

盆踊り 梶谷の集會場で、八木節の調査をした時に、「ブツ切り節」とよばれるものを披露された(本稿民謡の部参照)が、その時に頼んでこの節に合わせた踊りを見たいと希望した結果、やつと短時間に実演してもらったものだけ見られた。増田又吉さん(七十五才)と島村ますさん(五十八才)の二人に踊ってもらった。いずれも現在行われている盆踊りとは大差はなかつたが、二人とも手拭いのほかは全部手踊りであること、手と足を左右同時に使う踊り方が主であったことは注目された。



三つ切り節の踊のポーズ

しかも島村さん

の場合に、片足を前に出し、その方向に向かって両手を三回打つ動作や、手を使うのに、石投げ踊りとよばれるようにボンと前に突き出す動作などが引く手差す手の美しさとともに古い型式を思わせた。

念仏踊り 高島部落の婦人の年寄りばかり九名から同地の集會所で和讃の披露と同時に実演してもらったのである(和讃については民謡の項参照)が、ここの念仏踊りはたしかに和讃について来た念仏踊りであるが、し



念 仏 踊

り、時々合の手に「ヨロイシヨ」と軽く入れ続けてゆく。今回は大日御庭和讃の踊りを見たが、右手右足、左手左足が同時に出来る古い念仏踊りの型がくずれずに遺っている。静かな流れるような踊り方が印象的である。いま一つ、こんどはレトリエーションとか観衆に類する華やかな踊りとして、お里沢市の壺坂を見たが、この時は鉦の代わりにも扇を使って踊った。ちょうど八木節が手踊から手拭踊へ、さらに花笠踊へと変化した



念 仏 踊—壺 坂 の 踊

かしその中に民俗芸能的な要素もいくつか持ちつづけられていることに気付いたのである。ここの老婆たちは昔からこの念仏踊をやっており、斎藤たいさん(八十才)などが元老株になっている。服装は盆踊りあるいは念仏踊によく使われる紺の緋の単衣物を着、手に鉦を持っている。この鉦は別に台をつけている。これを左手に持ち右手の小槍で打ちながら踊る。一人の音頭取り(実は歌い手)が和讃を歌うと、それに合わせて踊

ことによく似ている。

たとえ和讃の念仏踊りで、ある宗派が特定の信者を得るために普及した念仏踊りであっても（この念仏もそういふ経緯はあつたとのこと）その中にかなり古い型式をのこしている点で十分注目されてよいであらう。群馬県内にはこの程度の念仏踊りでも他にはほとんどないことは不思議であると同時に、板倉町の念仏踊りが保存されなくてはならない大きな理由にはなる。



式（下につづく） 取 弓

若い層は、こうした古くさいものを何時まで真似て受け継ぐかが問題であると思えば、この際記録に遺すことも一つの対策であらう。

なお、念仏踊りは同郡では現在邑栗郡邑栗村篠塚の小林しようさん（八十才ぐらい）が近所に教えたものがわずか遺っていることを付記しておく。この踊りは鉦と鈴を使うということである。邑栗郡地方は、むかしから念仏踊りが盛んであったことは、大正六年発行の「群馬県邑栗郡誌」の中に、又念仏踊と称するものあり、是れ老婆等の寺院に集会して、六字の名号を唱へ、夜中に舞踏するな



式 取 弓

り。是れ踊念仏をなすは仏の踊躍歡喜といへる心なるべし。其の他万部踊、豊年踊等所によりては弘の。要するに、農家の娯楽は、日常労働するを以て、一日半日の閑を得て其の労を慰せんが為に行う者にして、時代に因り多少其の趣向に変化あり。（五二二頁）と報じているが、当時からすでにこの念仏踊が郡下にさかんに行われていたことを教える。現代との関連を知る上に参考となるので引用しておいた。

■ 榎谷の弓取式と

引継ぎ式

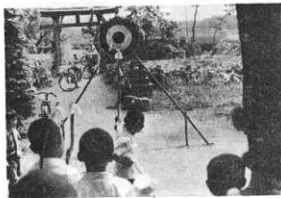
一、弓取式

榎谷の長柄神社で毎年正月十日に行われる特殊神事である。七つの部落の当中番部落から選ばれた男の子（十才前後の者を標準として）が十一才か十五才ぐらいまででむかしは家の後継者を優遇するために長男と定めてあつたが今は二、三男でもよい）が、神社の拝殿に昇り、儀式のあと、ウツギでつくった弓と籬ダケの矢を授けられ、社前につくられた的に向かつて矢を射込む儀式である。一種的占いの神事であり、武士のやつた流鏑馬のような尚武的な成人式に意味を持たせた行事のようである。

祭が近づくと、七部落のうち当番にあつた部落の氏子代表がすべての祭の準備をする。的はタケを割つたものを円くして紙を張り、直径八〇センチぐらいとし、中央を黒色次ぎの周円



式 取 弓



弓取り式—子供が射的するところ

的場に射手の子供が揃うと、大世話人が先ず自分の弓に矢をつがえ、中天に向けて満月に引きしぼり、大きな声で、「テンビョウブリ」と叫び矢を放つ。これは天空の悪魔を射つための仕草だといっている。テンビョウブリの意味については村人もよくわからないといっているが、電乱の多い地方であるから、電害を防ぐ意味の言葉かも知れない。この大世話人の初矢がすむと、いよいよ子供達の番になる。それぞれむしろの上

を白色、外側周囲を茶色に塗る。的の外側に色紙で房をつける。これを二メートル六〇センチぐらいのタケを×字型に交又した結接点の所につける。そしてタケの上方に御幣束をつけ、交又したタケの根本は圓え杭を打ってこれに縛りつけてある。本殿に向かいあつて立てられている。時間が来ると、神官、氏子惣代、当番が本殿に昇り着座する。やがて神官の抜いがあり、祝詞が奏上され、玉串奉奠と型通りに行われる。終わって「冷酒まわり」という直会の酒が廻わる。そこへ男の子供が列席して、一人一人に神官からウツギの弓と笹竹の矢が授けられる。弓はウツギの木を曲げ、両端と弓手のにぎるところに白紙がつけられている。タケの矢は赤と青の色紙が巻いてあり、矢羽のところも色紙を使っている。七人の子供達の次ぎに大世話人にも神官から弓が渡される。次ぎに神官が、「各各の場に出ますよう」と宣告すると、大世話人の先導で男の子も的場（本殿前の広場）に出る。



弓取り式—總代が「テンビョウブリガ」と叫んで虚空に矢を放つところ

宮貫前神社では毎年神事としての射的の神事が行われているがこれはすべから的に向かつて矢を射かける。若し誰かの矢が中央の黒星に命中すると、参会者は的に飛びついて的を奪い取り、その周囲の色紙の房の奪いぐらをする。この房は悪魔除けになるといって着物の襟に縫い込むとともに、戦争のある時代は武運長久の祈願にもされたという。もし何回射ても中央の黒星に当たらない時は最後に大人が射当てて行事を終わる。群馬県内では他にない特殊神事であるが、一



弓取り式の家壁に書かれた「大」「小」の文字、小は朱色のため、かすかしか写っていない。

この弓取り式に当番をやった家の壁に、「大」「小」の紅白の文字が大きく書かれる。大は白字、小は赤字で書かれる。村人の話では、大は天の悪魔、小は人間の悪魔だといっているが、私はむしろ利根郡や吾妻郡などでいわれる天から降りて来る悪魔とされる「ダイロクテン」の大であるかとも



弓取り式——的の飾りの奪い合い

ではないかと考えるのもそう無理でないかも知れない。この弓取りは年の始めの占いであるとともに、成人式と天の悪魔を払う神事などが結合したものでないだろうか。

二、引継ぎ式

矢張り榎谷の長柄神社で執り行われる神事であるが、七部落が一年交替で当番をやることになっているが、その事務引継ぎを本殿で厳肅な神事として行なうための儀式である。一年間の事務量を一本に引き継がず、二分の一を正月に、二分の一を六月に渡すことになっていたが、今は正月十五日と七月十五日にする。昔は旧暦の正月と夏の六月十五日（八坂祭の日）の二回だった。今回の調査したのは夏の引き継ぎ式であった。夏の時は特別にカタラン草という珍しい草を添えるのが例とされている。この草は厄病除けに効き目があると信ぜられている。

考えるし、ダイロクテンに備えて、各戸の庭先きに、ダイマナク（大眼）とシヨウマナク（小眼）といつて、ザマ籠

の底を外に向けたり、ミソコシなどの底を外に向けて置く風習と関連した習俗ではないかと思う。ザマとミソコシを大きな眼玉に見立て、空から降りて来るダイロクテンが怖れて寄りつかないためだと信ぜられているが、そのダイマナク、シヨウマナクの代わりに、大・小の文字を書いて置き、天からの悪魔を払ったの

この引き継ぎ式では祭に使う器具などが渡されるが、いまその順序を追ってここに説明しよう。

「只今から長柄神社の引渡式を行います。関係者は御神前に願います」

と司会者区長が宣告し、「拝礼を願います」で一同拝礼し、「正規の座におつき下さい」で、正面に宮司が座わり、それから司会者が、右側に大世話人の誰々さん、左側に二十五区の誰々さん、副元の誰々さん、渡番



式 引継ぎの榎谷

の代表本年当番誰々さん、受取番の代表誰々さん、給仕として誰々さんと一々座を指定して着席させる。そして「用意ができましたので行事に入ります」と宣告して式にかかる。まず朗々と高砂の謡曲が歌われ、その間に酒を注ぎ看

（キウリもみ）をはさんでやる。そして謡の四海波を一同唱和してこれが終わると、渡方から、

「本年の当番としてかくの如く立派に果しました」といって盃をあげると、引取方が

「本年度の当番まことに御苦労さまでした。本年の当番としてしかと引き受けました。立派に引き受けます」

といつて無事に引き継ぎが終了すると、司会者が、「只今のように無事滞りなくすみました」といって、司会者から終了をつげ、最後にそのま



引 継 ぎ 式 の 語

ま式をしめるシャンシャンの手打ち式で終わる。直会の時に謡曲千秋楽が謡われ、看としてあといくつか謡曲が行われたという。

この引き継ぎ式の謡曲は古い観世流である。一般にはどうだかわからないが、こうした行事の中に古い謡曲が生きていることは興味をひかれる。「昭和六年正月うたい本」というこの儀式に使う謡の自写本によると、高砂、四海波、千秋楽のほか、「長き命を」「御子孫も」「松たかき」「松が嶺の」「浪花津に」「雪とのみ」「長生の家にこそ」「しんようのいのほとりにて」「花咲かば」「釣のいとまも」「ろくじかげ」「秋来んと」「白妙に」「有難のよごや」といった謡い出しのものが記録されているのを見ると、かなり多く謡われていたことがわかる。能の翁式三番の謡いが見ると、かなり多く見られる。このことは、石塚や岡の式三番との関連がここにつくとも見られる。(本稿民俗芸能の項参照) 式三番の減り去ったあと、その時の謡が、こうした行事に継続したということも考えられるからである。

県下の他の地域でも、村役の事務引継ぎが多く正月行われるのを慣例としていたが、それは契約(けえやく)と称する集会の席上で執り行われるが、観谷の引き継ぎ式のような例はほとんど知られていない。神に誓って責任をハッキリしたこの村の式はその面から見ても興味ある行事といえよう。(昭和三十六年十一月三十日脱稿)

追 記

この報告書を一日延ばしに延ばしていたのは、折を見て再調査をしなければならぬ不明な点疑問の点が多かったからであるが、多忙と健康を害していたためにこの機会がなく、ある点では非常にボヤけてしまっている。現にこの執筆も病院に通い薬倒に親しみながらのものであって筆者としては不本意の点もあるが一応報告の責任を果す意味で出稿することにした。なお民謡の特許が、本調査後地元の小中学校の職員の手で行われ、別に本報告書に収録されることになったことは幸である。歌詞の如きも筆者の採集と一部違っているが、これは伝承者がちがうためで止むを得ないことである。併せて参照願えればと思いい一言付記することにした。

麦 打 ち 歌



1. じょうゆな よ い と - - こ -
 2. あかさな つ つ じ - - に -
 3. きてはな ら ら ち - - ら -
 4. きょうもな と ま ら - - ぬ -



ア - おやまか - ま わ - - く -
 ア - はるなの - わ ら - - び -
 ア - おもわせ - ぶ り - - な -
 ア - あ - ぎの - ちよ う - - - -

田の草取りの歌

♩ = 84位



さ て は - び あ - - かす かす - の - - - -



や - - - 3 - - め どこの - にしん



の - - - たまご - - - や ら

土 端 歌

—ほううちうた—

ホ イ ヤ ハ イ ト コーラー

サ ヨ

ヨ ホイ ヤ コーラー

あーや こーえてさー くるのはー みなさん

ソ レ

ヨ ホイ ヤ コーラー

おやー ねーそのかれば のよーなー ももはきはして

ソ レ

○印はほうちのりスルがはいるところ

土 端 歌

一ぼううちうたー

(い)のリズム→

ヨ イ コー - - - ラ サ - ヨ

ヨシガラ

マ ハ - - - ア ヲ - - - ホラ

サ - ヨ

ヨ ホイ -

くいばち歌

音藤しゅう、佐藤とくひ伝

④は変拍にうたう。

威勢よく

レ --- ニ ヤ レ ソ タ エ
 ト ヤ レ --- ヤ レ --- ヤ レ コ ノ
 エ ヤ ラ ヤ レ --- ヤ レ
 エ ヤ ラ ゼン テ バ エ ト ソ レ ナ リ ダ ー ド ヤ レ ー ニ
 ヤ レ コ ノ --- エ ヤ エ ー ニ ヤ レ ー ニ
 ヤ レ ---

○印ハワイヲ打ツリズムガアル

藻 取 り 歌

♩ = 72 位



糸ひき歌

♩ = 76 位

1. い と を ひ く - な ら - - む ら な く - ほ
 2. あ け て ふ し - な し の - - き ん の - -
 3. お と こ く ま な が し の - - ま さ と や ん - -
 4. ご ん じ ゅ く ひ と - え の - - ひ と が - -

せ - - - く と ひ コ イ ナ -
 い - - - と と ひ コ イ ナ -
 り - - - も も ひ コ イ ナ -
 - - - い ひ コ イ ナ -

機織歌

♩ = 58 位

さ れ て - こ ま る ま い ち は の - - い -

- - - と が さ れ て - - から ま

さ - - さ ん の - い - と

祭 文

♩ = 80位

ひとつとせ... ちともしり
 たる... おおみ... は...
 し... う... さん... ねん... いの...
 とし... きゆうの... しちかつ... たなはた...
 あちら... こちらの... おおれ...
 さくも... みの... した... いな... リ

盆踊りの歌

—くどまがし—

♩ = 100位



1. さあていちごのむらみなさまよーいよんであ、
 2. やまじやあかきかほるなかにみよきーいほだいの、
 3. あまきばおりなすもみじのにしきーいおいら、
 あけまほーせのえいせきは、
 しらぬのーやまたにだに、
 3までもーなおらぬやまい、
 さてはじょうしゆだにっぼんいちばーいおに、
 ほだかしらわぬやまたにだにーいおな、
 ぼかといんほとこいわたらいのーあな、
 きこえしーほんどうたろう、
 わかほかーやまほととぎさ、
 やまいはーじょうしゆへこさ

念仏踊り

♩ = 72位



きーう
 ちよーうらーい
 あーりーが
 たーやー7ヨイ

調査委員一覽表

氏名	役職等
相葉 伸	文学博士・群馬大学学芸学部長
池田 秀夫	県立博物館学芸係長
井田 安雄	前橋市立女子高等学校教諭
今井 善一郎	群馬県文化財専門委員
上野 勇	県立沼田女子高等学校教諭
都九十九 一	群馬県文化財専門委員
萩原 進	群馬県文化財専門委員
関口 正巳	藤岡市立第二小学校教諭
森田 保次	民俗学研究者
矢島 胖	民家研究者
大崎 福寿	県教育委員会事務局
近藤 義雄	〃
高橋 猛虎	〃

調査協力者一覽表

機関名	氏名
板倉町	根岸 倉重、小森谷 義一
板倉町教委	野木村 弥五郎、宮田 茂 外多数
板倉町立東小学校	黒野 仲雄
西	砂川 三十、長谷川高市、大塚 留吉
南	川田 茂、荒井 久七、小野田 勇
北	島野 定義、妻倉 泰明、福富 稔
東中学校	鈴木 好男、川島 政次、小暮 新八
西	斎藤 素彦、荒井 昇、高瀬礼次郎
南	関根 昭
北	島田 正夫、岡島 輝男、多田 卓
坂村	坂村 孝雄
北	荻野 倫将、木村 政夫、飯塚平八郎
前橋放送局	大井寿美雄、松下 登
その他	板倉町各区長、雷電神社、各字古老大勢

氏子総代	三六
うすこへえこ	三六
うすぶれ	三六
うせもの	三六
うだつ	三六
ウチガミ様(屋敷桶荷)	三六
うっそり	三六
うっちやりっこ	三六
宇都宮の羽黒山	三六
ウナギカキ	三六
ウナル木	三六
卯の日	三六
ウブダ	三六
ウブダ	三六
産立	三六
ウブダノカエ	三六
ウマオリ	三六
ウマノツムジ	三六
馬の乗り初め	三六
ウママヤ	三六
ウマヤダチ	三六
ウメハカ	三六
(ウメハカ)	三六
梅干	三六
うらへら	三六
ええい	三六
エナウメバカ	三六
エビ講	三六
えびす様	三六

海老背	三六
エビ大根	三六
エビブツアイ	三六
エブロン	三六
えもち	三六
エンガツ柱	三六
えんぎ	三六
エンギ田	三六
縁組	三六
オイビスサマ	三六
オイベス様	三六
おうだい	三六
おえびす様	三六
大杉様の御興	三六
大杉信仰	三六
大杉神社	三六
大杉神社の春祭り	三六
大杉囃子	三六
太田の吞竜様	三六
オオダマ	三六
大晦日	三六
大晦日	三六
大晦日	三六
オカギ様	三六
オカギサマ	三六
阿の式三番	三六
オカマ様	三六
(オカマ様)	三六
オカマダンゴ	三六

おかまのだんご	三六
オカマ柱	三六
おかみ	三六
オキ(おき)	三六
オキパドコ	三六
オキバリ	三六
オタノマイ	三六
オタリイタチ	三六
おくり念仏	三六
おくりんち	三六
オコヨト	三六
オコヨト	三六
オコヨト	三六
おこり	三六
オコヨト	三六
おさこ	三六
お産・誕生祝い	三六
お地蔵様	三六
お七夜	三六
オシブツチ	三六
オシメ(おむつ)	三六
オシヤ	三六
おしゅか様	三六
おしゅんぐり	三六
お正月の飾り花	三六
オシウジン	三六
オシラキ	三六
オシラキ	三六
オゼンタテ	三六
オソウゼン(音刺)柱	三六
おそ行事	三六
オソデン柱	三六

お供えくずし	三六
おぞばか	三六
オタキアゲ	三六
(おたきあげ)	三六
おたらし	三六
オチャベエ	三六
オツコヨコチヨイ	三六
おてんたら	三六
おてん念仏	三六
おとうり山	三六
オトウミヨウ	三六
オトカ(おとか)	三六
オトカ(おとか)	三六
オトカ(おとか)	三六
男ヨシ	三六
お年玉	三六
オナベ(夜なべ仕事)	三六
オナメミソ	三六
オニオロシ	三六
オニタマ	三六
オニダマ	三六
オニドン	三六
お念仏	三六
オヒンダイ	三六
オヒンダイ	三六
オヒマチ(おひまち)	三六
オヒメリギモン	三六
お百度参り	三六
おびや(おびあき)	三六
おびや	三六
オブスナ様	三六

楠木神社	二四	口説き節	二七	熊野様	二〇	熊野詣り	六	幕の市	七	ぐれもく	二〇	タワイレ(くわ入れ)	三	タワ入れもち	三	桑摘み唄	二六	ケエンチ	七	ケエド	九〇	下向ダンゴ	二〇	元三大師	二〇	ケンチン汁	二〇	コイセコウ	二〇	庚申講	六、六、六	(庚申)講員	六、六、六	庚申様	六、六、六	庚申塔	六	庚申の(アタリ)	六、六、六	庚申の(あたり)日	六、六、六	庚申様の誕生日	六、六、六	庚申信仰	六	庚申塚	六	庚申まいり	六
------	----	------	----	-----	----	------	---	-----	---	------	----	------------	---	--------	---	------	----	------	---	-----	----	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-----	-------	--------	-------	-----	-------	-----	---	----------	-------	-----------	-------	---------	-------	------	---	-----	---	-------	---

庚申待	六、六、六	庚申待と地震	六、六、六	庚申待の禁忌	六、六、六	(庚申待の)食(へも)の	六、六、六	庚申待の由来	六、六、六	コウセン(こうせん)	三、五	コウチ(コーチ)	六、七、八、九	コーチ總代	九	コーチブキアイ	六、六、六	こうで	弘法大師(弘法様)	二〇	牛王	二〇	五月の節句	六	こがねもち	六	ゴキ	二〇	こくぞう様	二〇	ごころおしみ	二〇	コジハン	二〇	腰まき	二〇	(五十五だんご)	二〇	小正月	六	コ精進	六	個人墓地	六	ゴシンボク	六	子育観音	六
-----	-------	--------	-------	--------	-------	--------------	-------	--------	-------	------------	-----	----------	---------	-------	---	---------	-------	-----	-----------	----	----	----	-------	---	-------	---	----	----	-------	----	--------	----	------	----	-----	----	----------	----	-----	---	-----	---	------	---	-------	---	------	---

子育鬼怒神	三六	子育地藏	三六	子育ての地藏	三六	コドルマ	三六	コトビ	三六	コトジマイ	三六	コトハジメ	三六	子供専用墓地	三六	(子供)遊び	三六	子供仲間	三六	子供(いたす)	三六	子供の夜泣き	三六	子供墓地	三六	こぶ観音	三六	こぶ地藏様	三六	ゴボボタ餅	三六	ゴマミソ	三六	米の粉	三六	米の麦	三六	小モタズ	三六	コモタズ	三六	コケーンヌ	三六	権現様	三六	権現沼	三六
-------	----	------	----	--------	----	------	----	-----	----	-------	----	-------	----	--------	----	--------	----	------	----	---------	----	--------	----	------	----	------	----	-------	----	-------	----	------	----	-----	----	-----	----	------	----	------	----	-------	----	-----	----	-----	----

コンジン様	三六	金比羅様	三六	婚礼(贈答)	三六	再行	二〇	祭典(コトウガシラ)	二〇	歳末諸事	二〇	(歳末の)餅つき	二〇	祭文	二〇	サオプチ天井	二〇	サカサフジの田	二〇	魚	二〇	サカナタウケ	二〇	サガリ(ゲヤ・下屋)	二〇	作業唄	二〇	サシキ	二〇	サセ	二〇	サタ	二〇	里(さといも、サトイモ)	二〇	砂糖	二〇	ささくや	二〇	ザツコ	二〇	ざつべえ	二〇	さつまいも	二〇	サナブイ	二〇	猿田彦(大)神	二〇	サルダヒコノミコト	二〇	さわり	二〇
-------	----	------	----	--------	----	----	----	------------	----	------	----	----------	----	----	----	--------	----	---------	----	---	----	--------	----	------------	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	--------------	----	----	----	------	----	-----	----	------	----	-------	----	------	----	---------	----	-----------	----	-----	----

板倉の民俗

昭和三十七年三月二十八日印刷
昭和三十七年三月三十日発行

非売品

編集兼発行者

群馬県教育委員会

発行所

群馬県教育委員会事務局

印刷所

前橋市前代田町二八一
朝日印刷工業株式会社

電話(2)
七五八四
七二八一
七〇五五番

正誤表

頁	段	行	誤	正
17	上	1	高島早川敏夫氏宅 オカガ様	高島： オカガ様
23	上	14	草案	草腹
26	上	15	魚撈	漁撈
27	上	19	エビブツテリ	エビブツテリ
28	上	9	…資料を別記する…	…資料を別記する
35	下	9	三ツ荒神	三ツ荒神
67	下	18	ナイ刈、ナイ刈	ナイ刈、ナイ刈
84	上	8	◇	◇
105	下	20	◇	◇
105	下	26	調査こぼれ 話の1行	
115	上	10	神宮 細滅	神宮 細滅
119	下		Ⅲをとり	Ⅲをとる
121	上	9	Ⅳ禁忌その他	Ⅳをとる
124	上	9	庚申様	庚申様
127	上	4	かきつるし	かきつるし
128	四段目	13	◇	◇
141	二段目		白雨天	白雨天
142	◇	4	(南・高島…)	(南・高島…)
142	四段目	12	はひかぜ	はひかぜ
144	一段目	6	南地区	南地区
148	四段目	3	とげぬき地蔵様	とげぬき地蔵様
149	附記	9	当つてきた	当つてきた
154	上	1	Ⅳ排水機の出来るまで	Ⅳ排水機の……
155	下	1	調査こぼれ話④、⑤	調査こぼれ話④、⑤